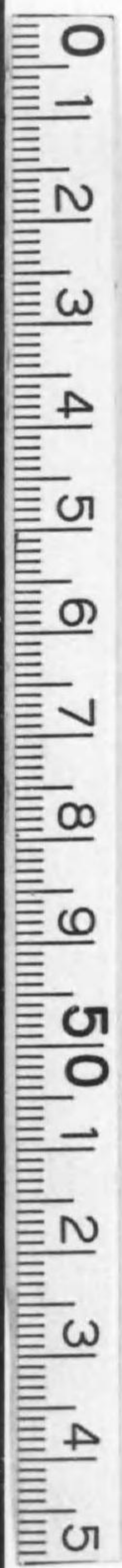


910.8-Ko453  
1200500754864

010.8  
453  
2870



始



240 19

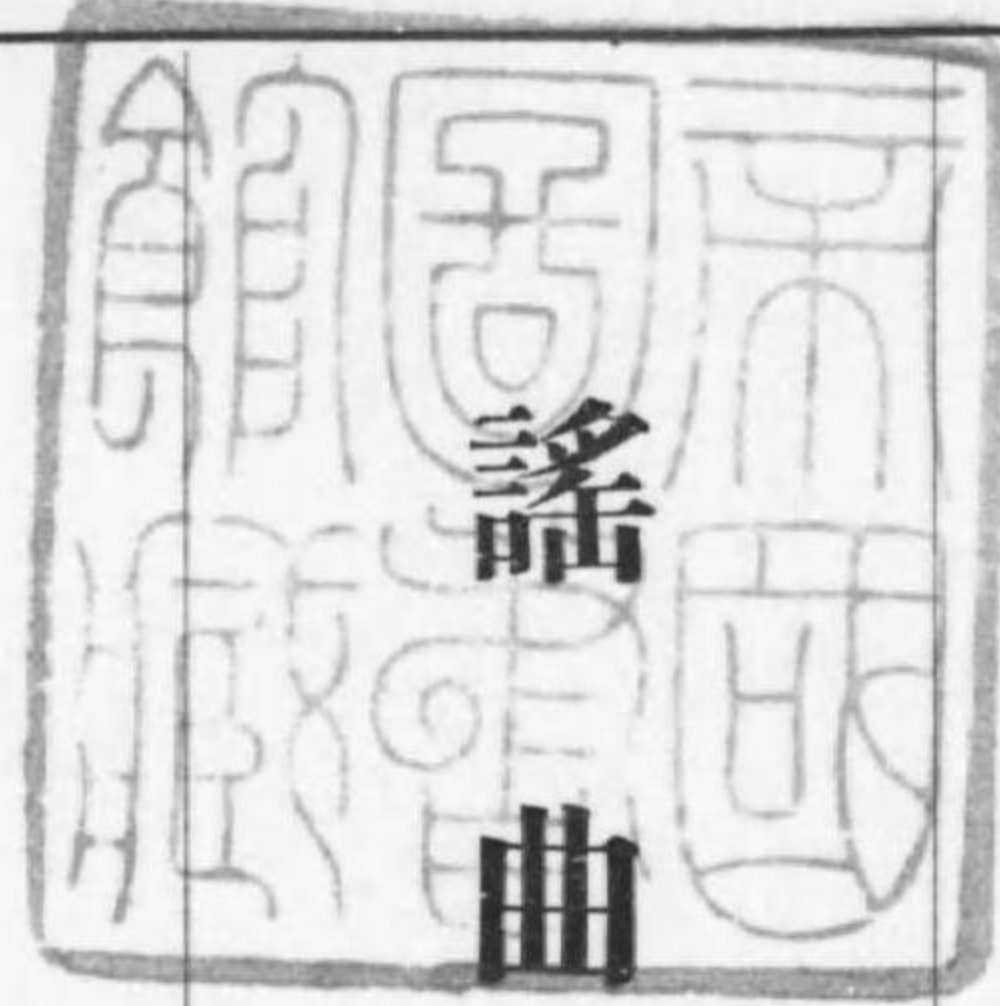
# 謠曲講義

大谷大學教授 能勢朝次著

【國文學講座全二十八冊ノ内】

28

910.8  
K0453  
(28) ㊦



大谷大學教授

能勢朝次著

(國文學)  
講座 28

講義

全



株式會社  
平凡社內

受驗講座刊行會

910.8  
K0453  
Q819  
~~601-12~~

謠曲講義

目次

緒言	一
隅田川	一六
景清	五一
熊野	八九
砧	一三九

謠  
曲  
講  
義

# 謠曲講義

言

講師 能勢朝次述



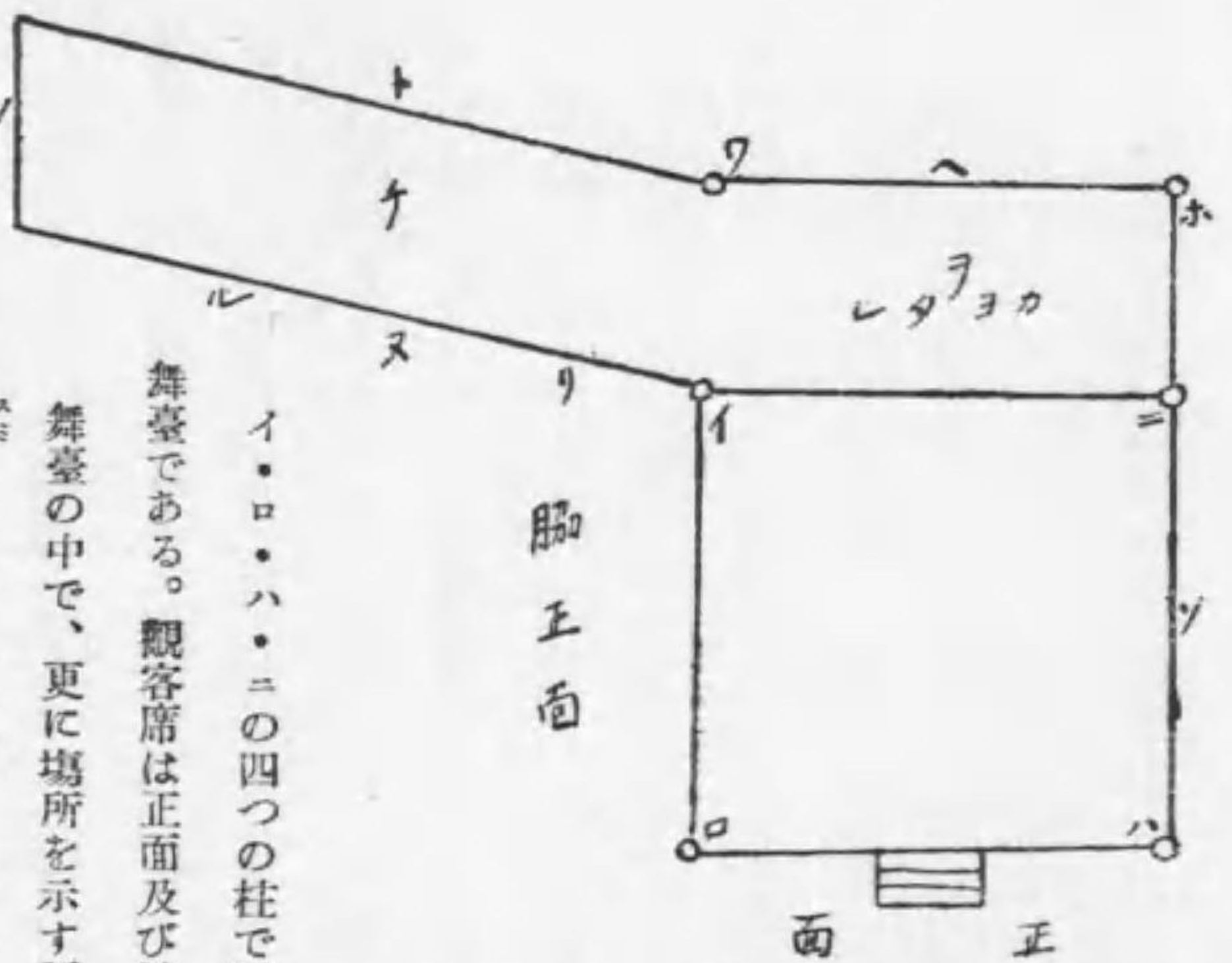
謠曲は能樂の詞章である。能樂は室町時代に大成せられた一種の樂劇で、歌と囃子と舞踊との綜合藝術である。その歌の部が即ち謠曲である。従つて謠曲を知りこれを鑑賞し玩味するには、必ず能樂の立場に立つて、そこから詞章なり曲節を味はねば、その眞味は出て來ないわけである。即ち先づ詞章の文意を解釋して、訓詁的注釋的な研究を行ひ、次に其の曲節を聞いて、其の節廻しなどが、如何なる度合に其の詞章の持つ情趣や氣分を生かして居るかを味はひ、更に第三には、親しく能舞臺に於ける役者の演出を見て、その樂劇的效果と詞章の持つ文章の魅力との關係に思ひをひそめるべきである。能を見るといふ事は、謠曲詞章の解釋には大して必要がないと思つてゐる間は、まだまだ謠曲詞章の味はひを知ることは出來ない。

能といふ藝術は實に驚嘆すべき價値に富んだものである。象徴藝術として、世界に誇るに足る魅力を持つて居るばかりでなく、これを内に見れば、王朝時代の優艶雅麗な情味、武士道や禪などから來る氣魄の雄大さ、氣合の鋭どさ、嚴肅な緊張味等を含み、足利期から發展した我國藝術の極致ともいふべき寂びの情味を満々とたゞえてゐる。一度能

の味はひを知る時には、歌舞伎劇などは再び願うといふ氣になれないとまでいはれてゐる。能は鑑賞がむつかしい。演ぜられる曲の世界へ没入して、眞に我を忘れるといふ恍惚境には、中々に入り難い。それは能は目で見耳で聞いて、しかも眼だけで見、耳だけで聞くべからざるものであるからである。歌舞伎劇は目で見ればわかる。しかし能は心眼を開き心耳で聞かねば駄目である。心眼で見るとは、換言すれば自己の魂で見るのである。全身を眼として見るのであり、全身を耳として聞くのである。このためには、曲目の詞章の周到にして精密なる鑑賞がその第一階梯をなすものである。詞章の文句に囚はれずして、詞章の間を流れる氣分情調の流動に目をそくぐこと、これが謡曲詞章を生きて理解する唯一の道である。

能は能舞臺といつて、方三間ばかりの板敷と、其の横手の、丁度歌舞伎劇の花道に當る所の、橋掛といふ廊下との上で演ぜられる。畧圖で示せば、(次頁参照)

- (イ) 仕手柱 (シテの動作の起點となる柱であるからこの名がある)
- (ロ) 目付柱 (シテが常に目標として見る柱であるから此の名がある)
- (ハ) 脇柱 (又ハ大臣柱)(脇の座に近いから、この名がある)
- (ニ) 笛柱 (笛吹く者の座に近いからこの名がある)
- (ホ) 切戸 (地謡、後見等の出入ある口)



- (ヘ) 鏡板 (舞臺の背景になる部分。老松を描いてある)
- (ト) 羽目板
- (チ) 橋掛り (幅一間半。長さは三間、五間、七間等種々ある)
- (リ) 一ノ松 (又、ニノ松、ル) 三ノ松
- (ヲ) 横板 (イ、ニ、ホ、ロの間。舞臺の縦板張りに對して横板張りであるから、この名がある)
- (ワ) 後見柱 (又ハ狂言柱) 間狂言、後見人等の着座する席に近いから此の名がある)
- (カ) 笛柱 (ヨ) 小鼓 (ク) 大鼓 (レ) 太鼓
- (ソ) 地謡席 (此處に地謡を誦ふものが、六人乃至八人二列に列座する)
- (ツ) 揚幕 (橋掛と、鏡の間とをしきる幕。シテロキなどの出入する口である。)

イ・ロ・ハ・ニの四つの柱で圍まれた方三間の舞臺と、チに當る廊下即ち橋掛が役者の活動する舞臺である。観客席は正面及び脇正面の兩側に設けられる。

舞臺の中で、更に場所を示す語がある。仕手柱先きをシテ座又は常座などいひ、目付柱のあたりを角といひ、脇柱先きをワキ座、正面の先を正先、中央を正中後方大小鼓の前のあたりを大小前といひ、仕手柱と目付柱との間を脇正といひならはしてゐる。(此等の名稱は、講義の中で、時々出て来るから特に述べたのである。)

能役者即ち能を演ずる役者は、二三人が普通であるが、時には七八人乃至十餘人にも上ることがある。この中、劇の主人公に扮する者をシテといひ、シテの相手になる者をワキと呼ぶ。能は要するにシテの藝を見るもので、シテ一人を本位としたものである。脇はシテの相手をつとめ、シテの藝を引立てる役に過ぎない。こゝが劇と大に異なる處であつて、能が歌舞から發達したものであることを示す所である。シテ、又はワキを助ける者をツレと稱し、シテに付き添ふものをシテヅレ、ワキに付くのをワキヅレと云ふ。シテ及ワキは如何なる曲でも各々一人に限るが、ツレは人数に制限が無く、曲によつて異なる。此外に曲によつては、子方コカマといつて、軽い役に扮して出る少年もあり、トモと稱して供奉の官人や太刀持などに扮して出る者もあり、アヒと稱して、従者、里人、船頭などのやうな端役ハナタテを勤める者が出る事もある。アヒは間狂言師がつとめる。

能の種類。能樂一日の興行には、其の出し物に一定の順序を追ふこととなつて居る。普通には、神・男・女・狂・鬼といふ順に排列せられる。神能は、神事能又は脇能ともいひ、祝言シウゲンの意をこめたもので、翁や高砂・弓八幡・鶴龜・三輪・竹生島・賀茂等の曲である。神社の縁起や神の徳をのべ、御代萬歳を祝す意をふくめたものである。男能は又修羅物シユラモノともいふ。多く武人の幽霊などがあらはれて、戦争に關する事を物語りなどする所から、この名稱がある。田村、八島、兼平、清經などがその例である。女能は又鬘物カヅラモノともいひ、優艶な女性があらはれて、幽玄な舞などを舞ふ

のが普通で、熊野、松風、井筒、野宮、羽衣の類である。第四番目は狂クラヒであるが、これは必ずしも狂者が出るとは限つて居ないが、角田川、百萬、三井寺の如き狂女ものが特に賞玩せられたために、此の名が生れたものである。人情を主としたもので、戀慕哀傷等を演じて人に感動をあたへるものがこの所に置かれる。又現在物といつて、シテが幽霊でも化身でも無い所のもの、鉢木、七騎落のやうな曲もこの第四番目におかれる。第五には、最後であるために、賑はしく人氣に投ずるやうな曲、例へば土蜘蛛、紅葉狩、船辨慶の如き鬼物オニモノ、鞍馬天狗や是界の如き天狗物テンノウモノ、正尊、夜討會我のやうな太刀打物タチウチモノを出す。これも必ずしも鬼とは限つて居ないこと、前の狂と同じである。尙時によつては、第六番目に祝言の意をあらはす猖々、岩船等を出すこともある。この配列によつて、一日の興行に變化あらしめて、観客を倦ましめないやうにするのである。

能樂の沿革。講義に直接必要な事項では無いが、能樂の沿革について、常識として心得て置かねばならぬと思はれる條項を、極く簡単に述べることにする。

能樂は以前は申樂サルガク(又猿樂とも書く)と言つた。申樂といふ語の意味は、元は滑稽な物まねをして、人を哄笑せしめる意味に用ひられてゐる。今の能樂も、其の源流を溯つて鎌倉期に到ると、まだ滑稽物まねの演技に過ぎなかつた。それが足利義滿の時代に到つて、今の能樂のやうな藝術的なものに改革せられた。それは觀阿彌・世阿彌などいふ非常な天才的な樂師の努力によるものである。



申樂を業としてゐたものは、足利初期には随分と多い。近江には宮増座、大和には竹田座、山田座等があり、丹波には本座新座等があつた。その中、大和申樂が後の能樂の源流を作つたもので、竹田座は後の金春となり、山田座の系統から觀世、寶生が出で、阿拜座は後の金剛となつたと思はれる。而して觀世座は、觀阿彌清次に到つて俄然として傑出した。清次の家系は、伊賀の平氏の系統である服部の杉ノ木といふ人の孫に當る者が、三人の子を生んだ。それは長男が寶生太夫、次男が生一、三男が清次である。

觀阿彌清次は元弘三年に生れた。彼の少年時代に於ては、申樂も漸次進歩して、從來の歌舞の諸要素を取り入れ、劇的なものに發展しつゝあつた。清次は不斷の努力と天分によつて、一層これを立派なものに上げたのであつた。そして、永和四年の今熊野の申樂の時、三代將軍義滿に其の藝を認められ、其後は特別の保護を受けた。世阿彌元清は觀阿彌の子であつて、此年は十二歳の少年であつたが、これ亦義滿の殊寵を受けた。この將軍といふ保護者奨励者を得たことの、能樂發展の上に及ぼした影響は絶大なものであつた。

世阿彌は斯道の天才であつた。彼は父の藝風を襲ぎ、其他近江申樂や他座の特長をよく攝取して、眞に藝術的な申樂に發展せしめた。そのみではなく、彼は多くの謡曲を新作し、又古今獨歩の稱ある藝術論を遺した。吉田東伍博士によつて發見せられた世阿彌十六部集がそれである。

世阿彌によつて、申樂が大成せられ、それと共に大和四座の申樂は觀世座を中心として、益々發達したために、他の丹波や近江の申樂は、漸次に衰へ、こゝに觀世、寶生、金春、金剛の四座が申樂の家として基礎を固めた。今の四

流は、この流を傳へてゐるのである。尙現在の喜多流は豊臣氏の頃に傑出して居た喜多七太夫なる人が、徳川秀忠の時代に一流を起したものであつて、四座に比べると歴史が新しいものである。(此の七太夫は金剛座から出た人であるといふ説が行はれてゐるが、中には金春座から出た人であるともいふ説もあつて、未だ確定したことは云べない)以上の四座一流の中、觀世、寶生カキガハといひ、金春、金剛、喜多シヤカハを下懸とよび慣らはしてゐる。

能樂が眞に大成せられて、其の發展の頂上に達したのは、徳川時代になつてからである。徳川時代になると、能は武家の式樂となり、各座の太夫はそれぞれ將軍又は諸侯から扶持を賜はつた。かくて生活上の安定を得たことは各座の太夫をして、一意専心藝道に精進せしめ、従つて名人も輩出し、又それ等が益々改良と深化をはかつたために、元祿時代までには、發展の極に達した。それより後にも勿論名手は多く出たが、大體の傾向は保守的であつて先人の型を踏襲して、それを内面的に生かす方面への途をたどつた。かくて明治維新に到つて、一時は衰へたが、現今に到つて、益々隆昌の傾向を示して居る。そして現今では、多くの藝術鑑賞家によつて、益々能樂の眞價が認められ、世阿彌十六部集の發見以後、其の偉大な藝術論に打たれた人々は、再び能樂の價値を教へられたのである。

能樂藝術の究極地と謡曲の文章。 能樂藝術の究極地は幽玄といふ理想である。劇的な歌舞を演じて、舞臺上に幽玄の空氣を醸し出し、觀客をして、其の幽玄境に恍惚たらしめれば良いのである。考へさせる藝術でなくて、美に陶醉せしめる藝術である。氣分情調の世界に浸り切ることを目的とした藝術である。

此の幽玄といふ理想は、決して神秘的な意味のものではない。優艶とか雅麗とかいふ意味である。世阿彌は花といふ語で幽玄といふ意を示して居る事が多い。美しい花の盛りの風情とか、王朝時代の貴婦人のみやびやかな美しさとか、さういふ優麗な趣をいうたのである。この幽玄といふ語は元來は歌道の方で用ひられ、歌の究極美を示す語として歌人の理想としたものである。華やかなといつても、けばくしいとか毒々しいとかいふ感じの華麗ではなく、しつとりと落ちついた、ほのかに匂ふ華やかさである。餘韻に富み氣品の豊かな美しさをいふのである。能樂はこれを目的として發達したものである。

此の幽玄をねらつた能樂は、其の根柢を歌舞の二曲においた。舞の幽玄と、歌謡の幽玄、この二つが能の土臺を作り、基礎を作るものである。この土臺の上に、物まねといふ建築を立て、すべての物まねを、幽玄といふ原理によつて、支配し統一したものが能である。

物まねは一の摸倣である。舞臺の上で、或は老人、或は女人或は狂人、或は鬼天狗などの眞似をして見せるのである。こゝに能の劇的な所がある。安宅であれば、義経主従が、安宅の關所で、富樫を欺いて偽勳進帳をよんで、無事に關所を通りぬけるしぐさを舞臺上でやつて見せるのである。しかし能は芝居のやうに寫實的にはやらない。芝居ならば馬に乗つて出る所でも、能では鞭一本持つて出て、それで馬に乗つた所を象徴する。落馬でも、舞臺上でトンと足踏一つ踏んで、それで落馬の象徴なのである。即ち能は物まねを演ずるが、それは寫實でなくて、象徴なのである。象徴とは一を示して、十を想像で補はしめる行き方である。事實を寫すのでなくて、事實の趣をうつすのである。

寫趣といふ新造語を使用すれば、能は正に寫趣の藝術である。この寫趣といふ特色の中に、能が物まねを幽玄といふ理想によつて、統一し支配してゐる姿がはつきりとかゞはれるではないか。

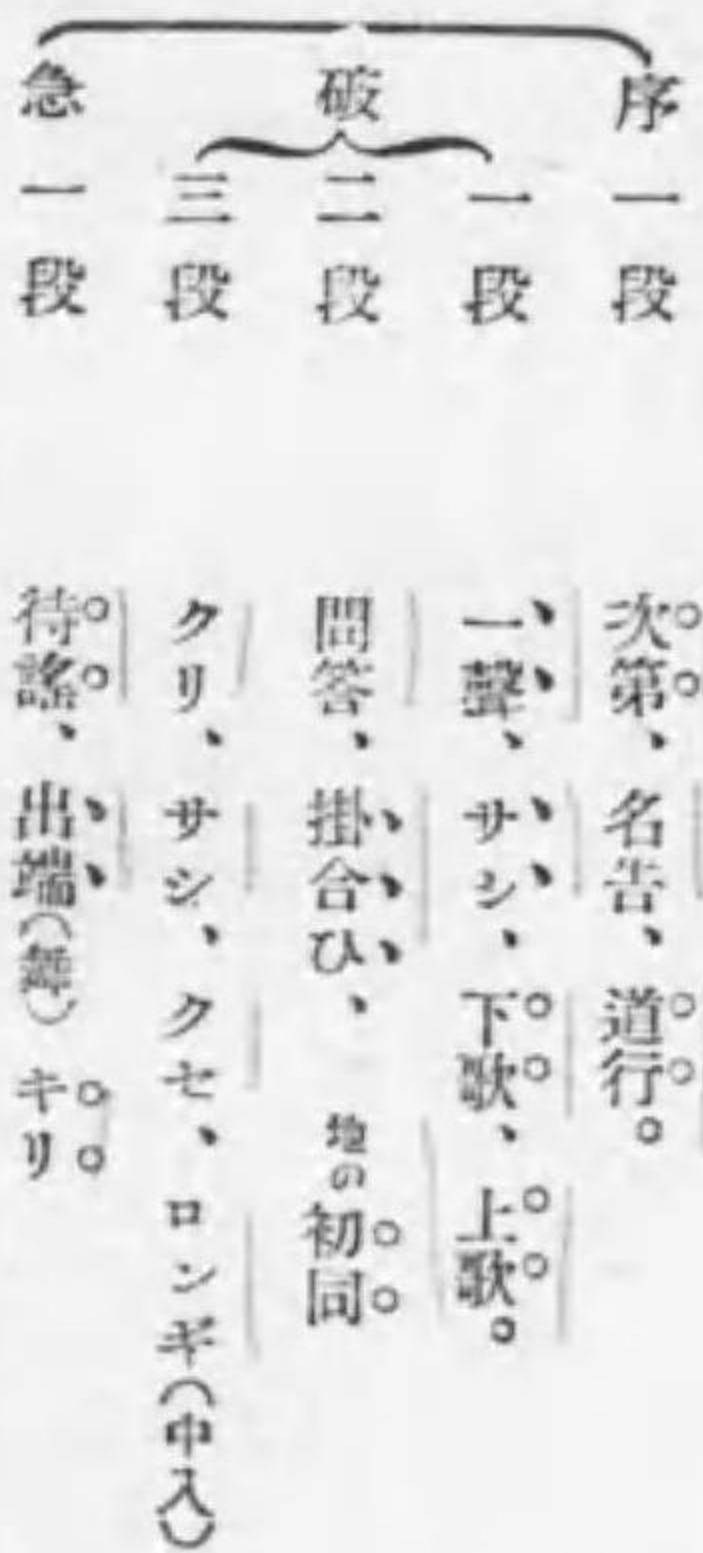
謡曲は、この能の幽玄な情趣を醸し出すことを目的として、創作せられた文章である。決して讀まんがために、所謂物語りとして作られたものではない。謡曲に對しては、先づ此の區別と特徴をはつきりとさせてかゝらねば、中心を失つた讀み方となつてしまふ。謡ふがための謡曲であり、それを謡ふことに依つて、一の氣分情調をこまやかに醸し出すがための謡曲である。この爲に、謡曲を作り出すには、世阿彌は三つの道を示して居る。

世阿彌の示した三つの道は、十六部集の中で能作書といふ。題の下にのべられてゐる。第一を種といふ。曲を作るべき題材の撰擇に關しての論である。第二を作といふ。曲を作る場合に、其の曲の序破急を考慮して、構想することはいふ。第三を書といふ。これは構想が出来た上、その文章を成す道についての論である。これ等を知る事は、謡曲の文章を理解する上に、非常に役立つことであるから、次に要領をのべることにする。

謡曲の素材のとり方に於て定められた法則は、其のシテに當る人物が、歌、舞又はそれに類する舞や働きを成すに足る人物でなくてはならぬといふことである。天女や神女や乙女は神樂の舞歌でこれに適するし、業平や光源氏のやうな歌人。妓王、妓女、靜の如き遊女は或は歌に或は舞にすぐれた人物であるから、これ等を本體として作るがよい。さうでない人物ならば、それを舞歌をさせるに適當な人物に作りかへて主人公とせよといつてゐる。これは能樂

が、歌舞の二曲を其の根本とし土臺としてゐる點から考へて、至極もつともな注意であるし、又一面、如何なるシテを出しても、其處に幽玄といふ情調をかもし出すといふ根本條件から見ても、成程とうなづかれる處である。かくの如く、素材のとり方の根本的態度に、普通の芝居とは著るしい相違がある。芝居は人情の葛藤を現實的に演出して觀客に實感を起させるのが目的であるが、能は幽玄な歌舞を見せて、その情趣の世界にひたせれば良いのである。

次に謠曲の構想に於ては、全體の曲の進行を緩かな氣分から、切迫した氣分の流動へと進めてゆく様な風に考へられてゐる。全體を音樂的な進行に見立て、音樂上のテムボの變化を示す序破急の三段に分けて、一曲を構成する。序一段、破三段、急一段の五段進行の形に整へるのが正式である。而して大體その各段の句數や、謠ひ様までが規定せられてゐる。例を高砂に取つて見ると、



の如くである。右の中、右傍に圈點のない部分は詞で語られる部分。、は節付けられ謠はれる部分であるが、大小鼓の拍子に合はない部分。○○は節付けられ謠はれて、拍子に合ふ部分である。

此の五段の變化は、根本を音曲的進行の原理に置いて分つたもので、芝居の如き戯曲的脚色の變化に置いたものではない。若し脚色とか場面の變化等を中心として考へるならば、芳賀博士が唱へられたやうに複式能と單式能に別つのが論理的である。しかし能は前述のやうに情趣を味はふ藝術である。その立場から考へると、この五段の變化は、又五つの情趣進行の音曲的な變化を含んで居るものである。そこが一曲の變化を面白くさせる所であるから、我々はこれを無視することは出来ないのである。

第三に、謠曲の文章であるが、これに關して世阿彌は、先づ其のシテの種類によつて、此の人體であるならば、如何なる詞を書くべきかを考へ、次に其の曲目が、祝言のものか、戀慕哀傷などの情を中心にするものかなどといふ點を考へ、それに適切な言葉を、詩歌、物語等の人口に膾炙した名句の中から選び出して書くべきであるとのべてゐる。

謠の文章、殊に詞以外の謠ふ部分の文章が、故事、古歌、漢詩、經文、偈頌、古物語などの名句を、つぎはぎしたものが多いことは、作者自ら意識して、努めてさうした文章に綴つたものである。これも近代の文章眼から見れば、三文の價値もないやうに言はれる所であるが、それは未だ謠曲といふものゝ本來の使命をさとらない者の言であると批評すべきであらう。

謠曲に美辭麗句の多く用ひられてゐるのは、幽玄な氣分情趣を豊富に醸し出すために、誠に必要な用意である。瑰麗な文句は、讀み飽かず謠ひ飽かない。そして度々それを讀み謠ふ時には、其の言葉の持つ匂ひや情趣が、自づと讀

者の心を満たしてゆく。意味をたどつて読む文章は、読む度合の重なれば重なるほど、讀者の心を刺戟する度合が減少してゆくの反して、情趣を味はふ文章は、読むに従つて、讀者の生命と文章との交渉が深まつてくるものである。これが益々進む時には、讀者は自己の生命を其の文章の中に読み、その生命に感激を覺えるやうになるものである。こゝに到つて、古人の使用した瑰麗な詞章は、其の言葉の持つ語感の世界を通して、古人と讀者とを結合せしめ、古人の感じたと同様の優雅な情趣の世界へ讀者の詩魂を導いてゆくものである。この情調の世界へ讀者の魂を導いてゆくといふことが出来れば、謠曲の文章の使命はそれで盡くされたといふべきである。若しあの謠曲の文章を、室町時代の「おじやる」行かしめ」式な言葉で行つたならば、どうしてそこから幽玄などいふ氣分が生れよう。

又謠曲の文章は、其の文脈が正しく連つて居ない部分が多い。従つて意味を口語に譯し出すことの不可能なやうな難解な場所も少からずある。これも若し謠曲が机上で讀むべき文章であつたならば、正に致命的な缺陷といはねばならない。しかし、謠曲は舞臺にかけて謠ふものである。大體の意味さへ通つておれば、後は情趣を豊富にかもし出すことさへ出来ればそれで良い。散文のやうに長々と冗く書かれては、第一間のびがして謠へたものではない。又舞臺にかけて生きてこない。それで、世阿彌もなるべく言葉をつとめ、不要な部分を切り除けるべきことを繰返し繰返し述べて居る。謠曲の文章の特色は、情調の變化推移を中心として文章をすゝめてゆくものであつて、文體を正しく草紙地には書いて行くべからざるものである。この立場から翻つて謠曲の文章を見直して見ると、誠に雲霧を拂つて白日を望む感がある。文章として難解な所があれば、それを文章語脈を追うて解釋しようと思はせらずに、その文中を流

れる氣分情調の變化流動を先づ把握して、その立場から各句の持つ力を考へて見るといふこと、これは謠曲詞章を解する一の鍵である。

又時代と文章との關係から考へると、謠曲の文章が、あの様な文章とならざるを得ない消息が、はつきりとするものである。謠曲の作られた時代は室町時代である。平安朝の爛漫とした文化は、鎌倉時代に近づくに従つて、絢爛な美しさがやゝ去り、沖淡なさびしい味はひが現はれそめてゐる。そこに生れたのが幽玄の味はひであつた。その文化も源平武士の馬蹄にふみにじられ、鎌倉將軍の質素簡朴を主義とする行き方のために、文化は一時地に墜ちた。わづかに貴族階級に、和歌や連歌のたしなみがあるといふだけである。こゝに人心を支配したのは佛教である。室町幕府となつて政權の地は京都に移つた。將軍義滿の如きは華奢を極めた。そこに起る文化は、要するに武士といふ成り上り者の文化である。

彼等武士階級は其の文化の程度に於て、到底平安朝貴族の持つただけの爛爛たるものを作り出すことは出来ない。しかし彼等は、恰も成金者流がしきりに骨董品を好み買集めるやうに、わからぬながらも平安朝文化を憧憬し模倣しようとした。彼等は源氏物語を全部として鑑賞するの素養に缺けてゐる。従つて彼等は源話中の有名なる文章や名句を少々味はふことによつて、憧憬を満した。平安朝人の讀み得た支那詩文を全部に亘つて讀めない所から、和漢朗詠集の短い詩句を知ること満足した。しかも彼等は平安朝文化にひたり切るだけの素養に缺けたために、自己の鑑賞

し得る範圍内で、武士的文化と平安朝文化をつきまぜて、一種變つた文化を作り出して、それに陶酔して居たのである。北山に三層の樓閣を建て、金箔を押して喜んだ義滿將軍の趣味、それは室町文化の姿であつた。謡曲も此の文化から生れたものである。

鎌倉時代の詞を對話の語に、平安朝の名句を謡ふ部分の文章に、そしてそれを割合に破綻なく融合させ、平家物語の文章をねらつて作り出したのが謡曲である。謡曲の文章は、將軍義滿の姿である。又謡曲の文章が名文句のつなぎ合せて、氣分情調の流れによつて文章そのものが裏打ちせられてゐる點は、足利時代の特有文學である連歌を思ふ時、又一つの解決の暗示をあたへられるものである。連歌で前句と附句との連りは、其の二句間の氣分情調のつながりのわからぬものには不明である。その代り、二句の間の微妙な氣分の連りを感じ得るものには、謡曲詞章の間の氣分流動などは充分に感じ得られるものである。足利時代には此の他に氣分を味はふ藝術は大に發達して居る。これ等の諸點を考へる時、あの謡曲の文章は、又室町文化を象徴したものであるとも言ひ得ると思ふ。

緒言が甚だ長くなつたが、最後に参考書をあげて置く。なるべく普通手に入り易いものだけをあげる。

- 一、世阿彌十六部集 一卷 明治四十二年、吉田東伍氏校訂
  - 二、禪竹集 一卷 大正四年、吉田東伍氏校訂
- 右は能樂の本質を知るには不可欠の書である。

三、謡曲拾葉集

廿卷

寛保元年版、乾貞怒、惠南兩氏著、近年國文注釋全書中に收められてゐる。

四、謡曲評釋

十卷

明治四十年、大和田建樹氏著。

五、謡曲叢書

三卷

大正三年、芳賀矢一、佐々木信綱兩氏校訂。

六、謡曲大鑑

三卷

大正十五年、目下續刊中、齋藤香村氏著。

右は註釋書として手に入り易く参考になるもの。

七、能の葉

六卷

明治廿六年、大和田建樹氏著。

八、能謡秘訣

一卷

大正二年、大和田建樹氏著

右は能を見る時の參考資料として、初歩の人に適當。

九、能樂大辭典付圖

一卷

明治四十一年、正田、雨谷氏共纂。

右は能面、裝束、作り者、持物等を知るに適當。

十、能樂全史

一卷

大正六年、横井春野氏著。

十一、能樂盛衰記

二卷

大正十四五年、池内信嘉氏著。

十二、日本歌謡史

一卷

大正十五年、高野辰之氏著。

右は能樂の沿革、歴史、變遷等を知るに必要なもの。

隅田川

隅田川すまたがわの作者。能本作者註文（大永四年編輯したもので、吉田兼持の作といふ。此の時代は室町時代の末で、應永の申樂興隆時代から約百二十年ばかり経た時である。謡曲作者を記した古記録としては、十六部集に次ぐ古いものである。）には、世阿彌元清の作としてあり、二百十番謡目録（明和二年、觀世元章の著したもので、時代は徳川後期である）には、觀世十郎元雅とある。これは何れとも決し難いが、世阿彌十六部集さぶくたんの申樂談儀まねがたの中に

「すみだ河の能に、うちにて、兒もなくて、殊に面白かるべし。此能は現はれたる兒にてはなし、亡者なきもの也、ことさら其の本意をたよりにすべしと、世子申されけるに、元雅はえすまじきよしを申さる。かやうのことは、してみても良きにつくべし、せずば善惡定めがたし」

といふ條がある。隅田川の子方こかた（梅若丸の亡靈）を實際に舞臺上で使用することについて、世阿彌と其の子の十郎元雅とが意見をのべ合つた所である。「亡者だから實際の子供を舞臺で使はないが良い、子供のあらはれてゐる心で演ずれば良い」といふのが世阿彌の意見で「私には子方を使用しなくてはこの能はやれませぬ」といふのが元雅の答である。この問答から考へると、私は元雅の作と見たいと思ふ。即ち元雅が新作して演じて見た結果について、父の世阿彌が彼の意見をのべたものであると考へるのである。若し世阿彌が自作自演して、型の出来て居た曲であるならば、元雅は當然父の型に従つてやつたであらうし、わざわざ子方を使ふといふやうな新しいやり方はすまいと思はれるからであ

欠

# 欠

【語釋】 ○リキ詞 謠曲には、節付けられて謠ふ部分と、朗讀風に語る部分とがある。正本を見て、文字の右傍に、所謂胡麻點こまてんといふ節點ふしはかせの付けてある所が、謠ふ部分であり、何もない部分が語る所である。この語る部分は大體に鎌倉時代の言葉を用ひてあつて、謠曲の作られた室町時代の詞ではない。この語る部分を詞ことばといふのである。リキ詞はリキの語る詞、男詞は男の語る詞である。○是は 自分はいふ意である。舞臺に出で、先づ自分の名を名告るのであるから、「是は」以下の文章を名のりと呼びならはしてゐる。○舟を急ぎ 渡船の業を急ぎといふ意。○大念佛 多数の僧が集つて大聲に念佛を唱へることである。參詣の俗人も勿論その中に混つて唱へるのである。○申す事の候間 申すことがある故。○其由皆々 其の座に居合はせる者に向つていふ詞である。但し能ではリキ一人のみである。○男、次第 ワキヅレの男(都の者)の謠ふ次第である。次第とは、謠曲に於ける特有の術語で、ワキの次第、シテの次第、地の次第の三つに分れるが、何れも七五の句を二度繰返して、次に七五の句でとどめた文章である。即ちこの次第は、ワキの方の次第であつて、末も東の旅衣といふ七五の句を二回くりかへし、次に目も遙々の心かなさいふ句でとどめてある。次第といふ言葉は、佛家の方で使用する次第音といふ唱へ方から起つたものである。次第は謠曲に於ては、これから何等かの局面が展開しようとする序詞であつて、その中にうたはれる内容は、常にその次々に續いて來る章句の上に、永く影響を及ぼすものとせられてゐる。○末も東の旅衣 末は旅の行末である。自分の目ざしてゆく所は遙かに遠い關東であるから、旅路の日數も遠く思ひやられるといふ意である。こゝは男が都に於て、出發せんとする時の心持をのべたものであつて、これから次の道行文が起されるのである。目もは衣の紐に言ひかけ、はるんくのはるは衣を張るに言かけてあるが、詞の上の掛言葉で意味には關係はない。○かやうに候者は 是はといふと同じく、自らを名のる詞である。この名のりに、「抑々是は」是は「かやうに候者は」の三種の詞が謠曲には用ひられてゐる。大體、重い役の時には「抑是

は」で、割合に軽い里人とか狂言方などには「かやうに候者は」が用ひられ、「是は」と出るのはその中間である。こゝはワキは船頭であるが、ワキの位であるから「是は」となり、ワキツレ男であるから「かやうに候者は」となつてゐるのである。○道行 目的の地へ達するまでの途中を叙する部分である。平家物語などにも道行文が行はれて居る。多くは旅次の地名と、旅する者の感懐を織りまぜた七五調の文章である。謡曲では道行は必ず節づけて謡はれる。○雲霞あと遠山にこえなして 通り過ぎて来た山々は、振かへれば遙かの後方に雲霞に包まれて遠ざかりゆくことをいつたのである。簡潔な用語で旅路のはかどりを言ひ切つて居る。和漢朗詠集に、紀齊明が雲を題として詠じた「山遠雲埋三行客跡」といふ詩句を下に持つて書かれた詞である。○いく間々 幾つかの關所々々を通り過ぎてゆく道中にての意である。いくは越えなして行くと、幾關々と掛詞になつてゐる。○急ぎ候程に 急いでゐる中の意。○如何に船頭殿 如何には、呼び掛ける詞である。「もし〜」とか「おーい」とか「これ〜」とかいふのと同じ。○乗らうずるにて候 乗らんずるにて候の音便。乗らうと思ふのだ。○中々の事 「中々」又は「中々のこと」は謡曲狂言等に多く用ひられる語であつて、「左様々々」然り等の意に用ひられることが多い。相手の言を諾した時の語である。こゝでは、「宜しい、御乗りなさい」の意。○けしからず 甚しくの意。怪しくの意である。けしかり怪しかり」と「怪しからず」とは同意である。すは打消の「ず」ではない。形容詞的に用ひたものである。○物騒 物さわがしい。○さん候 左様に候の意。然に候の音便。○是非もなく たわいもなくの意。仕方なしの意ではない。

【評釋】

以上が世阿彌の所謂「序一段」に當る所である。先づワキを出して、隅田川の渡守であると名告らせ、今日この在所に大念佛のある由を言はせる。この大念佛は梅若丸の一周忌を弔ふために、所の者の行ふのであるが、こゝでは簡単に「さる仔細あつて」とのべてゐるのは、後段に於ける船中に於ける物語と重複せぬための用意であ

る。次にワキツレの都男が登場して、關東下向の志をのべ、道行を終つて、「急ぎ候程に」の着ゼリフから、ワキとの問答になる。こゝでワキツレの口から都より女物狂ひが下つて狂ひ舞うてゐる由をのべると、ワキも興を動かして、其狂女の来るまで舟をとめて、それを見物しようといふ。この狂女こそは梅若丸の母である。失はれた我子を戀ひ慕つて狂氣になり、都から遙々の武藏まで尋ねさまようて来たものである。こゝに於て作者は「破第一段」に於ける狂女シテの出現に對して、充分なる豫期の緊張を観客にいだかせる手腕を、充分に發揮して居る。

こゝに一つ注意し度い事は、狂女といふものゝ性質である。謡曲でいふ狂女は、普通にいふ精神病的な氣違ひとは全くちがつたものである。亂暴をはたいたり、一日中黙つて居たり、或は取りとめもない事を口走つたりする様な狂者ではない。深い心の傷手のために、少し神經過敏になつて、女性としてのつゝましやかさを時々失つて居るといふ位である。能樂に現はれる女性は幽玄の位を失はない。優美雅麗の品位それは能の女性の特徴である。平安朝時代の上流貴婦人のあてにみやびかな風情、それは幽玄の理想であると世阿彌も述べて居る。おぼどかにつましやかな、一寸見では内裏雛のお人形のやうなのが平安朝の女性であり、能の女性である。しかし平安朝の貴婦人とても、無感情では更々無い。人並に嫉妬もすれば悲嘆もする。しかし彼女たちは、それを露骨に表情動作にあらはす事ははしたなしとて退けたのである。能に於ける狂女はこの女性のつゝましやかさを、一步踏み出して見せたものである。姫御前としてあられぬ所、ふりなり言葉なりがちよい〜と顔を出す……それが狂女である。然して狂女であると侮つてかゝるワキなどは、大ていの狂女物では、直ぐにボン〜とやり込められ言ひまくられるの



が常である。普通の平安朝上臈には出来ないこの藝當の面白味が、能の狂女の面白い所である。この消息は後段に到つて明になるであらう。

能舞臺に於ての型。先づ囃子方ハヤシカタ（大小鼓、笛）が座につくと、作り物ツクリモノ（梅若丸の塚になぞらへたもの、四本の柱に引まはしの布をたれ、上に柳の造花を葺いたものである。）を大小前ダイサイマへに出す。その中には子方が入つて出るのである。次にワキ登場して、名告りを述べて脇座の方に下に居る（下に居るといふのは、片膝立て、坐した姿勢をいふ）次に、次第の囃子につれて、ワキヅレ男が出で、仕手柱先で名告り、道行を語り終つて、ワキとの問答になり、物狂ひの來るを待つ心で、ワキ、ワキヅレ共に脇座に下に居る。かくてシテの出現となつて、能は破の段に進むのである。

シテサシシテサシ「げにや人の親の心は闇にあらねども、子を思ふ道に迷ふとは、今こそ思ひ白雪の、道行き人に言傳て、行方を何と尋ねらん。聞くやいかに、上の空なる風だにも、地チに松に音する慣あり。」（歌）シテ「眞葛が原の露の世に、身ミを恨みてや明け暮れん」これは都北白河に、年經て住める女なるが、思はざる外に一人子を、人商人に誘はれて、行方を聞けば逢坂の、關の東の國遠き、東とかやに下りぬと、聞くより心亂れつゝ、そなたとばかり思ひ子の、跡を尋ねて迷ふなり。下敷地「千里を行くも親心、子を忘れぬと聞くものを、上敷地」とよりも、契假なる一つ世の、契假なる一つ世の、その中をだに添ひもせで、こゝやかしこに親と子の、四鳥の別これなれや。尋ねる心のはてやらん、武の國と、下總の中にある、隅田川にも着きにけり、隅田川にも着

きにけり。

【語釋】 ○人の親の心は 後撰集、十六、平兼輔の歌「人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道に迷ひぬるかな」を使つたのである。 ○今こそ思ひ白雪の 今こそ、兼輔の歌の心持が、しみじみと思ひ知られるといふ意である。思ひ知らるのしらに白雪をかけ、「白雪の」は、次の道行きを呼び出す序詞の用をしてゐる。「しらゆき」と「みちゆき」と同じ韻であるから、序詞に用ひた。従つて、白雪といふ意は無いものも考へるべきである。 ○道行人に言傳て、東國へ旅する人々に傳言して、我子の行衛を尋ねても、如何とも尋ねるすべもないとの意。「何と尋ねらん」は「何と尋ねべき」の意に用ひてある。しかし、尋ねらんと推量にしてある所に、自分が傳言して頼んで居るに、何の音づれもないのは、一體どんな尋ね方を人々はして居てくれるのだらうといった様な情感を生み出す力があるやうに思はれる。 ○聞くや如何に この語は、新古今集、戀の宮内卿の歌「聞くやいかにはうはの空なる風だにもまつに音する習ありとは」を、そのまま使つたものである。意味は上空を吹き渡る無情な風でさへ、人を待つといふ心を知つては、松に音づれて來るのが慣はしである。それに我が思ひ人は、自分がこれほどに待焦れてゐるのに、何の音づれもせないのはどうしたものか。我が思ひ人は、無情の風すら待つ者に訪れるといふ慣あることを聞き知つてはゐないのかといふ意である。 ○地 地は地謡の略稱である。こゝは、シテが「上の空なる風だにも」と謡ふと、その次の「身をうらみてや云々」は地謡が謡ふのである。 ○眞葛が原の露の世に 「眞葛が原の」は前を受けて次の「露の世」を起す序詞に使つた言葉と見る。新古今集、戀、慈鎮の歌に、「我戀は松を時雨のそめかねてまくづが原に風さわぐなり」といふ歌がある。それを下に含んで、前の「松に音する習あり」とある句を、松時雨の名所である「眞葛が原」で受け、その原の露時雨から次の「露の世

に」を呼び起したのである。露の世は果敢ないうき世の意。○身をうらみてや 我身のつたない運命を恨みつゝ、此の露の世を明かしくらすことなにかといふ意。やは軽い疑問を含んだ詠歎のやである。○是は、こゝからシテが名告る所である。しかし詞でなくて筋付けて讀ふのである。○北白河 京都の東北方の地名。○思はざる外に 思ひがけなくしの意である。○人商人 幼童や婦女を賣買する者であつて、亂世のことであるから、誘拐された者は多くはこれ等の餌食となつたものであらう。○行方を開けば 我子の行きし方を人傳に聞くとの意。○東 關東地方を漠然とさした詞。○せなたとばかり 我子の行方は東の方よとばかりに思ひつめつゝの意。○下歌地 下歌とは下音で讀ぶ部分である。下歌地は、地讀が下歌を讀ぶことを示す詞。○千里を行くも 白氏文集に「親千里行不忘子」とある文句を使つたものである。故郷をはなれて、千里の遠い所へ行つても、親は子のことのみが氣にかゝつて忘れられぬものであるとの意。○聞くものを 詩句を引用したので、聞くものと受けたのである。さうした言葉さへあるんだのにの意。○契假なる一つ世 諺に「親子は一世、夫婦は二世、主従は三世」といふ。親子の縁は現世だけのものであるとの意。假なる一つ世とは現世の意と、かりそめの此世といふ意を兼ねてゐる。○其中をだに 其の現世の間すら、一所に住むことなくしての意。○こゝやかしこに 子は東に、親は京都に。○四鳥の別これなれや 四鳥の別とは、孔子家語、顏回篇に「回聞、桓山之鳥、生三鳥焉、翼既成、將分于四海、其母悲鳴而送之」云々とある故事から出てゐる。古文にのべられてゐる桓山四鳥の別れの悲しみは、全く我身の上のことであるとの意。○尋ぬる心の果やらん 心の果といふ中に、道の果の意もきかしてある。

【評釋】 こゝでシテが出現して、能は所謂破の段にすゝむ。こゝは先づシテ(狂女、梅若丸の母)の感懐を述べる所からはじまる。「實にや」から「明け暮れん」までがそれである。先づ親心の闇の歌を用ひて、狂女の心中を數言の

中に言ひつくした所など極めて巧である。この、人物が登場して、先づ謠ひ出す一、聲やサシは、簡單な表現の中に、其の人物の感懐を凝縮せしめた感があるものである。言葉簡にして餘情益深いといふべき所である。而してこの感懐は三段の波動をなして進んでゐる。「實にや人の親の」と、重んじると靜かに謠ひ出す所に、子を失つた親心の悲みがあらはれ、「道行人に」云々のあたりからは、探すに由もない失望の詠歎が色こくあらはれてゐる。「聞くや如何に」からは、感情は第二の波瀾を起し、失望の底から段々と感情が激して切迫して來るのであつて、風すら待つ者には音づれるのに、我子の便りの全く無いといふことは、一體どうした事かと、恨みの色が心をそめてゆく。更に「眞葛が原に」からは、前の激した心が、我身を果敢なみ悲しむ感じへと移動して、あゝ自分はこの露の如き果敢ない世に、我身の運命の拙いのをなげきつゝ明しくらさねばならぬのであらうかと、再び憂愁の底へと沈んでゆくのである。「是は都北白河」からシテの名乗りである。更に地の下歌上歌の部分は、再びシテの感情をのべ、文集や孔子家語の故事古語を使用して、別趣の味を出して居る所を注意すべきであらう。

能に於ける型。前段で、ワキ及びワキヅレが脇座につくと、囃子方は一聲の囃子を始める。そして觀客が靜まり返つて來ると、シテは揭幕から靜々と橋掛に歩み出る。摺箱の衣に白色の水衣をまとひ、黒色の女笠を冠り、笹の小枝を肩にしてゐる姿は、清楚な中に愛の心持が漂つてゐる。そして橋掛を四分の一ばかり歩んで一の松のあたりで、正面を向いて靜かに一聲謠を謠ひ出す。「道行き人に」と右受け(少しばかり右向くのをいふ)で、道行き人に言傳てる心持を出し、「行方を何と」で正に返し(正面に向き直る)「尋ぬらんで」二足ばかり詰め足する。そして聞

くや如何に」と謠ひながら篋を肩より下しつゝ舞臺へ入つて来て、地謠が「松に音する習あり」と引きとると、しては仕手柱先きの常座で拍子二つ踏み、正面へ乗込拍子二つふんで狂亂の形を示す翔になるのである。それを終つて正面に直し「是は都北白河の」と名のり、「跡を尋ねて迷ふなり」の所で、泣く型のシオリがある（シオリは顔前二三寸の所まで掌を近づけて、少し俯向く形である。能ではどんな悲痛な慟哭でも、これ以上の寫實的な泣き様はしない）「子を忘れぬと聞くものを」で二足詰め、「假なる一つ世の」と開いて（開くとは體を開く形で少し下る型をいふ）据拍子踏み、「こゝやかしこに親と子の四鳥のわかれこれなれや」と出で、開き、「尋ぬる心の果やらん」と脇正面の方に向つて二三足すゝみ、「隅田川にも着きにけり」で、振返つて大小前の方へ向つて行き、返しの間に脇に向つて開いて、直ぐに「なう〜」と脇に向ひ呼びかけるのである。

シテ詞「なう〜我をも舟に乗せて給はり候へ」ワキ詞「お事は何くより何方へ下る人ぞ」シテ詞「これは都より人を尋ねて下るものにて候」ワキ詞「都の人といひ狂人といひ、面白う狂うて見せ候へ。狂はずは此の舟には乗せまじいぞとよ」シテ詞「うたてやな隅田川の渡守ならば、日も暮れぬ舟に乗れとこそ承るべけれ。マシかたの如くも都の者を、舟に乗るなと承るは、隅田川の渡守とも、覚えぬ事な宜ひそよ。」ワキ詞「げに〜都の人とて名にし負ひたるやさしきよ」シテ「なう其の言葉はこなたも耳にとまるものを、彼の業平も此の渡にて、マシ名にし負はゞ、いざこと問はん都鳥、我が思ふ人は、ありやなしやと、詞なう舟人、あれに白き鳥の見たるは、都にては見馴れぬ鳥なり。あれをば何と申し候ぞ。」ワキ「あれこそ沖の鷗候よ」シテ「うたてやな浦にては千鳥ともいへ鷗とも

いへ、など此の隅田川にて白き鳥をば、都鳥とは答へ給はぬ。ワキ「げに〜誤申したり。名所には住めども心なくて、都鳥とは答へ申さで、シテ「沖の鷗と夕波の」ワキ「都にかへる業平もシテ「ありやなしやと言問ひしもワキ「都の人を思ひ妻」シテ「わらはも東に思ひ子の、行方を問ふは同じ心の」ワキ「妻を忍びシテ「子を尋ぬるも」ワキ「思ひは同じ」シテ「戀路なれば」われもまた、いざ言問はん都鳥、いざ言問はん都鳥、我が思ひ子は東路に、ありやなしやと、問へども問へども答へぬはうたて都鳥、都の鳥とやいひてまし。げにや舟競ふ、堀江の川の水際に、來居つゝ鳴くは都鳥。それは難波江これは又隅田川の東まで、思へば限りなく、遠くも來ぬるものかな。さりとは渡守、舟こぞりて狭くとも、乗せさせ給へ渡守、さりとは乗せてたび給へ。

【語釋】 ○なう〜 呼びかけの詞である。 ○お事 そなたの意。お前といふに同じ。 ○是は都より 人を尋ねてといひ、子をたづねてとは、まだ言はぬ處に注意。 ○面白う狂うて見せ候へ 狂ふとは、狂ひ舞をいふ。氣狂ひになつて見せよといふのではない。面白く一さし舞へと註文するのである。前にのべた狂女の性質を参照せられ度い。 ○乗せまじいぞとよ 乗せまじきぞの意。とよは接辭である。 ○うたてやな うたてしとは、情なし、あまりなり、笑止なりなどの意。こゝはワキの無風雅なことを非難した語である。やなは二字ともに詠歌の助辭。 ○日も暮れぬ云々 こゝからは、伊勢物語の業平東下りの條を大分と引用してゐるから、その部分を伊勢物語から抄出しよう。

猶行き〜て、武藏國と下總の國とのなかに、いと大なる河あり。それを角田川といふ。その川の邊にむれゐて思ひやれば、かぎりなく遠くも來にけるかなとわび合へるに、渡守は、舟に乗れ、日も暮れなむ」といふに、乗りて渡らむとするに、

昔人もわびしくて、京に思ふ人なきにしもあらず。さる折しも白き鳥の嘴と脚と赤き、鳴の大ききなる、水の上にあそびつゝ魚をくふ。京には見えぬ鳥なれば、みな人え知らず。渡守に問ひければ、「これなむ都鳥」といふを聞きて、「名にしおはいざいこと問はむ都鳥わが思ふ人はありやなしや」と詠めりければ、舟こぞりて泣きにけり。

即ち隅田川の渡守ならば、伊勢物語の昔を思つて、「日も暮れてしまふ、早く舟にのれ」といつて、催促しても乗せてくれるべきであるのに、とワキの無風雅を一本きめつけた處である。○かたの如くも かたとは、しきたり、例、法則、等の意である。まるで規則でもあるかの如くにの意である。○覚えぬ事なのたまひそよ 覚えぬは、思はれない、受けとりにくい意である。餘所の渡守の言葉ならばとにかく、隅田川の渡守ともあらう者の言葉とも思はれぬ様なことを言つて下さるな意。な……それは禁止の詞。よは歎辭。○都の人さて名にしおひたる云々 さすがに都人だけありて、都人の名にそむかぬ優雅風流な所をそなへてあるよの意。○なう、其のことばはワキの詞の中の、「名にし貰ひたる」といふ一語をさらへて、其詞はといつたのである。この語は、名にし貰はゞいざ言とはんの歌の一句である。○こなたの耳にもとまるものを 自分等如き者すらも、聞き知つて居るにの意。ワキの心なさをなじる第二矢である。○名にしおはゞ 都鳥といふ名を持つ鳥ならば、定めて都の事を知つてゐるであらう。自分の戀しいと思つてゐる人は、都で健在であるか、どうかそれが尋ね度いものだといふ意である。この歌はシテが「名にしおふ」といふ語を聞いて、獨語的に言つてゐる言葉と見るべきである。○なう舟人 再びワキへ呼びかけたのである。○あれこそ沖の鴨候よ ワキの第二の失言である。何の氣もなく言ひ放つ所をとらへて、シテの詞が飛びつくやうに「うたてやな」と出る。ワキの面目はまるつぶれとなる。こゝらが狂女者の問答の面白い所である。「鴨ざふらふ」と候の字を濁つて讀む。候が活用する言葉の連用段からつゞく時には、清んで訓み、名詞などに直ぐに續いて、「何々である」といふ意にな

る時には濁つて訓むのが規則である。○浦にては 餘所の海岸などならば、千鳥とも鴨ともいふがよい。○など 「答へ給はぬ」にかゝる詞。○げに〜誤り申したり こゝから、問答は詞でなくて、節をつけて讀み合ふ所になる。問答を節付けて讀み合ふ所を掛合といふ。○心なくて みやびた趣味心もなくての意。○沖の鴨も夕波の昔にかへる業平も 沖の鴨も夕波の夕を掛け、「夕波の」は波のかへることから、次の「昔にかへる」のかへるを呼び起す序詞として用ひられてゐる。従つて「夕波のは意味の連続には無關係である。「昔にかへる業平もは」、「思ひ返せば、昔業平も」の意である。やゝ無理な文脈であるが、これは諸曲文の常である。○都の人を思ひ妻 都の妻を思ひ偲んでのことであるの意。○同じ心の 次の「懸路なれば」を受ける。同じく人を戀ひ慕ふ心であることをいふ。○妻をしのび 業平。○子を尋ぬる 自分。○我も亦 こゝからは、地諸の方で讀みのである。これを同吟ともいふ。シテは諸に合はせて無臺上で様々のかたを演ずる所である。○都の鳥とやいひてまし 都鳥といふ價值がない。田舎鳥といひ度い位ださの意。○げにや舟競ふ 都鳥の聯想から、萬葉集、廿、大伴家持の歌「ふなきほふ堀江の川のみなきはに來居つゝ鳴くは都鳥かも」を思ひ出したのである。舟競ふさは、舟を競はせて人々が上り下るのをいひ、堀江の川の形容詞である。堀江の川は難波の堀江のこゝ、みなぎはは水際の意。○それは難波江 それとは舟競ふの歌をさし、その歌は難波江のことをよんだ歌だがの意。○これは又隅田川の云々 これは我身の上をさしたものである。「限りなく遠くも來ぬるものかな」は、伊勢物語の語句を織込んだもの。○さりとはは さりては同同意。はは接辭で歎詞と考へ度い。それにしても、たごへさうでも、等の意を解する。前の「狂はずば舟にのせまじいぞとよ」に對した詞である。【評釋】 こゝから能は「破の二段に」進む。序に於てワキ、ワキヅレを出し、破の一段に於てシテを出現せしめた。この段に於てシテとワキとの交渉が展開して來るので、能は愈々佳境に入るのである。この段では、問答、掛

合、地謡の同吟と、曲節的方面で三段の變化をして居るが、これが又能に於ける情感の進展切迫の三段的變化を表はすものである。

先づ問答は、シテの乗船を乞ふ詞で始まる。観客は既にシテの心中の苦悶を充分に同情し味はひわけて居るのであるが、ワキはたゞ單なる狂女としてシテに對してゐる。従つてシテが悲痛な聲で乗船を頼んでも、ワキは平然としてゐる。同情どころではなくて、一つ弄つて慰みに見物してやれといふ態度である。「狂はずは船に乗せまじいぞ」なども、素氣なくシテの願を突放して空うそぶいてゐる。こゝが面白い所で、ワキが始めからシテに同情して陰氣くさく出ては、全く曲の變化を破つてしまふのである。シテが「うたてやな……」と言ひ出す時、観客はシテの心に同情してゐるので、伊勢物語を引いてシテがワキを一本參らす時には、大に痛快を感じるのである。かくてワキの「げに〜都の人とて名にし負ひたるやさしさよ」の詞が出る。しかしワキはまだ〜シテに參つては居ない。この狂女中々味をやるわい位の心持で對して居る。従つて第二の間に對して、「あれは沖の鷗候よ」などいふ無難な返答をして、シテに又一本やりこめられるのである。このワキに向つてボン〜とやりこめ、きめつけゆく所が狂女なのであつて、おほどかにあてなるつゝ、いまいやかさの坪を、一步踏み出して見せる面白さなのである。

次に掛合になる。「げにげに誤り申したり……」とワキも或度までシテに降参し、シテの心持に誘ひこまれて、咏歌的な調子になる。こゝはワキシテが掛合にうたふのであるが、文句をたどつてもわかる通り、「昔にかへる業平の」

からはシテ一人の心持をのべた所である。その掛合が漸次咏歌的に高まつて行くと、そこから地謡が引とつて謡ふ地謡の部分は、シテの咏歌の最高潮を、シテに代つて謡ふだけであつて、心持は純然たるシテの感懐である。都鳥に向つて我子の在否を尋ねるといふこと、そこに狂女の狂ひの姿が見られる。無心の鳥は答ふべくもない。それを「答へぬはうたて都鳥、鄙の鳥とや言ひてまし」などいふ所に、狂ほしいシテの常規を逸した姿が見られるが、それも子故の闇の傷手と思ふと、その狂ひの中に観客の同情はすつかりと引きつけられてゆく。こゝを頂上としてシテの感じはやくしづまつて來て、難波堀江の都鳥を思ひ、更に現實に歸つて、ワキに向つて再び乗船を乞ふことになるのである。

能に於ける型。此處は此の曲中での見處であつて、眞の味はひは能舞臺上のシテの演出を見ねば味はへるものではないが、記憶をたどつてのべる。(此處は型もいろ〜ある様であるが橋掛りを使ふ行き方を面白く感じる)シテは前段の終に、仕手柱先きの常座でワキに向つて開いて、「なう〜」と呼びかけて乗船をたのむ。ワキは「狂はずば此の舟にのせまじいぞ」と、よとかより氣味にズカリと突放す。それをうけて、抑へ目に「うたてやな」とシテは恨み、「かたの如くに」あたりからは、少しせき込む心を示して、かより氣味にワキに言ひかけ、「隅田川の渡し守ともおぼえぬ事な宣ひそよ」と、ワキに向つて二足ばかり詰め足してゆく。ワキが「げに〜誤り申したり」と謡ふ時に、シテは正面に直す、やゝ心とけた心持をこの一つの動きの中にも見る。「なう其の詞は」とワキに向ひ、名にし負はゞ」と正面に直し、「いざ言とはん都鳥、我思ふ人はありやなしや」と謡ひ終つて、右受けの形をし

て都鳥に目をつける心を示す。そしてじつと見つめた形で「なう舟人」と込めて諷ひ、あれに白き鳥の見えたるは」とワキに向つて、かゝり氣味に向ひかける。それから脇との問答はそのまゝの形で進み、掛合を終つて、地謠が謠を引きとるとシテの面白い型がつよく。この地謠になる時には、シテは子を思ふ事いよく切に、情迫り心亂れて來る時であつて、「いざ言問はん都鳥」で据拍子二つ踏むのであるが、如何にも衷心から焦らちつゝ都鳥に問ひかける情が感ぜられる。「我思ひ子は東路に」と右受けて、東路の心を示し、「有りやなしやと問へども」で脇正面へ歩み出で面つかつて見渡し（面使ふとは顔だけを左右にまはして見廻す形をいふ）答へぬはうたて都鳥」と都鳥に目を付ける心あつて、「鄙の鳥とやいひてまし」で、ズイと面直し（面直すとは正面向くこと）正へ開くのであるが、その型の中に靜かな怒りの心がしみじみと感ぜられて、如何にもとシテの心持に同情せられる所がある。「げにや舟きほふ堀江の川の水際に」と、そこから角取り左廻つて（角とり左廻りとは、目付柱まで進んで行き、そこから左の方へ大きくまはり歩く動作をいふ）來居つゝ鳴くは都鳥」と地の謠つてゐる間に作り物の前のあたりへ來、「それは難波江」で左の手で脇柱の方へ指してゆき「是は又隅田川の東まで」で後へとつて返し、そのまゝ橋掛りの一の松あたりまで歩み行くのであるが、この大きな動きの中に、遙々と東の果まで迷ひ下つたシテの姿が、しつかりと象徴されてゐて何ともいへぬ妙味を感ずる所である。そして、「思へば限りなく遠くも來ぬものかな」で、橋掛の上から遙かに正面を見渡ししては、如何にも遠く來たものよといふ感慨と、それに伴ふ心細さを思はせる。こゝらになると橋掛りの欄干の外には、渺茫とした隅田川の漲つて居るやうに感じる、といはれる所である。「さりとは渡守」で氣をかへて遙にワキに向ひ、早足で舞臺へ歸つて、「舟こぞりて狭くとも」と謠ふ所で手に持った篋で左から右へ指し廻して、船中を見る心持を示し、「乗せさせ給へ渡し守」でワキの前に進み、「さりとは乗せてたび給へ」の所で、下に座し篋を置いてワキに向つて合掌して歎願する形をとるのである。この終の所は様々の型の變つたものがあつて、今のべた型と異なる演出をすることも多いが、何れも誠に見ごたへのする處で、観客に息もつがせぬ妙味の出る處である。

ワキ詞「かゝるやさしき狂女こそ候はね。急いで舟に乗り候へ。この渡りは大事の渡りにて候。かまへて靜かに召され候へ。ワキツレ詞「なうあの向ひの柳の下に、人々の多く集りて候は、何事にて候ぞ。ワキ「さん候あれは大念佛にて候。それにつきて哀なる物語の候。この舟の向ひへ着き候はん程に語つて聞かせ申さうするにて候。カケリ「さても去年三月十五日、しかも今日に相當りて候。人商人の都より、年の程十二三ばかりなる幼き者を買ひとつて奥へ下り候が、この幼き者、未だ習はぬ旅の疲にや、以ての外に違例し、今は一足も引かれずとて、この川岸にひれふし候を、なんぼう世には情なき者の候ぞ、この幼き者をばそのまゝ路次に捨て、商人は奥へ下つて候。さる間この邊の人々、この幼き者の姿を見候に、由ありげに見え候程に、様々にいたはりて候へども、前世の事にててもや候ひけん、たんだ弱りに弱り、既に末期と見えし時、おことはいづく如何なる人ぞと父の名字をも國をも尋ねて候へば、われは都北白河に、吉田の何某と申し、人のたゞひとり子にて候が、父にはおくれ母ばかりに添ひ參らせ候ひしを、人商人にかどはされて、かやうになり行き候。都の人の足手影も

なつかしう候へば、この道のほとりにつきこめて、しるしに柳を植えて給はれとおとなしやかに申し、念佛四五返唱へ終に事終つて候。なんぼう哀なる物語にて候ぞ。見申せば船中にも少々都の人も御座ありげに候。逆縁ながら念佛を御申し候ひて御弔ひ候へ。よしなき長物語に舟が着いて候。疾うく御あがり候へ。ウキッレ「如何さま今日はこの處に逗留仕り候ひて、逆縁ながら念佛を申さうするにて候。ウキ「いかにこれなる狂女、何とて舟よりは下りぬぞ急いで上り候へ。あやさしや、今の物語を聞き候ひて落涙し候よ。なう急いで舟よりあがり候へ。

シ「なう舟人、今の物語はいつの事にて候ぞ。ウキ「去年三月今日の事にて候。シ「さてその兒の年は十二歳シテ「主の名は、ウキ「梅若丸シテ「父の名字は、ウキ「吉田の何某シ「さてその後は親とても尋ねずウキ「親類とても尋ねこずシテ「まして母とても尋ねぬよなうウキ「思ひもよらぬ事シ「なう親類とても親とても、尋ねぬこそ理なれ、その幼き者こそ、この物狂が尋ねる子にてはさむらへとよ、なうこれは夢かやあら浅ましや候ウキ「言語道斷の事にて候ものかな。今まではよその事とこそ存じて候へ。さては御身の子にて候ひけるぞやあら痛はしや候。かの人の墓所を見せ申し候べし。此方へ御出で候へ。(能の時には、これこそ亡き人のしるしにて候へよくく御弔ひ候へ。といふ説が入る)

シ「今まではさりと逢はんを頼みにこそ、知らぬ東に下りたるに、今は此の世になき跡の、標ばかりを見る事よ。さてもむざんや死の縁とて、生所を去つて東のはての、道の傍の土となりて、春の草のみ生ひ茂りたる、この下にこそあるらめや、地「さりとては人々この土を、返して今一度、この世の姿を母に見せさせ給へや。地「残りても、かひあるべきは空しくて、かひあるべきは空しくて、あるはかひなきは、き木の、見えつ隠れつ面影の、定めなき世の習、人間うれひの花ざかり、無常の嵐音添ひ、生死長夜の月の影、不定の雲覆へり。げに目の前のうき世かな。實に目の前の憂世かな。

【語釋】

○やさしき狂女 やさしは優美の意。都人とて名にし負ひたるやさし、さよに同じ。○大事の渡り 危険な渡り。  
 ○かまへて 必ずきつと。○しかも 今日に相當りて候 今日三月十五日であることを思出して、しかも丁度今日であつたといふのである。○奥 奥州地方をいふ。○未だ習はぬ旅の疲 まだ慣れない遠路の旅の疲。○以ての外に 非常に。  
 以外と書いてもさは「思ひの外に」と訓してゐた。○違例し 違例とは病氣をいふ。病氣になること。○一足も引かれず 一歩も歩めず。○ひれふし候を 病の苦痛にたへかねて路に倒れたことをいふ。○なんぼう 何程の音便。「何といふ」又は「何たる」の意。○情なき者の候ぞ、 無情な者も居たことよの意。人商人の無情をさしていふ。○路次 途中道中。○由ありげに見え候に 由緒ある家柄の子の如くに見えるさういふ意。梅若丸の人品の上品な所をいつたもの。○いたはりて候へども 世話介抱したけれども。○前世の事にてもや候らん 前世からの宿命でもあつたのでせうの意。佛教の方で、現世のことは、皆前世の業の應報といふのである。○たんだ たといふのを強めていつた語。室町時代の語である。たど弱りに弱るとは、ぐんぐんと目に見えて弱るをいふ。○既に末期と見えし時 もはや臨終かと思はれた時。○かどはされて 誘拐せられ

て。○足手影 手足の影の意。○つきこめて 塚を築きその中に亡骸を埋めて。○しるし 墓標の意。○事終る 死する。○逆縁 佛語である。元來は順當ならぬ事に因つて佛縁を結ぶことをいふ。こゝは、はからずも來合せて申ふのであるから逆縁の語を用ひた。○よしなき つまらない。船頭の卑下の語である。○尋ねる子にてはさむらへこゝ 尋ねる子であるの意。候へは、この結辭。とよは二字とも歎辭。○あら淺ましや候 何といふ情ないことなのか。○言語道斷のこと 言語にて述ぶべき道の絶ゆることをいふ。言はうやうもなきことかなの意である。ワキがはじめて梅若丸の母であると聞いて、驚きのあまりに發した語である。○餘所の事とこそ存じて候へ 係り結びに注意。○痛はしや候 御氣の毒である。○さりとも逢はんを頼みに さりともは、然りともである。たゞへ我子は人商人に連れられて行方不明になつてはゐても、それでもいつかは逢ふ事もあらうと、それを頼りにしての意。○此の世に亡き跡のしるし 墓をいふ。○死の縁 縁は因縁、宿縁の意。死の縁は死についての前世からの宿縁をいふ。即ち旅路に於て非業の死をまげたのも、かくなるべき前世の困縁があつたが爲であるとの意。○生所 生れた故郷の意。○道のほゞりの土となりて この語は、白氏文集にある古墳を詠じた詩「古墓何世人、不知<sub>レ</sub>姓與<sub>レ</sub>名、化爲<sub>レ</sub>路傍<sub>レ</sub>土、年々春草生。」に據つたものである。○此下にこそあるらめや 此の春草の茂りし塚の下に我子のなきがらは有るであらうよの意。○返して 土を掘りかへして。○此の世の姿を 生きたるまゝの姿を。○残りても甲斐あるべきは空しくて 生き残つて、役に立つべき子は空しく先立ち。○あるは甲斐なきはよき木の 生き残つて居るのは、生き甲斐のない母であるとの意。はよき木は「母」に掛け次の「見えつかくれつ」を呼び出すための用をなしてゐる。こゝは、新古今集、卷十一、坂上是則の「蘭原や伏屋に生ふる帯木のありきは見えてあはぬ君かな」の歌を用ひてゐる。信州の蘭原の伏屋といふ所に、帯木といふ木があつて、遠くから見る時には帯を逆さに立てた様に見えるが、近よつて見ると、

何れの木であるともわからないといふ傳説を取つて「ありさは見えてあはぬ君」の序詞として詠んだ歌である。こゝでは、帯木の「」は次の「見えつかくれつ」を呼出す序詞に用ひられてゐる。○見えつかくれつ 面影の定めなき世の習ひ 母の眼には、我子の面影がまぼろしに見えつかくれつしてゐるが、はつきりその面影のとなへがたいことをいつたので「定めなき」は、面かげの見えつかくれつして定めなきと、定めなき世の兩方にかけて用ひられた語である。定めなき世の習は所謂老少不定の世の慣ひの意。○人間うれひの花盛 人間には憂の多いことを、花盛に比したるもの。花盛の比喩はやゝ妥當ではないやうであるが、次の「無常の風音添ひ」を受けて、あざやかに光つてくる。○無常の風音そひ 花を散らす嵐が、突如として音たてそへて吹き來ることをのべて、若き者にも死期の突如として訪れて來ることを思はせた文である。○生死長夜の月の影 生死長夜の迷をさますべき眞如の月影の意。人間が生死の巻に迷ふてゐることを長夜の夢に比して説いた佛説がある。「安宅」にも「生死長夜の長き夢、おどろかすべき人もなし」の句がある。何れも、唯識論に「未<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>眞覺<sub>レ</sub>恒<sub>レ</sub>處<sub>レ</sub>夢中<sub>レ</sub>故佛説<sub>レ</sub>生死長夜<sub>レ</sub>美」とあるに依つたものである。この迷をさます眞の覺を月に比して眞如の月といふ。○不定の雲おほへり 月を定めなき雲のおほひかくす、花を無常の風が散らす、何れも浮世のつねであるとの意である。前の句からのつゞきは、眞如の月かげを迷の雲がおほひかくすとつゞくのである。○目の前の憂世かな 目前に見ゆる憂世の姿よとの意。

【評釋】 以上が大體「破の三段」にあたる所である。破の段の終は一曲の最高潮に達する部分であつて、文章は勿論音曲的方面にも、演能的方面にも充分に氣を配つて注意に注意を重ねて創作せられる所である。世阿彌は能作書に於て此處を開眼、開眼の所と唱へて、一曲の眼を開き一曲の耳を開く所であると説いて居る。先づ此の一段も、又詳しく分けると三段の變化をとつて、情調は層々として緊張味を重ねてゐることを見る。第



一はワキの物語りの部である。第二はワキとシテとの悲痛な問答を中心とした所、第三は亡兒の墓前に立つてシテの慟哭する所である。前段はシテがワキに乗船を懇望する所で終るので、此段に於ては、ワキがシテを乗船せしめる所から始まる。ワキは未だシテの心中を知らない。がとにかくシテの優雅な所、由ありげな狂女である點などに、やゝ心を動かして居る。それだけワキの心境はシテに傾きかけてゐる。しかしまだ同情では無い。三分の好奇心が顔を出して居る。従つて「かゝるやさしき狂女こそ候はね、急いで舟に乗り候へ」を全くワキがシテに打たれたものと解してはならない。その次に「この渡りは大事の渡りにて候、かまひて靜かに召され候へ」といふ語があつて、ワキがシテをまだ普通の狂女あつかひにしてゐる様がかゞはれるからである。次に「語り」の段に入るが、こゝでワキヅレの男をして、柳の下の群集は何事にて候ぞと問はしめた所は實に巧なワキヅレの使用法である。それに對してワキが梅若丸の最後の様を物語るが、これを又船中の世間話として話し出させるのも極めて面白い行き方である。若しこれを狂女との話としたならば、此曲の生命は三分の興味をたしかに殺がれると思はれる。ワキも話して居る中に少々感傷的にはなつてゆくが、しかしワキとしては幾回も繰り返したであらう話であるから、どこまでも世間話である。都の人も少々居るやうだが、逆縁ながら弔つてやれといひつゝも、舟が着いたから早く上つてくれと催促するワキである。ワキヅレは一日逗留して弔はうと言ひ出す、そこに他人をすら動かす哀話の力を見るのである。しかしシテはまだ満を持して放たない。

シテワキの問答は巧にワキの詞によつて起される。ワキは狂女一人舟から下りようともせぬのをいぶかる。「何

とて舟より下りぬぞ」は叱り付ける形である。そしてふとシテの泣いて居るのに心付く。「あらやさしや、今の物語を聞いて落涙し候よ」と、シテのやさしい心に一寸打たれる。そこで言葉も「なう急いで舟より上り候へ」と、なだめすかす口調となる。「何とて下りぬぞ」とこの語の語調の相違の中に、ワキの心境の變化を巧妙に見せてゐる。こゝでシテの悲痛な第一聲は放たれる。なう舟人云々の語は深い悲しみの底からしぼり出された語である。ワキは平然として「去年三月十五日の事にて候」と答へる。これからの問答は、シテの一語一語が實に切迫した感情の中から、強いて平靜を裝ひつゝ出されるに對して、ワキの答が極めて日常茶飯事の應答の如く、全く無頓着であることは、對照的にシテの苦惱を極めて鮮明に浮き上らせるのである。このワキの答がシテの調子に引すり込まれてはこゝの生命は皆無である。「さて其後は親とても尋ねず」とシテ問ひ、ワキが「親類とても尋ね來ず」と言ひ切り、「まして母とても尋ねぬよなう」とシテの言ふ所、實にこの一言に千鈞の重味がある。突き上げる嗚啼をしつと食ひしばつて、自ら「母とても尋ねぬよなう」といふ言葉には、我と我を鞭ち責める母の心の惱亂の姿が、あまりにも痛々しく現はれてゐるではないか。しかしワキは依然として、「思ひもよらぬ事」と平然として突放す。こゝに到つてシテの悲しみは堪へ／＼た抑制の堤を切つて一度にどつとほとばしり出る。「なう親類とても親とても尋ねぬこそ理なれ、その幼き者こそ、この物狂が尋ねる子にては候へとよ」とはじめて泣きくづれながら我身の上を明して、「なう是は夢かや、あら淺ましや候」と前後不覺に取り亂すのである。ワキはこゝに到つて愕然と驚く。「言語道斷のことかな」は其の驚きの叫びである。そしてワキの態度は一變して、シテに對する滿腔の同情となり、そ

の墓場へ案内してやるのである。「かの人の墓所を見せ申し候べし、こなたへ御出で候へ」この敬語を突如としてこゝに挿んだ所に、ワキの心持を充分に示して居る。かうした所になると敬語一つゆるかせにしてゐない作者の用意を、充分にみわけてやらねばならぬ。

次に墓前の所となる。そこに於けるシテの述懐も情の自然の發露を見せて巧である。先づ今までは一縷の望を力に、知らぬ東の果まで下つたが、その望は全く裏切られて眼前に墓を見る悲しさ、その墓を見入る心から、その塚の中に眠つてゐるであらう我子を思ふ心理の進みの自然さ、「さりとは此土を掘返して昔の姿を見せて呉れよ」と泣いて人々に訴へる狂亂の心。それが無理な願であることはシテも承知してゐるのであるが、悲しさの餘り愚に返つたのである。それからやゝ心を取り直して、老少不定の世の中をかこち出すのであるが、その文章も巧に綴られ、シテの心を述べて餘蘊なきを感じしめる。

能に於ける型。この破の第三段は見せ所でなくて聞かせ所である。従つて舞臺上に於ける動きは少ない。が。少いだけにその一つ一つの型に可なり深い意味がこもつてゐるのを感じる所である。

前段に於てシテはワキの前に進み下に居て合掌して乗船を頼む。ワキがそれに対して乗船を許し、「急いで舟に乗り候へ」と答へると、シテはワキ座の前から四五尺ばかり後へ下り、目付柱の方に向つてやゝ正面向きに下に居る。船の作り物は用ひないが船中の心である。脇座から立ち上る時に笠をぬぐ。深井の面女(面)の中でやゝ愁をふくんでゐるやうな面である。女面には小面。増、曲見、深井、老女等がある。小面は大體十七八歳を思はせる氣

分があり、増は廿五六歳位までの女盛りの艶麗さを含んだ尤も色氣の多い面である。曲見はやゝさだ過ぎた女、卅才以上の女を思はせる。深井は、増と曲見の間をゆく面であるが、増のやうな豊艶な色氣がない。一沫の愁の氣味がある(を)かけたシテの容貌は、まことに此の狂女の心を強く暗示するものあるを感じる。ワキヅレはシテの斜後方に同じく下に居る。ワキは立つたまゝで、語りに入る。舟に棹しつゝ語る心である。語りの初めの間はシテは平然と聞いて居るのであるが、話が進んで、「我は郡北白河に吉田の何某と申し、人の云々の所になると、シテは初めてハツと氣がつく、さては我子かと心に強く思ひ當るのである。以下一句一句を聞きもらさじと傾聽するのであるが、姿勢は依然として變へない。こゝらはシテの腹藝を見せる處である。微動だもせないシテの身體から、悲痛な緊張が脈々としてあたりを立ちこめる感、こゝらが能のむつかしく面白い處であらう。「遂に事終つて候」とワキが言ひ切る時、シテは初めて右手を以てシオル。このシオリの形はワキが「急いで上り候へ」といふ所までつゞけてゐるのである。ワキはシテの歎きに氣づかず語り終つて、「何とて舟より下りぬぞ、急いで上り候へ」と叱るやうな態度で言ひ切りながら、不圖シテの泣いて居る姿を見て、「あはやさしや」と調子をかへる。シテは「なう舟人、今の物語は……」と悲痛を包んだ調子で語りながら、シオリの手を下し、下に居る姿のまま、ジリ／＼とワキに向ふ。この次の問答には重い口傳があるといはれる處であつて、最も心して聞くべき所である。ワキが「思ひもよらぬ事」とズバリと言切ると、シテの悲の堰は切られて、正面に向き直りつゝ「なう親類とても親とても、尋ねぬこそ理りなれ。その幼き者こそ、この物狂が尋ぬる子にて候へとよ。なう是は夢かやあら淺ましや候」と、悲歎の絶

頂に達して、思はず筈や笠をカラリと前に落しシオリシオリ返す。芝居ならば、思はず地にひれふして、前後不覺に取り亂した型をして見せる處であるが、それを僅かに、笠と筈を落してシオルだけの簡單な型にとめて、芝居以上の悲痛さを観客に感ぜしめる處に、我々は能の威力をしみじみと味はされるのである。ワキの心は驚愕から同情へ移る。そして痛はしさにシテを導いて墓へ伴ふ。シテは靜に立つて、大小前に行き、作り物（塚に柳を薺いたもの。その中には子方が入つて居る）をとくと見、作り物に向つて下に居る。弔拜の形である。そして靜に「今までは……」と語り出す。そして「春の草のみ生ひしげりたる」と、面をあげて塚を見、「此の下にこそあるらめや」と作り物の下方に目をそそぎ、「さりとは人々」とワキの方へ向けて見まはし、「此の土を」で再び作り物の下を見、「かへして今一度」と、兩手を前に出し、少し居立つて、掘り返す心持を示し「此の世の姿を見せさせ給へや」といふ所で、グタリと安座（兩膝くみ、尻を地に着ける形）して、兩手でシオリシオリ返す。既に及ばぬ願であることを知つて、望も絶え心弱りたる心を示すのである。地謡が「残りても甲斐あるべきものは空しくて」と語り、打切の間にシオリの手を下し、面伏せながら正面に向き直り、「あるは甲斐なきはき木の下」以下のシテの心中を語り出す間は、何等の型もなく、じつと下に居るまゝであるが、却つて此の微動だもしない所に、眞に骨の髄から滲み出ると思はれるやうな哀傷の空氣が、舞臺全體を押しつゝみ、「見えつかくれつ面かけの」と亡靈すでに目の前に浮動して居るかの如き心地がせられる所である。

ワキ「今は何と御歎き候ひてもかひなき事、たゞ念佛を御申し候ひて、後世を御弔ひ候へ。カ、カ、既に月出で川風も、はや更け過ぐる夜念佛の、時節なればと面々に、鉦鼓をならしすゝむれば、シテ「母はあまりの悲しさに、念佛をさへ申さずして、たゞひれふして泣き居たり。ワキ「うたてやな餘の人多くましますとも、母の弔ひたまはんをこそ、亡者も喜び給ふべけれど、ワキ「鉦鼓を母に參らすれば、シテ「我が子のためと聞けばげに、この身も兎鐘を取り上げて、ワキ「歎きをとどめ聲澄むや、シテ「月の夜念佛諸共に、ワキ「心は西へと一筋にシテワキ「南無や西方極樂世界、三十六萬億、同號同名阿彌彌佛。地「南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。シテ「隅田河原の、波風も聲立てそへて、地「南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛、シテ「名にし負はゞ都鳥も音をそへて、子「地「南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。シテ「なう／＼今の念佛のうちに、まさしく我が子の聲の聞え候。この塚の中にありげに候よ。ワキ「我等もさやうに聞きて候。所詮此方の念佛をば止め候べし。母御一人御申し候へ。シテ「今一聲こそ聞かまほしけれ南無阿彌陀佛。子「南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛と、地「聲のうちより、幻に見えければ、シテ「あれは我が子か、子「母にてましますかと、地「互に手に手を取りかはせば又、消え／＼となりゆけば、いよ／＼思ひはますかゞみ、面影もまぼろしも、見えつ隠れつするほどに、東雲の空も、ほの／＼と明けゆけば跡絶えて、我が子と見えしは塚の上の、草茫茫として唯、しるしばかりの淺茅が原と、なるこそあはれなりけれ、なるこそあはれなりけれ。

【語釋】 ○後世を御弔ひ候へ、梅若丸の後世の菩提を祈られよ。 ○カ、ル 筋付けて少しかゝり氣味にいふ部を示す語。

○川風もはや更け過ぐる云々 川風も夜更けの感じに冷え渡り、夜も更け、夜念佛を申すべき時期であるからとて。 ○面々に鉦鼓をならし 参詣の人々も面々に鉦を打ちならして、母に念佛をすゝめるこの意。鉦鼓は念佛の時鐘木しゆくを打ちならす鉦である

○うたてやな ワキが母の泣き伏して念佛しようともせぬのを、諫めはげました語。 ○覺鐘 周禮、考工記に、「覺氏鑄鐘」とある。即ち覺氏が作り初めた鐘だから、鐘の事を覺鐘といふのである。こゝは鉦鼓をさす。 ○聲すむや月の夜念佛諸共に心は西へと 聲澄むと澄む月を掛け、月夜の念佛には、月も西方を指して入り、唱ふる者の心も西方極樂淨土に一筋に至るといふ意をかけたもの。

○南無や西方極樂世界云々 念佛の唱へ詞である。 西方極樂には三十六億萬の世界あり、その各々の世界に、同號同名の阿彌陀佛のましますといふ意である。龍舒淨土文卷四に「釋迦佛在世時、有リ翁婆二人、用ヒ穀一斗ナ記レ數念ニ阿彌陀佛、願シ生ニ西方ニ佛曰、我別有ニ方法、合ニ汝、念シ佛一聲得ニ多設之數、乃教、以レ念ニ南謨西方極樂世界三十六萬億、十一萬九千五百、同名同號阿彌陀佛、誓シ以ニ私殺二枝、之、一合千八百粒、此數乃之千二百石之數。佛自以此數ニ二老人、則其功德甚大可知矣。」とある所から來たものである。 ○川風も聲たてそへて 川風も吹き立つて、念佛に聲をそへることをいふ。 ○なら

く今の念佛の 作り物の中に入つて居る子方の聲が、地誦の聲に交つて聞えるのをいふ。亡者の聲が大勢の念佛の中に交つて聞えて來たの意。 ○今一聲こそ聞かまほしけれ 拾遺集、夏、源公忠「行きやらで山路くらしつほととぎす、今一聲のきかまほしさに」の歌の語を使用して、我子の聲を今一度聞き度しと願ふのである。 ○いよ／＼思ひはますかゞみ 母の哀傷の思は愈々増しゆくといふことと、増鏡をかける。増鏡は、眞澄鏡まきりの意で、鏡は影をうつすものであるから、次の面影といふ語を呼起す序詞となつてゐる。 ○跡たえて 我子の姿の全く消え失せてしまつたことをいふ。 ○しるしばかりの 慕もじるしばかり茅原

に残れるのみである。淺茅が原とは茅葺ちかやのまばらに生ひたる野をいふ。

【評釋】 以上急の段である。この段は能や論の緩急からいへば進んだものであるが、情趣の方面からいへば、破の段に於て漸次にクライマックスに達した一曲の生命を、餘韻豊かに閉ぢめる處である。

先づワキはシテを慰めて、今は教いても甲斐のない事であるから、亡兒の後生菩提の念佛を唱へるが良いとすゝめ、一同の者も大念佛を始める。シテは尙あまりの悲しさに泣きしづんでゐる。それを強いて勵まして念佛せしめる。シテもしほしほとして逆さまなりし手向をする。「隅田川原の波風も、都鳥も音を添へて」とシテの言葉、誠に母の心持を巧に表現してゐる。この念佛は、やがて次の亡靈出現の準備をしたものである。亡靈の出現に對する脚色も亦巧妙である。先づ亡兒の聲を念佛の中に交つて聞えしめ、母をして、「今の念佛のうちに正しく我が子の聲の聞え候、この塚の中にてありげに候よ」と言はしめる。それだけならば悲教にくれた狂女の空耳ともとられるが、直にワキをして「我等も左様に聞きて候」といはしめて、その事實らしさを裏書きせしめ、「今一聲こそ聞かまほしけれ」と願ふ心に唱へる母の念佛の次に、亡兒の聲を單獨に聞かしめる。そして聞く者に充分の不思議さを感じしめて置いて、そこで亡靈を出現させるのであるから、誠に自然らしさを感じしめて少しも唐突の感を起させない。「しのゝめの空もあけゆけば」以下は謡曲の常套的手法で、こゝではじめて観者は、夢幻の世界から現實の世界へさめるのである。

能の型。急の段は、大ていの能が、最も見所の多いものとなつて居る如く、此の曲も様々に面白い型がつよい

て、息をつがせぬ緊張を感じしめるのである。

シテは前段の姿勢のまま、ワキの語ではじまる。そして、「たゞひれふして泣き居たり」の所で、シオリシオリ返す。ワキは「亡者も喜び給ふべけれど、鉦鼓を母に参らすれば」と謠ひつゝシテに近づいて打鉦と撞木をシテに渡す。「我子の爲と聞けばげに」とシテ謠ひつゝシオリの手を下し、鉦撞木を手にとつて立ちあがり、「月の夜念佛もろともに」と作り物の方に向ひ、「南無や西方極樂世界」とワキと同吟しつゝ作り物に向つて合掌する。地謠が「南無阿彌陀佛」と唱へ出すと、合掌の手を下して打鉦を打つ。念佛を同音に唱へて居る心である。「隅田河原の波風も聲立て添へて」の所で、正面を指し廻して、波風も聲添へて我子の菩提を弔らうてくれよといふ心持を示し、地の念佛になつて又作り物に向つて鉦を打ち、「名にし負はゞ都鳥も音をそへて」と又正面に向いて都鳥を見る心持を示し、次の念佛で塚に向つて鉦を打つ。そして、其の念佛の聲の中に子方の聲の交つて聞えるのを、じつと耳をすまして聞き入り、たしかに我子の聲であると聞き得て、ワキに向ひ「なう／＼今の念佛の中に」と呼びかける。ワキが「我等も左様に聞きて候。所詮此方の念佛を止め候べし、母御一人御申し候へ」とすゝめると、シテは「今一聲こそ聞かまほしけれ」と、作り物の前に下に居ながら合掌し、「南無阿彌陀佛」と鉦を打つ。そして子方の二度の念佛をとくと聞入る。「聲の内より幻に見えければ」で、作り物の中に入つて居た子方は、作り物の左方(向つて右方)から靜に出で、脇座の所まで行きシテに向つて立つてゐる。白色の水衣に黒頭(くろがしら)(黒髪を長く垂らした髪)であるから、さながら亡者の姿である。シテはそれと同時に靜かに正面に向き直り、ワキ座の方の子方

に不圖目をつけて、「あれは我子か」と叫ぶ。子方又「母にてましますか」と答へ、「互に手に手をと리카はせば」と謠ひ出す所で、シテは鉦と撞木とを捨て、立ち、子方の方へする／＼と行き、抱きとめようとする。子方は或は左又右にはづして、「又きえ／＼となりゆけば」で、シテの手の下をくゞりぬけながら、作り物の中へ走り入る、シテは今まで有りし姿を見失つて、ワキ座の方を茫然と遠く見やりながら立ち、「いよ／＼思ひはますかゞみ」で二足三足タラ／＼と後へ力なく下りながらシオリ、右へとつてシオリながら常座の方へと志す。その間に、子方は再び作り物の右方から現はれ、常座先きで、そこへ歩んでくるシテに向つて立つて居る。シテは常座へ行かうとして舞臺の正中あたりで子方を見つけ、両手ひろげながら抱きとめようと二三足子方の方へ行き、「面影もまぼろしも」でシテが子方の前へ来ると、子方はスルリと抜けて又作り物の中に走り隠れる。シテ思はずと片膝つき、力のぬけた絶望の心持を示す。地謠がすゝんで「しのゝめの空もほの／＼と明けゆけば」と謠ふと、面伏せながら靜に立つて東の空を眺めやる心で、脇座の上遠く見上げ、「跡たえて」で面直し、「我子と見えしは塚の上の」と作り物の方を見上げ、「草花々としてたゞ」と心持しつゝ眺めわたし、「しるしばかりの浅茅が原となるこそあはれなりけれ」で、グタリとした心持で、右受けながら正面に直し三足ばかり下つて、シオリ、シオリ返しながら二足つめる。これをシオリ止めの型といふ。そして靜かに幕に入れば、ワキ、ワキヅレも幕に入つて一曲は終るのである。此の急の一段誠に見てゐて面白い所であつて、言葉で説明すると冗長になつていけないが、これだけの型を地謠に合せ、型の持つ意義なり氣分なりを充分に仕生かす時には、眞に迫つた感に打たれて息もつけぬ妙味を感じるので

ある。殊にシテが、亡霊を見失つて、思はず片膝をトンとついで心持を示す所など、見物の心にハツと強い衝激をあたへる急所である。前にあげた「申樂談義」の中で、世阿彌が子方を使はぬが良いといふに對して、子方を使はねば自分では演じ切れないと答へた十郎元雅の意見は、此の急の段の所である。子方を使ふ方が観客にあたへる、實感強いやうであるが、もし子方を使はずして、それ以上の藝術的效果をあげる名人のシテがあれば、能の立場としては、無い方が良いやうにも思はれる。

最後に隅田川に就て、金春禪竹氏信(世阿彌の女婿であつて、足利八代將軍の頃に傑出した能樂の名手である。)が残した秘書の中から、曲柄や演出上の注意をのべよう。先づ歌舞髓腦記に於て、禪竹は次の如く述べて居る。

墨田川 淺文風 撫民體

ものおもふ袖より露やならひけん秋風ふけばたえぬものとは

是又、亡魂の心、餘に混せぬ餘情あり、瑞風是にあり。

淺茅生や袖にくちにし秋の霜わすれぬ夢を問ふ嵐かな。

即ち墨田川の曲は、世阿彌が十六部集の九位次第に於てのべた藝位よりいへば、第六等の淺文風の位に當り、其の曲風の餘情を歌道の方面に比喻をとれば、歌道秘書三五記の和歌卅體中の撫民體の餘情に相當する。その曲を演じてかもし出すべき藝感は、「物思ふ袖より露や習ひけむ秋風ふけばたえぬものとは」(物思ふ人の袖には、秋風の

おとづるゝ頃になれば、そゞろ悲しみの涙がほろ／＼とこぼれがちである。あの秋の露、葉末に宿る秋露の、秋風の吹くに堪えずしてはらくと散るのは、あの物思ふ人の袖の上におちかゝる涙に倣つたものであらうか)といふ歌の感じでなくてはならない。しかしそれだけでは、餘の哀傷の曲目と混じ易い。墨田川には曲獨得の情調がある。曰く、それは亡魂の心である。その亡魂のおのづと現はれて、舞臺上の空氣を特殊の陰慘さ悲痛さにそめてゆく所が、此の曲の端風(特に賞美すべき風情)である。そのためには、「淺ちふや袖にくちにし秋のしも忘れぬ夢を訪ふ嵐かな」といふ新古今集の歌の心を以て、此の曲を演じ生かさなくてはならないといふ注意である。

大に五音三曲集に於ては、此の曲の聲曲的な味はひをのべ、

哀傷第二 物哀體曲味

諸行無常の世のことはりを思ひ詠するさま也。大かたのあはれ、身のありさま、思ひつゞくる曲聲なり。

古歌云、小篠原風まつ露のきえやらでこの一ふしを思ひおこな。

と説明し、此の曲の破の三段のつめの「残りても甲斐あるべきはむなしくて云々」の文章を引用して居る。即ち此の曲は、世阿彌ののべた五音曲條々に於ける哀傷曲に相當し、曲聲感を和歌卅體の名目をかりてあらはせば、物哀體に當るものである。そして此の曲を謠ふ心得としては、小篠原の歌の心を曲聲の中に謠ひ生かさねばならないと説いてゐる。

以上で隅田川を終つた。能の四番目物に於ける狂女物はこの曲の外に、富士太鼓、籠太鼓、柏崎、花笠、三井寺、加茂物狂、班女、飛鳥川、雲雀山、百萬、櫻川、蟬丸、梅枝等があり、又男物狂には、高野物狂、土車、歌占木賊等がある。何れも狂者をシテとするもので誠に面白い曲であるが、それ等を一々に講義することは紙面の都合上とても不可能である。それで簡單ながら隅田川を以て、物狂ひの能を代表させておく。それで次に、世阿彌が、「物狂ひ」に就て、十六部集花傳書の中に説いて居る所を引用して、物狂ひの特色といふことを明にして置かうと思ふ。

「物くるひ。此道第一のおもしろつくの藝能なり。物くるひのしなじな多ければ、此の一道に得たらん達者は十方へわたるべし。くり返し〜公案のいるべきたしなみ也。假令つき物のしなく、神・佛・生靈・死靈のながめななどは、其つきもの、體をまなば、易くたよりあるべし。親に別れ、子を尋ね、夫にすてられ、妻におくる、かやうの思ひに狂亂する物ぐるひ一大事なり。よき程のしても、こゝを心得わけずして、たゞ一べんに狂ひはたらく程に、見る人の感もなし。思ひゆるゑの物くるひをば、いかに物思ふ氣色を本意にあて、くるふ所を花にあて、心を入れてくるへば、感も面白き見所もさだめてあるべし。かやうなる手柄にて人を泣かすところあらば、無上の上手と知るべし。これを心底によく〜思ひ分くべし。」

【解】 物狂ひは、此の能樂の中で最も面白づくめの藝能である。物狂ひには其の種類が誠に多いから、隨處で此の一藝(物狂)に秀でた所のある人ならば、各方面にわたつて如何なる能でも出来る。よく〜工夫を凝らすべきである。假りに種々の選物、

神・佛・生靈・死靈の崇りなど、したら、其の憑き物の本體を學び似せ ならば、手がりとする點を得やすくて容易に出来る。しかし親に別れるとか子を尋ねるとか、夫に捨てられるとか妻におくるといふ風な、心の傷手が嵩じて狂亂する物狂ひは、中々むづかしい。正に一大事と稱すべきである。かなりに出来る役者でも、この心の傷手云々といふ點を辨へないで、たゞ一様に狂ひ廻るので、見物人にも感應がない。物思ひからの物狂ひは、どこまでもその物思ふ氣色を本意にしつかりと把持し、狂ひ廻る所を花やかにして、精神こめて狂へば、きつと感應もあり面白味もあるであらう。かうした手際によつて、見物人を、感泣せしめるやうな所があれば、その人は無上の名手であると判定して良い。このことは心中に篤と充分に思量すべきことである。

### 景 清

曲の種類。此の曲も、角田川と同じく、第四番目ものとして、現在物の中に加へられて居る、角田川が狂女物として重い位である如く、此の曲も諸流共に重い位の曲とせられて、謠ひに於ても能に於ても、完全に仕生かすことは中々の難事とせられて居るものである。

曲の作者。「能本作者註文」にも「二百十番謠目録」にも、共に世阿彌元清とせられて居る。世阿彌十六部集中能作書の中、及び中樂談義の中を見ても此の曲名はのせられて居ない。中樂談義の中に、世阿彌の作つた曲、観阿彌の作つた曲、井阿彌の作つた曲をあげた條の終に、これ等の作者の曲は、三道書(能作者)に詳しいとあつて、「此の三道は、應永卅年に書かれし程に、これより後、本になるべき能いくらもあるべし」と述べて居る。この曲を世阿彌が作つたとすれば、彼の老後の作と見るのが至當であらう。今の所では、世阿彌作といふ説を否定する資料

がないから、能本作者註文などの説に従つて、世阿彌作とすべきであらう。

曲の典據。平家の侍悪七兵衛景清を題材としたものであるが、此の曲の題材となる様なものは、平家物語には無いのである。第一景清が日向に流された事、第二、景清が尾張熱田の遊女と相なれて女子をまうけ、それを鎌倉龜が江の長にあづけた事、第三其の娘が景清を尋ねて日向に下つたこと等、何れも平家物語に見えない、長門本平家物語を見ても、源平盛衰記を見てもない。むしろ長門本の方には反證とも見るべき記事がある。それは同書巻十九に

六年(建久六年)三月十三日に大佛供養あり。平家の侍上總悪七兵衛景清、鎌倉に降人に参りたりければ、和田左衛門義盛に預けらる。

とあり、廿卷に

上總悪七兵衛景清は降人に参りたりけるが、大佛供養の日を數へて、建久七年三月七日にてありけるに、湯水をとめて終に死にけり。

とある。景清が檀の浦で討死せずして遁れ落ちたことは、流布本平家物語「内侍所都入」の條に見えるが、その後遂に頼朝に降を乞ひ、自ら食を絶つて死んだといふのである。たゞ平家物語や長門本には、八島合戦の鏝引の挿話が出て居るが、この曲に於てはそれを「語り」の中に採り用ひてゐるだけである。従つて此の曲は全く作者の想像から作り出されたものであると見るべきものである。強いて言へば、平家物語に於ける俊寛僧都の鬼界ヶ島への流

滴、右王の島下り等から暗示を得たとでも言ふべきであらう。

役	割
シテ	平景清
ツレ	姫(人丸)
トモ	從者
ワキ	里人
地	
日向國宮崎	
季	
雜	

ツレ 悪七「消えぬ便も風なれば、消えぬ便も風なれば、露の身いかなりぬらん。ツレ これは鎌倉龜が江が谷に、人丸と申す女にて候。さても我が父悪七共衛景清は、平家の味方たるにより、源氏に憎まれ、日向の國宮崎とかやに流されて、年月を送り給ふなる。いまだ習はぬ道すがら、物憂き事も旅のならひ、又父故と心強く、トモ 二人「思ひ寐の涙かたしく、草の枕路を添へていとしげき袂かな。二人上 相模の國を立ち出で、相模の國を立ち出で、誰に行方を遠江げに遠き江に旅舟の、三河に渡す八橋の、雲居の都いつかさて、假寐の夢に馴れて見ん、トモ 御急ぎ候程に、これははや日向の國宮崎とかやに御着きにて候。これにて父御の御行方を御尋ねあらうするにて候。



【語釋】 ○消えぬ便も風なれば云々 此の次第は、景清の娘人丸の心持を短い言葉で極めて巧妙に表現して居る。次第として上乘の出来である。意味は、父景清の配所の消息のかすかに我が耳に入るも、風の便り（風聞、噂の意）で聞くのであるから、風の便こそゆかしいものであるが、その便りを吹き送る風は、又同時に草葉の末に宿る露（父景清の身のはかない有様を露にたとへて）を吹き落す風であるから、父の身の上は如何であらうかと、配流の父の上を案じやる心持をうたつたものである。大和田氏はこれを解して、「草葉の露の消えずに残るも、風吹かぬ間の命なれば、かやうにはかなき父の命ある中に、尋ねゆきて面會せんとなり。たよりは、風をたよる力にして、運命に任する意」と解して居られる。これは、拾葉抄に「あだし野や風まつ露をよそに見て消ん物とも身をば思はず」とある引歌に提はられたのであらう。 ○是は 以下はツレの名告りである。「龜が江が谷に」は「谷なる」の轉で「龜が江が谷に往める」の意。 ○惡七兵衛景清 惡の字は、景清が伯父大日房僧能忍を殺したから、惡人と解せられて居るのが多い。惡源太義平などもさうである。しかし、この「惡」は武勇剛強の者に添へられる接頭語である。 ○宮崎とかやに 宮崎とかいふ所に。 ○送り給ふなる 文法的に正しくいへば、給ふなりとすべき所である。しかしかやうな破格は謡曲文には多い。 ○いまだ習はぬ 次の道すがらにだけかゝる詞。未だ慣れぬ旅行の道すがらではあるがの意。 ○物うき事も云々 道中の雜義も一つは旅行の常とあきらめ、又一つには父に會ふがための旅であるから何事も厭はじと心強、思ふの意。 ○思寝の涙かたしく草の枕露をそへていとしげき袂かな 父の事を思ひつゝ寝る草枕の旅には、涙のこぼまることもなく、片敷く袂には涙の露も重いのに、草葉に宿る露までが袂をぬらして、濡るゝ事滋き我が袂なるかなといふ意である。思寝の思は前句をうけて、心強、思ふといふ意と、思寝との兩方にかゝる語である。「片しく」とは衣の片方を下にしきぬる意である。「草の枕」は旅の意である。 ○上歌 上音に歌ひ出す部分である。この上歌から道行き文となる。 ○誰に行方を遠江

知らぬ旅路の行方を誰に問ふべきかといふの意、國名の遠江とをかけた語。 ○げに遠き江に 遠江の二字を分けて言つた語、かゝる例は謡曲に多い。 ○旅舟の三河に渡す八橋の 遠き江と言つたから旅舟といひ、旅舟といつたので渡すを受けたものである。縁語で連ねた文脈。「三河に渡す八橋」は、伊勢物語を引いた語である。業平東下りの條に、「三河の國八橋といふ所に至りぬ。そこを八橋といひけるは、水ゆく川のくも手なれば、橋を八つ渡せるによりてなむ八橋とはいひける」とある。渡すは橋の縁語である。 ○雲居の都 八橋とくも手が縁語であるから、そのくもを雲居にかけた掛詞である。雲居の都は京都をいふ。 ○假寐の夢に馴れて見ん 日数を重ねて何時になれば、都が親しく見られることであらうとの意である。假寐は假寐の意（夢に馴れて見ん）とは、草枕の夢を重ねて、いつになれば見られようの意。都を夢に見るといふ意は無い。 ○やうく この語は「御急ぎ」にかゝるのではなく、「御着き」にかゝるのである。やつとのことで通り着いたの意。 ○御尋ねあらうするにて候 御尋ねなされるがよろしいでせうの意。

【評釋】 以上を此の曲の序の段とする。普通ならば、序の段にはワキの次第、名乗、道行、着せりフがあるのであるが、此の曲は、ワキを後に呼出すから、ツレをして先づ序の段を受けもたせたのである。此の景清の曲は、高砂型の形式をうんと離れたものであつて、段落の切り方が困難であるが、こゝまでを序としてシテの出現から破の段に移ると見るのが良いと思ふ。

能に於ては、笛小鼓大鼓の囃子方が座につくと、藁屋の作物に引廻をかけて、大小前に出す。シテはこの作り物の中に入つて出るのであるが、引廻をかけて見えない様にしてある。藁屋は、四本の柱の上に、簡単な藁ぶきの

屋根をつけたもので、圖示すれば左の如きものである。これに引廻ひきまわしといつて、幕様の垂れきぬを以て四方を蓋ふて



作り物。柱の高さ  
約一間あまり。  
縦横各々四尺位。



引廻しかけた所

出すのである。

次に囃子方が次第の囃子をはじめると、ツレ(姫)とトモ(供の男)とが揚幕から、ヒメを先にして出て来る。そして舞臺に入り、向きあつて同吟で、次第を諡ふ。この次第の中に、全曲の進行の暗示が充分にふくまれてゐる。名乗りになると、ヒメのみ正面向いて諡ひ、「思ひ寝の涙かたしく」といふ下歌さかたの同吟になつて再びツレとトモは向合つて諡ふ。トモ詞の「やう／＼」でトモヒメ共に正面向き、「こゝにて父御の」からトモはヒメに向つていふ。姫は正を向いたまゝで、聞き終つて、ヒメは脇座に、トモは其の次に、共に下に居るのである。

シテ「松門しょうもんひとり閉ぢて、年月を送り、みづから、清光せいこうを見ざれば、時の移るをも、辨わづへず。暗々あんあんたる廡室ふくしつに徒いとづに眠り、衣寒ころもかんたん暖ぬるに與あへざれば、膚はだは、骸骨くわいこつと衰おとろへたり。地上ちじょう歌うたとても世を、背せくとならば墨すみにこそ、背せく

とならば墨にこそ、染そむべき袖そでの、あさましや寢ねれ果てたる有様を、われだに愛あいしと思ふ身を、誰たれこそありて憐あはみの憂うれきを訪たずふ、よしもなし憂うれきを訪たずふよしもなし。

カヒ「ふしぎやなこれなる草くさの庵いほふりて、誰たれ住すむべくも見えざるに、聲こゑめづらかに聞きゆるは、もし乞食こつじきのありかかと、軒端のきばも遠く見えたるぞや。シテ「秋あききぬと目にはさやかに見えねども、風の音ね信しんいづちとも、ツレ「知らぬ迷まよのはかなさを、暫しばし休やすらふ宿しゆくもなし。シテ「げに三界さんがいは所ところなしたゞ一いつ空くうのみ。誰たれとかさして言こととはん、又いづちとか答こたふべき。

トモ「如何いかにこの薬屋くすりやの内うちへ物問ものもんはう。シテ「そも如何なる者ぞ。トモ「流ながされ人の行方ゆくへや知りてある。シテ「流ながされ人にとりても、苗字ななぢをば何と申し候まうぞ。トモ「平家へいけの侍さむらい悪七あくしち兵衛べゐ景清けいせいと申し候まう。シテ「げにさやうの人をば承り及びては候へども、固かたより盲目めくらみなれば見る事なし。さもあさましき御有様ごうさま、承りせらるうけたまはるに哀あはれを催もよほすなり。委まよしき事をば、よそにて御尋ごたずね候へ。トモ「さてはこのあたりにては御座ござなげに候。これより奥おくへ御出ごいでであつて尋たずね申まうされ候へ。

シテ「ふしぎやな只今の者を如何なる者ぞと存ぞんじて候へば、この盲目めくらみなる者の子にて候はいかに。われ一年尾張いちねんえいの國くに熱田あつたにて遊女あそびぢよと相馴あひなれ一人の子を設たく。女子によしなれば何の用にたつべきぞと思ひ、鎌倉かまくら龜かめが江えが谷やの長ながに預あづかり置きしが、馴なれぬ親子おやこを悲かなしみ、父ちちに向つて言葉をかはす。地上ちじょう歌うた聲こゑをば聞きけど面影おもかげを見ぬ盲目めくらみぞ悲かなしき

名のらで過ぎし心こそなか／＼親の絆なれ、なかなか親の絆なれ。

【語釋】 ○松門獨り閉ちて この句は景清が庵室の中に於て獨語する所である。白氏文集に「山宮一閉無開日、此身未死不令出、松門到曉月徘徊、栢城盡日風蕭瑟、松門栢城幽閉深、聞蟬聽燕感光陰」とあるのを取つて、この文は出来て居るのである。「松門」は松の木 naturally 門をなしたる家である。栢の戸といふのと同じ意。「ひとり閉ちて」は人をも訪はず人も訪はれぬ幽居の様をいつたもの。その中に年月を送りといふのである。○自ら清光を見ざれば 盲目である故に、月日の光を見ることの出来ぬからの意。時の移るとは時候の経過しゆくこと。○暗々たる庵室 盲目なるが故に暗々たるといつたのである。○衣裳暖に云々 冬にも夏にも、衣は一枚であるために、寒暑に應じて衣服を着せてやらぬために。○膚は體骨と衰へたり 體骨とは骨のこと、又白骨の如く瘦せ衰へたるさまをいふ語である。即ち肉落ち骨立つて、きながら白骨の如くやせ衰へたといふのである。○とても世をそむくとならば墨にこそ染むべき袖の「とても」は一層のこと、いつその意である。世を背き浮世の交を絶つといふならば、一そのこと、世捨人らしく墨染の衣を着るべきであるのにの意。○あさましややつれ果たる有様を 墨染の衣を着る僧ともならず、淺ましくもやつれ衰へたる我身の有様をの意。俗體のまゝ零落したる様をあさましいといふのである。○我だにうしと云々 自分にさへ自分の身が厭はれる位であるから、まして、他人が憐みの心から我が身を訪ふてくれる如き答はないとの意。「訪らふよしもなし」のよしは、いはれの意である。

○誰住むべくも見えざるに 誰も住めざるには見えないのに。○軒端も遠く見えたるぞや 乞食の住家であらうかと思つて、

少し立ち退くといふを、軒にかけて言ふたのである。立退いて軒場を遠く見やる心である。○秋來ぬと日にはさやかに見えねども 古今集、秋、藤原敏行の歌の上の句である。下の句は「風の音にぞおどろかれぬる」である。「日にはさやかに見えねども」は盲目の事をほのめかしたのである。「風の音づれいづちとも」は、風の音づれば何れともしれず訪れ来るといふ意である。○知らぬ迷云々 姫の心持であるから、「父の在所をいづちとも知らず、尋ね迷ふはかなき旅の身を、暫し休めんと思へど、その宿すらもなし」といふ心細き心のべたのである。○三界は所なしたゞ一空のみ 前の句の「知らぬ迷はかなき」を佛道の悟りを知らずに迷ふ意にとりなし、「三界には實に宿るべき處はない。如何となれば悟れる眼には、三界は即ち空であり、空の外には何もないから」とつづけたのである。三界は佛語で一切衆生の生死輪廻する世界を三つに分つたもの。欲界、色界、無色界の三つをいふ。俱舍論に、欲界とはその衆生が三の欲をそなへてあるからいふ、睡眠欲、食欲、淫欲がこれである。色界とは、天人の世界であるが、天人に淨妙なる色ある故にいふ。身相の端嚴などがそれである。無色界は天人に形も色もない、あるものはたゞ心のみである。故に無色界といふといふ様な説が出て居る。「一空」は、三藏法數に、「一空とは諸法皆自性なきをいふ」とある。天地萬象は一見、それぞれ別箇の物の如く見えるも、皆これ因縁と假合によつて成れるものであつて、その因縁滅すれば皆空に歸するといふ意である。悟りの道に入れば、三界は一空と化し去つて、無明煩惱を起すべき何物もないとの意をいつたもの。○誰とかさして言とはん又いづちとか答ふべき 三界は空である。従つて彼もなく我もない、問はれるべき人もなければ、又同時に、問はれたりとも其の住家は何地なりと答ふべき人もなし、との意。○如何に 呼びかける語である。○葦屋の内へ物問はう 葦屋の内の者にたづね度い事がある。○そも如何なる者ぞ さすが落ぶれたりとも景清、その傲然たる口調に見える。○流され人にとりても 流人といつても、流人に關してもの意。○苗字 姓名のこと。○さも

あさましき御姿うけたまはりそゞろに哀をもよほすなり 景清自身のことを、他人の如くいつたのである。景清といふ人は淺ましく衰へ居られる由を自分も聞いて、そゞろに氣毒に思つて居るのだの意。

○ふしぎやな これより以下は、人丸及び供の男の行き過ぎた後、景清の獨語する所である。○馴れぬ親子を悲しみ云々 親子と生れ来て居ながら、別れ／＼の住居のために、親しく共にくらす事のなき親子の不運を悲しみ、はる／＼と日向にまで下つて父に向つて言葉をかはすの意と思はれる。「馴れぬ」は共に住み馴れる事なきといひ、「親子」は景清と人丸とをさしたものと解した。但し大和田氏は、「養女として遣りたるなれば、馴染まぬ養父との中を悲しみ、實父がしたはしくなりて、日向に來りて景清に詞をかはしたるとなり」と解して居られる。○名のらで過ぎし心こそなかく親の絆なれ 折角に子の來たのを知りながら、父の名乗をせぬのは、一見甚だ情愛を解せぬ不實のふるまひの如くには見えるが、却つてそれが親の恩愛の情であるの意である。「親の絆」は親の子に對する恩愛の情をいふ。親子の間の情は切らうとしても切れぬこと、二人の間をつなぐ親の如きものであるから、きづなといふ。絆は物をつなぎとめる綱である。「なかく」は、却りての意。

【評釋】 以上を「破の第一段」とする。この第一段は更に三つに分れる。先づシテの感懐をのべる部分、次にシテとツレトモとの問答、第三にシテの感慨の三つである。これが又それぞれ其の情調に於て、序破急の三段の進みをして居るのである。

「松門ひとり閉ぢて年月を送り、みづから清光を見ざれば時の移るをも辨へず」といふ數句の中に、流人の身として、訪ふ人もなき孤獨の生活の中に、かてゝ加へて盲目となり果てた景清をよく現して居る。「暗々たる庵室の中に徒らにねむり」は盲目の身が陋屋の藁屋の中に、意氣ばかりは衰へないが、何のなすことも得せずして慨歎の生を送ることをいひ、殊に「いたづらに」の一語に、抑へんとしても抑へ切れざる憤りの慨きの心を強く出して居る。「膚は髓骨と瘦せたり」は、やゝ悲壯な憤りを帯びたなげきの聲である。「かう衰へては萬事休せざるを得ない、何といふ言ひ甲斐なき我身であらうぞ」との餘韻がはつきりと聞かれる。「とても世を背くとならば墨にこそ染むべき袖の……」と地謠の上歌になつてからは、やゝ心持は變る。こゝは主として我身の淺ましき衰れを省る立場になり、頭のみは刺つても、まだ執心の炎のために佛道に入り切れぬ自分、しかも老い衰へて見ぐるしい自分、それを思へば訪ふ人のないのも尤であるといつた様な感じに移るのである。憂きを訪ふよしもなきと打返し歎ずる所に、孤影悄然たる景清のあはれが出るが、豈はからんや、この時既に、娘は遙々と日向まで訪らひ來て居るのである。

娘の謠「ふしぎやな……」は其處を景清の在所とも知らぬ内であるから、閑かに伸んびりと謠はれる。「誰住むべくも見えざるに」の一句、庵室の荒廢を言ひつくして妙。「若し乞食のありかかと」は、他面から藁屋の荒廢を再述べたものである。「秋來ぬと」の所から、掛合のやうになつて文は進んでゆくが、シテもヒメも何れも獨語である。二人の話し合ひではない。しかも、ヒメの「遠く見えたるぞや」をうけて、シテの「目にはさやかに見えぬども」と起し、「風の音信いづちとも知れず聞ゆ」といふ餘意を取つて「知らぬ迷のはかなさを」とヒメの語を起してゆき、「休らふ宿もなし」との述懐の詞を、それとなくシテの心にひゞかせて、「實に三界は所なし、一空の

み」と連ねてゆくあたりに、よほどの苦心のあとがうかゞはれる。シテの最後の詞は、やゝ悟りを得た様な口吻にしてある所、一面に景清の心を示すと共に、次のすげなく偽り返す心地の強さをこゝで準備してゐるのである。

トモの「如何に此藁屋の内へ物問はう」は頗る横柄な言ひ方である。全く乞食と見くだしての言である所に、景清の窠れを側面から示して居る。「そも何事ぞ」といふシテの答も亦傲岸不遜である。衰へたりといへども平家の侍の意氣は失はない。「げにさやうの人をば承りては候へども」と、白々しい言ひ方。心中の驚きとなつかしさを強く抑へつけて、何くはぬ體で欺き返す心中の強さ。「そゝろに衰れを催すなり」といふ語は、抑へつけた心の中の悲しさが少し外に洩れ出た感を生かし出す所であるが、直ぐ氣をかへて、「餘所で尋ねろ」とまたつれなき態度にかへる所、味はふべき面白味が深い。

「ふしぎやな」以下のシテの獨語は、欺き返しつゝも、さすがに募り来る恩愛の動搖を抑へかねて發したものである。地の上歌になり、「聲は聞けども面影を見ぬ盲目ぞかなしき」といふ所に到つて、シテの心は悲愁に閉ざされる。男子涙ありといふ感がある。「名のらで過ぎし心こそなか／＼親の絆なれ」は、欺き返した娘に向つての詫びの心持である。「名乗らずに返すのはさぞ物の愛を知らぬ親と思ふであらうが、それはこの老衰した親のせめても愛情のあらはれなのだ。恨まずに歸つてくれ」といつた心持である。恩愛の情、泉の如くわきおこつて、裂けんばかりになるシテの心中を言ひつくして餘ある感がある。

能の型。

第一のシテの「松門獨り閉ぢて年月を渡り……」は、作り者の中に居て、引廻しをかけたままに語ひ出すのである。前段の終に、ツレとトモが脇座の方に下に居る。舞臺はしばらく靜寂の境に入つて、見物人が片唾をのんで聞き耳たてゝゐる處へ、寂びた閑かな沈んだ調子の中に、さすがに凛とした心持を生かしつゝ語ひ出される。こゝは「松門の出」といつて、謠の方では極めてむづかしい所とされて居る。老衰した景清であるから、老いて悠を含んだもので、十分に低く沈んでうたふべきものではあるが、あまりに低く減入つては、第一聲が聞きとれないのみならず、景清の武士らしい意氣が失はれてしまふし、さりとて高く強くては老衰のおもかげがうかばない。しかしこゝを巧に謠ひ切られると、又何ともいへぬ妙感にうたれて、思はずも曲中に引き入れられる感がある所である。坂元雪鳥氏がこゝの謠方について、極めて巧にのべられてゐるから、少し餘談に亘るが引用する。

シテの冒頭の謠、所謂「松門」の一節は、稀に見るむづかしい節扱ひで、平家節を加味したものであるが、それが如何にもむづかしさうに聞えるやうでは、まだ技巧がナマである云はれて居る。さりとて淡々と水の如く謠ひ去つては、この骨つばい勇者の末路が、全く仙人になつて了はうも知れぬ。平家が亡びた後に生き残つて、頼朝を暗殺しようと企てたほどの粘りを持つた勇士である。(諸曲大佛供養)。花々しく晴れの戦場で討死して喜ぶやうな單純な男ではない。既に配流の身となり、力は衰へ日は見えぬやうになつてしまつたので、大佛供養に意外な狼藉を試みた猛勇はあるべくもないが、然し衷心から頓悟解脱しさうな男ではない、譲められない口惜しさにチリ／＼身を焼いて、偏屈な癡癡持の老乞食となつてゐる。その止むに止まれぬ反抗心を意地

悪く飲んで来る孤獨の寂しさが、自然にこの「松門」の詠吟となるのである。燃え残りの煩悩、餘温のさめ切らぬ反逆心、争ひ難き骸骨の衰頹、潜り入り浸みこんでくる寂しき、さういふ種々の錯綜した心持に悩み痛められたながら、さも無心のやうに鼻歌をうたつてゐる、それが「松門」である。「松門」のむづかしさは、その節抜ひでなく、この複雑な心境の自然の流露にある。

この複雑な心境を示す詠が進んで、「衣寒暖にあたへざれば膚は髑骨と衰へたり」と慨嘆に堪えざる心を述べて、地謡となり、「とても世にそむくとならば墨にこそ」と詠ふあたりで、藁屋の周囲を蓋ふてあつた引廻しを後見が静かに下すと、作り物の中には盲目の面に沙門帽子をつけたシテが、伏目の姿で兀然と安座して居るのが現れる、(寶生流では大口袴を着け床几にかゝつた姿であるが、むしろ観世流のやうに着流して平座して居る方が氣分がつる様に思はれる)この節は「景清」といつて特にこの曲に限つて用ひられる盲目の面であつて、如何にもきかぬ氣の老武者の老ひ朽ち衰へたといふ感の強くあらはれてゐる面である。景清の複雑至極な心境を、よくもこれまでに現し得たと感嘆の外はない。この面の威力によつて観客は全く打たれてしまふのを感じる。そこへ地謡が「甞れ果てたる有様を……」と詠ひ進むので、尙一層この感が深い。この時、ヒメとトモは脇座にあつて、シテに向ふ。

初回(地の同吟の第一回をかくいふ)の詠が終ると、脇座のヒメは靜に立つて作り物に向ひ「ふしぎやな此なる草の庵ふりて……」と詠ひ出す。シテは作り物の中に平座したまゝの姿で「秋きぬと……」と詠ふ。以下掛合に詠ふが二人ともに少しも動作はしない。「三界は所なし、たゞ一空のみ」のあたり、シテの諒とした心持が觀者の心を強く打つ所である。シテの詞終ると今度はトモが作り物に向つて「如何に此藁屋の内へ物問はう」といふ、シテは

心持ち脇座の方へ向き「そも如何なる者ぞ」と傲然といひ切る。こゝではじめて脇座へ向くことによつて、前の癖との掛合が、獨語であることがわかるのである。トモが「平家の侍悪七兵衛景清と申し候」言ひ出すとシテは正面に向き直す、そして「げにさやうの人をば……」と言ひ、「さもあさましき御有様承り」からは節づけて詠ふ。こゝにシテの心持はよくあらはれる。正面に向き直るのは、如何にも「そんな人は知らぬ」といふ空々しい詞を吐く心持があらはれ、節付けになつて、自ら自己を餘所事のやうに言ひなすシテの心のかすかな動搖が出るのである。「くはしき事をば」と一寸ヒメの方へ向き、直ぐに正面に直して、「餘所にて御尋ね候へ」言ひ切る所も、わづかな型の中によく心持を仕生かして居る所である。そこでトモはヒメに向ひ、「さては此あたりにては御座なげに候……」といひ、尙尋ねさがす心持で二人とも脇座から立ち上り、後見座の方に行つて、そこでクツログのである。

二人が立ち去つた後で、シテは作り物の中に座しながら、「ふしぎやな……」と我子と訪ね来たことをおどろき、「馴れぬ親子を悲しみ」からは節づけて詠ふ。この、詞から節へかゝる所は、いづれも感情が迫つて来るあたりからはじまるのである。そして地謡が「聲をば聞けど面影を見ぬ盲目ぞ悲しき」

と詠ふ所で、シテは面を曇らす。悲しみの胸に迫つて来るのをじつと抑へつゝも、悲痛に堪えられぬ心情の表現である。(曇らすといふのは、少し顔を伏せて伏目になるものをいふ。これで悲しみを示すのである)「なか／＼親のきづななれ」の打返しあたりで、ヒメ・トモは立ち上り、橋掛りに向つてゆく、そして、ワキ(里人)を呼び出す

準備にかゝるのである。

トモ「いかにこのあたりに里人のわたり候か、ワキ「里人とは何の御用にて候ぞ。トモ「流され人の行方や御存じ候、ワキ「流され人にとりても如何やうなる人をお尋ね候ぞ、トモ「平家の侍悪七兵衛景清を尋ね申し候、ワキ「只今此方へ御出で候山陰に、薬屋の候に、人は候はざりけるか、トモ「その薬屋には盲目なる乞食こそ候ひつれ、ワキ「なうその盲目なる乞食こそ、御尋ね候景清候よ。あら不思議や、景清の事を申して候へば、あれにまします御ことの、御愁傷の氣色見え給ひて候は、何と申したる御事にて候ぞ。トモ「御不審尤にて候。何をか包み申し候べき。これは景清の息女にてわたり候が、今一度父御に御對面ありたき山仰せられ候ひて、これ迄はるばる御下向にて候。とても事に然るべきやうに仰せられ候ひて、景清に引き合せ申されて給はり候へ、ワキ「言語道斷、さては景清の御息女にて御座候か。まづ御心をしづめて聞こし召され候へ。景清は兩眼盲ひましまして、せん方なさに髪をおろし、日向の勾當名をつき給ひ、命をば旅人を頼み、我等如きの者の憐みをもつて身命を御つき候が、昔に引きかへたる御有様を恥ぢ申されて、御名告なきと推量申して候、某只今御供申し、景清と呼び申すべし。我が名ならば答ふべし。その時再對面あつて、昔今の御物語候へこなたへわたり候へ。

ワキ「なう〜景清のわたり候か、悪七兵衛景清のわたり候か。

シテ「かしましあしなきだに、故郷の者として尋ねしを、この仕儀なれば身を恥ぢて、名告らば歸す悲し

さ、千行の悲涙袂を朽たし、萬事は皆夢の内のあだし身なりとうち覺めて、今はこの世に亡きものと、思ひ切つたる乞食を、悪七兵衛景清など、呼ばよこなたが答ふべきか。その上我が名はこの國の、上殿、地、日向とは日向に、日向とは日向に向ふ向ひたる名をば呼び給はで力なく捨てし梓弓、昔に歸る己が名の、悪心は起さじと、思へども又、腹立ちや。

シテ「處に住みながら、地、處に住みながら、御扶持ある方々に、憎まれ申すものならば、偏に盲の杖を失ふに似たるべし。片輪なる身の癖として、腹悪しく由なき云ひ事たゞ許しおはしませ。

シテ「目こそ聞けれど、地、目こそ聞けれども、人の思はく一言の内に知るものを。山は松風、すは雪よ見ぬ花の覺むる夢の惜しさよ。さて又浦は荒磯に寄する波も、聞ゆるは、夕汐もさすやらん。さすがに我も平家なり。物語始めて御慰みを申さん。

【語釋】 ○里人のわたり候か わたるは居るの意である。元來わたる、入る等の語は、動作を示す語であつたが、此の頃には轉じて存在を示す語とも變じて居る。「御入り候か」といへば、「おいでですか」の意である。 ○行方や御存じ候 行方を御存じ候やの意。 ○人は候はざりつるか 人は居なかつたか。 ○あら不思議や ワキガヒメの泣いて居る様に心づいて、驚き發した語。 ○御こと 御方といふに同じ。 ○愁傷の氣色 悲しみ歎く様子。 ○何と申したる御事 一體どうした事か。 ○何をか包み申べき 何を隠さうの意。 ○とてもものに 一つそのこと。 ○言語道斷 元來は佛經の語である。言語道斷心行所滅など、つゞけられる。言語にのべるべき道の絶ゆること。轉じて、思ひかけぬ事などにおどろき發する間投詞の様に用ひられ

る。○日向の勾當名をつき給ひ 名をつき給ひは、名を付け給ひの意。自ら名をつけたのである。勾當とは盲人といふ位の意に用ひたものであらう。元來は内侍の中の第一人の人をいひ、又眞言宗の方では役名に用ひられた名であるが、武家政治以後盲者の階級の一名となつた。最も高いのを檢校、次を勾當、下なのを座當といふ。○命をば旅人を頼み 旅人に米錢などを乞うて命をつなぐことをいふ。○我が名ならば答ふべし 景清といふのが自分の名であるならば、返答するであらう。○かしまし やかましい、騒々しい、聲高なり。○仕儀 事のありさま、次第。こんな我身のあり様故にの意。○千行の悲涙袂をくたし、菅家後草に「離家三四月、落涙百千行、萬事皆如夢、時々仰彼蒼」とあるのに依つた文である。朽たしは朽ちさせるの意 袂が涙にぬれ／＼して朽ちることをいつたもの。○萬事は皆夢の内のおだし身なりとうち覺めて 前の菅公の詩を用ひてゐる。「あだし身」とは「あだなる身」「假りの身」などの意。「打ちさめて」は悟つての意。夢に對してさめたると用ひたもの。萬事は夢幻泡影の如き假りの世の中の假りの身に過ぎぬ、それに執着するは愚であるといふ風に、悟りあきらめての意。○此の世に亡き者と思ひ切りたる乞食を 死んだものだと自分で自分を思ひ切つて居る自分の意。自ら乞食といつて居る所に、瘡癩の心が現はれてゐる。○日向とは日向 日向といふ國名を分つていつたのであつて、遠江を「遠き江」といふのと同じ用ひざまである。「日向ふ」は次の「向ひたる名」を呼び出す序詞として用ひられてゐる。○向ひたる名をば呼び給はで適當したる名を呼ばないでの意。文のつゞきは、「其の上我名は日向の勾當といふのだ、今は景清ではない。その丁度自分に適當した日向の勾當といふ名をば呼ばすして」の意である。○力なく捨てし梓弓 平家が亡びたために力なく弓馬の道を捨てたことをいふ。「梓弓」は弓馬の道の意を示すと同時に、次の「昔にかへる」のかへるを呼び出す序詞の用をなしてゐる。弓は矢をはなつ時弦返りがするからこの序詞に用ひられる。○昔にかへる己が名の悪心を起さじと 「昔にかへる悪七兵衛など」といふ名を

呼ばれると、悪心（いきどほりの心）は起すまいと思ふが、それでも腹立たしくなつて来る」といふ意。「己が名の悪心」とは「己の名の悪七兵衛」といふ語に縁ある悪心」の意。○所に住みながら 此の土地に住んで居ながら。○御扶持ある方々 米などを下さつて養ひ給はる御方々。○腹あしく由なきいひごと 立腹がましいつまらぬ申しごと。○目こそ聞けれど人の思はく一言の中に知るものを 「眼は盲目にはなつて居るが、人の一言を聞けば、その人の内心までも充分に洞察するだけの器量を持つて居るのだ」の意。をば強めの歎詞と見る。拾葉抄に、「古語云、蛇因一寸知其大小、人依一言知其賢愚」とある。○山は松風すは雪よ 「目こそ聞い人が人の思はくを一言の中に知る」といふ前の語を實例で示したのである。山に松風吹くを聞けば、直ぐに雪の降ることを知り、荒磯に波の寄せるのを聞いては、夕沙のさすことを直覺するといふのである。○見ぬ花のさむる夢の情しさよ 松風に夢のさめるが惜しいといふを、我身の榮華の夢のさめたのに喩へたもの。○さすがに我も平家なり 落ぶれたりとはいへさすがに我も昔は勇名をとらした平家の侍である。○物語 平家の物語をしようといふのである。【評釋】 以上が破の第二段に當る。景清が庵室の中で身に喰ひ入る悲痛を獨語して居る時、欺き歸らしめられた娘と伴とは里人に景清の行衛を尋ねる。「流され人の行方や御存じ候」といふトモの詞を、前の「流され人の行衛や知りである」といふのに比較して見る時、トモの詞の鄭重さが見える。里人に對してこの鄭重な語を言ひかけるトモを考へる時、景清の盲目乞食の見すばらしさが、再び反映されるのを感じる。里人が、「只今こなたへ御出で候山蔭に薬屋の候ふに人は候はさりけるか」といふ時、「其の薬屋には盲目なる乞食こそ候ひつれ」と答へるトモは、其の乞食が景清であるとは夢想だもしない。そこへ「なうその盲目なる乞食こそ御尋ね候ふ景清候よ」と言はれては娘主従はあまりの事に茫然自失したであらう。しかしその驚きを、トモにも娘にも言はせずして、「あらふしぎや」と里



人の言葉で起した手際は何といつても巧である。そして其の里人の不審がる言葉の中に、乞食と思つたのが我が父であつたと聞いて、悲しさ痛はしさに泣く姫の姿をはつきりと我々に感じさせる。若しこれを、トモが驚いて「言語道断のこと……」などと言ひ出し、姫がそれにつれて泣き言などを並べるとしたら、まるで芝居じみてしまつて、能としての集中的威力は失せてしまふであらう。里人の不審がる中に充分に間接的にヒメトモの驚愕悲痛を現はした所など、誠に巧さいふべきである。「御不審尤もにて候、何をか包み申し候べき……」といふトモは、驚きの心を取直し、ひたすらに里人に景清への紹介を頼む。「言語道断、さては景清の御息女にて御座候か、先づ御心を静めて聞しめされ候へ」といふ里人の語も極めて自然である。言語道断と非常な驚きを示し、トモの後ろにさめざめと泣いて居る女性の痛はしさに、さては景清の御息女であるかと満腔の同情を示し、しかしどうか心を静めて聞いてくれとなだめてかゝる所など、如何にも里人らしい心づかひである。

里人が景清に呼びかける詞、「景清の渡り候か」といつて更に「悪七兵衛景清の……」と疊かけていふ所、如何にも景清の心を掻き亂し激昂せしめねば止まぬ力がある。娘を欺き歸したものの、恩愛の情は盲目の心を強く揺り動かして、淋しさと悲しさに浸つて居る耳元へ、「悪七兵衛景清の渡り候か」は、あまりに唐突であり意地悪い言ひ方である。耳を抑へて「かしまし〜」と叫ばざるを得ない。「さなきだに故郷の者として尋ねしを、此の仕儀なれば身を恥ぢて名のらで歸す悲しさ」と千行の悲涙袂を朽たす悲をのべ、次に萬事は夢と悟つて今は此の世になき者と思ひ切つた我であると、あきらめの心を叙し、その自分に悪七兵衛などと呼ばかけては答へられるものか、怒りの

心を示し、日向の勾當と呼ばずして、聞くだに心を亂す昔の名を呼ばれては、怒るまいとしても怒らずに居られぬではないか、憐愍をもらす。こゝまでは漸次に剛毅短慮の景清の面目を強くあらはして来るが、直に又日向の勾當にかへり、「御扶持ある方々に憎まれ申すものならば、ひとへに盲の杖を失ふに似たるべし」といひ「たゞ許しおはしませ」と里人に詫び入る處には、一介の盲乞食と變じた景清のあさましい姿が見られる。さうかと思へば、「目こそ聞けれど人の思はく一言の中に知るものを」と、再び高慢らしい口調で昔の景清の名残を見せ、見せたかと思ふと直に「物語り始めて御なぐさみを申さん」と里人の機嫌をとる態度にかへる。こゝらに此の曲の景清が實によく現はされて居る。心ばかりは昔の景清の意氣を失はないが、次第に蝕ばんで来る肉體の衰へは如何ともし難く、かへり加へて盲目となつては、自分で自分の食をさへ求むるに途がない。しかし肉體の老衰はまだ景清の執念を亡ぼすまでには到つて居ない。そこに生れる惱み煩悶、それが景清をしてかうした態度をとらしめるものである。能の型。前段の終に、トモとヒメは後見座から立つて、伴を先に橋掛りへ行き、揚幕に向つて、里人を呼び出す。こゝで幕が上げられ、ワキ(里人)は素袍上下の姿で橋掛に出で、「里人とは何の御用にて候ぞ」と向ふ。トモが見すばらしい乞食のみ思つて居た者が、夢にも忘れず慕ひなつかしんで居た父であるとなつては、かよはく感じ易い姫は泣かざるを得ない。それに氣づいたワキが、「あら不思議や、景清のことを申して候へば、あれにまします御事の、御愁傷のけしき見え給ひて候は、何と申したる御事にて候ぞ」と向ひかける。脇としては見しらぬ都上

藤のシオ〜と打泣く姿に不審をいだくは當然である。トモから姫が景清の息女であると聞いて、「言語道断の事」と一度びはおどろき、再び姫への同情となり、景清が偽り歸したのは、別に姫を厭うたのではない。全く見すばらしい寢れを恥ぢたものであると姫を慰め、トモに向つて、自分で紹介の勞をとらうといふ。そしてワキが先登になりヒメトモと舞臺に入る。ヒメは脇座に、トモはヒメの左方に立つ。ワキは目付柱の方までゆき、そこから「なう〜景清の渡り候か、悪七兵衛景清の渡り候か」と力強く呼びかけながら、非常な勢で作り物(薬屋)までツカ〜と進み、薬屋の柱を二三度強く打つ型をする。作り物の中に座して居たシテは、驚いた形で、両手を耳に押あて、「かしまし〜」と力強い低聲でワキを制し、聞くも腹立つと苦り切る。「さなきだに故郷の者として」で耳をおさへてゐた手を下し、ワキに向ひ、「このしきなれば身を恥ぢて名のらで歸す悲しさ」と、我が悲痛さを訴へる如く述べてしを〜とするが、再び氣を張り聲を勵まして、「今は此の世になき者ぞ、思切つたる乞食を、悪七兵衛景清なんど、呼ば〜こなたが答ふべきか」と言ひ切り、「悪心は起さじと思へども又」と、面伏せいかにも疝癩にさはつた體で、右の手で膝をハタと打ち「腹立ちや」と面直す。ワキ、ヒメ、トモ、は「日向とは日に向ふ」の打返しので、三人ともにシテに向つて下に居るのである。「所に住みながら」からは、シテは前の暴言を悔いた心持であるから和らかに謠ひ、地謠が「御扶持あるかた〜」に、憎まれ申すものならば、ひとへに盲の杖を失ふに似たるべし」と謠ひ進むにつれて、座したま〜で両手を以て右前から左前の方へ杖をさぐる型をし、「かたはなる身の癖として腹あしくよしなき言ひごと、た〜ゆるしおはしませ」で、ワキに向つて合掌してひたすらに謝罪の意を示す。強情

な中にも現實の老衰を思ふ景清の可憐な心情が、あはれと思はれるまでに寫し出されて思はずほりとする所である。「目こそ暗けれど人の思はく一言の中に知るものを」からは、再び景清の心の中に往昔の矜持が蘇へつて來る所である。「山は松風、すは雪よ」と地謠の謠につれて、左の方を見上げて松風を心に聞き、「見ぬ花のさむる夢の惜しさよ」で、正面直し、少し面曇らして愁の心を示し、「さて又浦は荒磯に」と作り物の右の柱につかまつて居立ち「よする波も」〜面下げ「聞ゆるは」と耳を傾けて波の音を聞く心を示し、「夕汐もさすやらん」と面直す。「さすがに我も平家なり」と謠ひす〜む所で、杖をさぐり持つて立ち上り、靜に作り物から出で、「物語はじめて御慰みを申さん」の謠一ぱいに脇正面に居るワキの方に向つて下にゐる。全く機嫌がなほつて、今までの過言の詫に昔物語をしようといふ心持である。此の一段誠に見て居て見ごたえのする佳境が多い。

シテ問「如何に申し候、只今はちと心にかゝる事の候ひて、短慮を申して候、御免あらうする由にて候。ワキ「いやいやいつもの事にて候程に苦しからず候。又我等より以前に、景清を尋ね申したる人は無く候か。シテ「いやいや御尋ねより外に尋ねたる人はなく候。ワキ「あら偽を仰せ候や、正しう景清の御息女と仰せられ候ひて、御尋ね候ひしものを、何とて御包み候ぞ。餘りに御痛はしさにこれまで御供申して候。急いで父御に御對面候へ。ッレ「なうみづからこそこれまで参りて候へ。ッレ「恨めしやはるばるの道すがら、雨風露霜を凌ぎて参りたる志も、徒になる恨めしや。さては親の御慈悲も、子によりけるかや情なや、シテ「今までは包み隠すと思ひしに、あらはれけるか露の身の、置所なや恥しや。御身は花の姿にて、親子と名告り給ふならば、こゝに我が

名もあらはるべしと、思ひ切りつゝ過すなり。われを恨みと思ふなよ、下敷地あはれげに古は、疏き人をも訪へかして恨み誹るその報に、正しき子にだにも訪はれじと思ふ悲しさよ。上敷地一門の船のうち、一門の船のうちに肩を並べ膝を組み、所狭くすむ月の、景清は誰よりも御座船になくてかなふまじ、一類その以下武略さまさまに多けれど、名を取り楫の舟にのせ、主従隔てなかりしは、さも羨まれたりし身の、麒麟も老いぬれば驚馬に劣るが如くなり。

【語釋】 ○短慮を申して候 氣の短い立腹し 言葉を申しましたの意。謝罪の心である。○御免あらうするにて候 何卒御免下さいの意。○露の身の置き所なや恥しや 我身は消えも入り度いほどに恥しいといふ意。露の身とは景清自らをさす。次第の「露の身いかになりぬらん」に呼應した文である。「置所なし」とは恥しさに吾身の處置に困ることをいひ、俗にいふ消えも入り度いといふ意である。露の身、置所皆縁語である。○花の姿 娘盛りの美しさをいふ。○ここに吾が名もあらはるべし 花の姿の女性が、乞食同前の自分と親子の名告りをするなどいふ事があれば、そなたの身にいまはしい噂が世間に流布するであらうといふ意。「吾が名」とは「汝が名」といふ意味で使用してある。景清自らの自稱代名詞ではない。○あはれ實に古は疏き人をも訪へかすと云々 あゝ思へば、榮えくた昔の時代には、疏遠なるべき人までも、自分を訪ひ來ぬ時は、自分を思はぬ者よと或は訪りなどしたが、今は昔の驕慢の報ひが來て、正しき我子にさへ訪はれることを厭ひ恥ぢなければならぬほどの身の上に零落し果てた我身の悲しさよ、といふ意である。○一門の船の中 平家の一門が西海に漂うた船中に於ての意。○肩をならべ膝をくみて 大和田氏はたゞ込み合ひ雜居して乗船するだけの意として居られるが、「肩をならべ」には、やはり漢文でいふ比肩するといふ意も含まれて居ると見るのが良いやうである。○所せくすむ 「所せく」は究屈に、一ばいにの意。すむは住む意であるが、次句に連つて澄む月のと掛詞になつて居る。「澄む月の」は全體の文脈には無關係で、次の景清のかけを呼び出す役をつとめるだけである。○景清は誰よりも御座船になくて叶ふまじ 景清は勇猛の武士であるから、御座船(天皇の御乗船)の守護には無くてかなはぬ者であるとの意。○一類その以下武略さままじ多けれど 一類は、大和田氏は景清の一族と解して居らるゝが、一門の意と同じものと見て、平家の一門それ以下従ふ武士の中に、武略に長じた者は多いがの意とするが程當であらう。○名をとり楫の舟にのせ主従へだてなかりしは 其の船中の人々の中で、殊に猛勇の武名を取つて、主従の間隔てなく相和して居た點はの意。主従は景清とその家來と大和田氏は見て居られるが、私は平宗盛等と景清との關係と見度い。「とり楫の舟に乗せ」は名を取るととり楫と掛け、とり楫から舟、舟から乗せと縁語で連ねたもので、本文には無關係な修飾語である。○さも羨まれたりし身の さしもに他の人々から羨まれたほどの我身も。○麒麟も老れば驚馬に劣るが如くなり 千里を走るといはるゝ麒麟も、老ては驚馬に劣るといはれるが、まことにその通りであつて、勇名を轟した吾身も、かく老衰しては全く盲乞食に過ぎぬと嘆じるのである。「麒麟之衰也、驚馬先之」といふ戰國策の語や、「麒麟盛壯之時、一日而馳千里、至三衰老、驚馬先之」といふ史記の語が出典である。麒麟とは良く走る馬をいひ、驚馬は劣馬である。

【評釋】 以上を破の第三段とする。先づワキシテの問答から進んで姫と景清の對面となり最後に景清の述懐と進む。その進展は氣分の緊張さに於て漸次に高潮へと進むのであつて、この一段中に序破急の三段を含んで居るのである。

シテの「短慮を申して候御免あらうするにて候」は、前段の「腹悪しくよしなき言ひごと、たゞ許しおはしませ」

の時のやうに、切迫した感情からの呻きではなく、一通り心の平静をとり返し、機嫌の直つた景清が、心安げに里人に向つて、「只今は失禮、ついむしやくしやした折だつたので……」と話しかける態度である。ワキ(里人)の應答も洒々たるもので、「いつもの事にて候程に苦しからず候」と、景清の疝癪には慣れ切つたといふ調子である。皮肉的なこの語の天真爛漫を見ると、思はず微笑を催す感がある。この打とけた調子から一轉するのはワキの質問である。「自分より他に尋ねた者はないか」との一間は景清には痛い所へ觸られた辛さがある。しかし景清の強情さは、「そんな者はない」と答へさせてしまふ。「かしまし／＼さなきだに、故郷の者として尋ねしを……」と里人を叱咤したことを考へれば、こんな間の抜けた返事は出来ない筈であるが、痛い所を突かれた景清には、やゝ狼狽の氣味があつたのである。「あら偽を仰せ候や、まさしく景清の御息女と仰せ候ひて……」とワキに一本突込まれては景清は益々形勢不利に陥らざるを得ない。「あまりに御痛はしさに、これまで御供申して候」と聞いた時の景清の心は、驚愕と羞恥と嬉しさが渦を巻いて混亂したであらう。ワキが姫を顧みて「急いで父御に御對面候へ」といふと、姫はつれなく偽り返された恨みをのべ、親の慈悲も子によつて厚薄あるものかと、女性の身をなげく。こゝから破の段に進んで、景清は我身を恥ぢ、花の姿の姫に名告りをせぬのがせめての親の恩愛である。偽り返すは親の慈悲であると訓し、昔を思ひ今を思つて思はずも涙を流す。「あはれげに古は……」から「訪はれじと思ふ悲しさよ」までは、落魄した景清の真心の叫びである。「一門の船の内……」からは、景清の感慨を叙する所で、急の段に當り最も重要な曲所であるが、「景清は誰よりも御座船になくてかなふまじ」「武略さま／＼多けれど名をこり樹の舟にのせ」主

従へだてなかりし」「さも羨まれたりし身の」と、往昔の權威、武名、光榮、を屢々並べ叙し來つて、花やかなる過去を力強く示し、一轉して「麒麟も老ぬれば驚馬に劣るが如くなり」と現在目前の悲境に落す所、對照の妙を極めて、一層痛切に景清の落魄悲痛を示して居るのである。

能の型。前段の終りは、シテが作り物から出で、ワキに向つて下に居る(片膝立てゝ座した形)所で終る。シテは作り物の三四尺前に下に居、地謡が切れると、ワキに向つて、「いかに申し候、只今はちと心にかゝる事の候ひて……」とのびやかに言ふ。ワキはシテに向つて脇正面に下に居ながら「いや／＼いつもの事にて候ほどに苦しからず候」といひ、氣を換えた調子で、「我等より以前に景清を尋ね申したる人はなく候か」と向ふ。シテは「いや／＼御尋ねより外に尋ねたる人は無く候」と答へる。ワキはかゝつて「あら偽を仰せ候や……何とて御包み候ぞ」とシテを咎め、姫を顧みて「急いで父御に御對面候へ」とすゝめる。此時脇座の方に下に居た姫は、「なる、みづからこここれまで参りて候へ」と謠ひながら立ち上り、サラ／＼とシテの側へ歩みより、シテの左の袖を両手でとらへ、伏目になりつゝ下に居、「恨めしや遙々の道すがら、雨風露霜を凌ぎて参りたる心ざしも、いたづらになる恨めしや。さては親の御慈悲も」と右手でシオリつゝ「子によりけるかや情なや」とシオリ返す。恨めしさ懐しさ悲しさに心亂れて、景清に取りすがつて泣く姫の心情實にたつぷりと表現せられて、觀客の袖しぼらせる處である。私もこの演出で眼底のうるむのを如何ともし難かつた一人であるが、この簡朴な表現の中に、これだけの藝術的威力を出す所が能の妙所である。別段悲しげな聲色を使ふのでもなく、取り亂した形を實演するのでもなく、それでゐて觀者

をしみじみとした哀感の境地に没らせるのは、畢竟するに演者の心に充滿した藝術的心靈の威力であらう。シテは  
 姫に袖をとられたまゝの姿勢で「今までは包み隠すと思ひしに、あらはれけるか露の身の、置き所なや恥しや」と諍  
 ひ、「御身は花の姿にて」でジリ／＼と姫の方へ向き直り、「親子と名告り給ふならば」とうたひつゝ探りながら姫の  
 右肩へ左手をかけ、少し居立つ、（膝頓で立つた姿）姿勢をとり、「殊にわが名もあらはるべしと思ひ切りつゝ過すな  
 り」と諍ひ、「我を恨み給ふなよ」で、右手をのばして探りつゝ姫の左袖をとらへて、俯向き加減に姫の顔を見入る  
 型をする。そしてそのまゝの姿勢で、地諍が、「あはれげに古は、疏き人をも訪へかして、恨みそしる其の報に  
 と諍ひ進むのを聞き入り、「正しき子にだにも」の所で、左手を姫の肩から放してシオル。さすがの景清もこゝに  
 到つて、はじめて涙を見せるのである。「訪はれじと思ふ悲しさよ」の打切で、シオリを止め、右手も放して正面に  
 向き直る。地の上歌になり「一門の船の内、一門の船の内」とすゝむ所で、姫は少し下つて下に居、景清は一人兀  
 然と座した形になる。以下景清の昔時の榮華をのべる諍の間は、シテワキツレは微動もしない。最後の「麒麟も老  
 いぬれば」の所に到つて、シテは下に居る姿勢からグタリと安座（兩膝組み、尻を地に着けた形）し、左手で膝をか  
 くへ、「驚馬に劣るが如くなり」で、力なくシホ／＼と面伏せる（伏目になる）のである。全く力抜けて老い衰へた景  
 清の氣分が、舞臺一面を押しつゝむ感のする所である。

ワキ詞「あら痛はしや先づかう渡り候へ、如何に景清に申し候。御女御の御所望の候、シテ詞「何事にて候ふぞ、

ワキ「八島にて景清の御高名の様か聞こしめされたきよし仰せられ候、そと御物語あつて聞かせ申され候へ。シテ

「是は何とやらん似合はぬ所望にて候へども、これ迄はるばる來りたる志、あまりに不便に候程に、語つて  
 聞かせ候べし。この物語過ぎ候はゞ、彼の者をやがて故郷へ歸して給はり候へ。ワキ「心得申し候。御物語過ぎ  
 候はゞ、やがて歸し申さうするにて候。

シテ、カタリ「いでその頃は壽永三年三月下旬の事なりしに、平家は船源氏は陸、兩陣を海岸に張つて、たがひ  
 に勝負を決せんと欲す。カ、ル「能登守教經宣ふやう、去年播磨の室山、備中の水嶋鴨越に至るまで、一度も  
 味方の利無かつし事、偏に義經が謀いみじきに依つてなり。いかにもして九郎を討たん謀こそあらまほし  
 けれと宣へば、詞「景清心に思ふやう、判官なればとて鬼神にてもあらばこそ。命を捨てば安かりなんと思ひ、  
 教經に最後の暇乞ひ、陸にあがれば源氏の兵、カ、ル「あまりまじとて驅け向ふ。上歌「景清これを見て、景清  
 これを見て、物々しやと夕日影に、打物ひらめかいて切つてかゝれば、こらへずして刃向ひたる兵は四方へ  
 ばつとぞ逃げにける、のがさじと、シテ「さもうしや方々よ、源平互に見る目も恥し、一人をとめん事は案のう  
 ち物、小脇にかいこんで、なにがしは平家の侍、悪七兵衛景清と、名告りかけ名告りかけ、手どりにせんと追  
 うて行く。三保谷が着たりける、兜の鍔を、取りはづし取りはづし、二三次、逃げのびたれども、思ふ敵な  
 ればのがさじと、飛びかゝり兜をおつとり、えいやと引く程に鍔は切れて、此方にとまれば主は先へ逃げのび  
 ぬ。遙に隔てゝ立ち歸りさるにても汝、恐ろしや腕の強きといひければ、景清は三保谷が、頸の骨こそ、強け  
 れと笑ひて、左右へのきにける。

キリ地「昔忘れぬ物語、衰へ果て、心さへ、亂れけるぞや恥しや。この世はとても幾程の、命のつらさ末近し、はや立ち歸り亡き跡を、吊ひ給へ盲目の、闇き所の燈あしき道橋と頼むべし。さらばよ留る行くぞとの、たと一聲を聞き残す、これぞ親子の形見なる、これぞ親子の形見なる。」

【語釋】 ○あら痛はしや先づかう渡り候へ、ワキが其の座の愁歎を見ていふ語である。「先づこちらへ御出でなさい」といふのは姫への語である。 ○如何に 呼びかける語。 ○御所望の候 御望みがある。 ○御高名の様 武名をあげられた次第様子。 ○何とやらん似合はぬ所望 娘が女性の身でありながら、武勇談を願ふことは似合はぬ所望であるがの意。 ○不便 かわいさう憫然である。 ○やがて 直ぐに早速に。 ○壽永三年三月下旬 東鑑、盛長私記、平家物語、長門本には、何れも、元暦二年三月廿四日とある。元暦は後鳥羽の年號であり、壽永は安徳天皇の年號である。元暦二年は壽永四年に當るので、謡曲作者は一年誤つてゐる。以下平家物語の八嶋合戦の記事に依つて作つた文章である。 ○兩陣を海岸に張つて 兩軍が海岸に陣をはつての意。 ○去年播磨の室山、備中の水島云々 この兩度の勝には平家は勝利を得て居るのであるが、一度も利なかつし事と謡曲作者はのべてゐる。文章の都合上で、二ヶ所の合戦地を鶴越と合して、平家の連敗をいはうとしたものであらう。水島の合戦は平家物語卷八にあり、平家と木曾義仲の軍との合戦であり。室山合戦も平家物語卷八にあつて多田十郎と平家との戦である。たゞ鶴越の合戦のみが義經との戦争であり平家の敗走したものである。 ○味方の利なかつし事 味方の勝利のなかりし事の意。 ○いみじきによつてなり すぐれてゐるが故である。 ○判官 はうぐ、わんと訓む時は、檢非違使の尉の時に限る。此の時義經は其の職にあつたのでかくいふ。 ○鬼神にてもあらばこそ 鬼神ではなしの意。詳しくいへば「鬼神にてもあらばこそ、打取り難きこともあらめ、されど鬼神にては非ざれば」の意である。 ○命をすてばやすかりなんと 我が一命を捨て、かゝる

ならば、討取ることは容易であらうと。 ○最後の暇乞ひ 死を決したので、最後の暇を乞ふのである。 ○餘すまじとてかけ向ふ 景清を打ち漏らすまいといふので、自分の方へ駆け向つて來るの意。 ○物々しやと夕日影に打物ひらめかいて 何だ仰々しい振舞はと言ひつゝ、折から照り渡る夕日の光に、太刀をひらめかしての意。「物々し」は仰々しい、大それたといふ意で、源氏の大勢が一人の景清に向つて來たことを嘲る言葉である。「いう日影」は言ふと夕日とをかけた掛詞。 ○こらへずして敵し得ずしての意。 ○さもうしや 「さもしや」といふ語を、謗ふ工合から延音にして、「さもうしや」といつたもの。卑怯なりきたなし等の意。「方々」とは逃げゆく敵に向つて呼びかける語。 ○源平互に見る目も恥し 「源平兩軍とも、我々の戦を見物してゐるぞ、その見物せる人々に對しても、逃げゆくは恥辱なり」の意。 ○一人をさめんことは案の打物小脇にかいこんで「我一人を討ちとめんことは、案の内にあらずやと呼はりつゝ、太刀を小脇にかいこんで」とつゞく文脈である。「案の内」とは机上の物をとる如く容易であるとの意である。それと打物とを掛詞にしたもの。「一人をさめんことは案の内」とは、逃げてゆく敵に對して景清が冷嘲した語である。 ○小脇にかいこむ 長刀などであるを、脇の下にはさみ持つことをいふが、こゝは太刀であるから、身に引きそばめて持つことを言つたものと思はれる。能の型の時には、太刀になぞらへた扇に、左手をそへて、八相の構えをして見せる。(八相の構とは、刀の切先を上、右脇に引きそばめて持つ構えをいふ)。平家物語の本文では、景清は長刀を以て戦つたと記してあるから、或は打物は長刀をさすのかも知れぬが、能の上では、どこまでも太刀としてゐるから、右の如くに解釋する。 ○なにがしは 拙者はといふに同じ。 ○手取りにせんと 素手で捕へよう。 ○三保谷 平家物語には、美尾谷十郎とある。 ○鑑 宵の後に廂のやうに付けて垂れた部分。 ○思ふ敵 良き敵と目ざしてかゝつた相手であるからの意。 ○おつとり 取りに同じ。つかむこと。 ○遙にへだて、立歸り 美保谷が遙に逃げのびてから、振り返つての

意。○左右へのきける 別れたりの意。○昔忘れぬ物語云々 景清が里人にいふ語。昔忘れぬ物語をするにつけても、現在の我身は衰へ果て、あまつさへ心までも亂れて来る、實に恥しいことであるとの意。○此の世はとていもいくほどの命のつらさ末近し 娘の人丸に向つていふ語。此世に於ては到底幾ばくの餘命もあるまい。つらい命の末も近づいて居るの意。「命のつらさ」とは死にたくても、壽命があるから、生きて居ることをいふ。つれなき命といふに同じい。死を欲する心にも同情せず命ばかりが平氣で長つゞきをすることを、「つれなき命」といふ。○亡き跡を弔ひ給へ 我が亡き後の弔をしてくれよ。○盲目のくらき所の燈、悪しき道橋と頼むべし 「盲目の」は自分の盲目であることを含みつゝ、次の「聞き」といふ語の枕詞をなして居る。亡くなつた後の追弔廻向を、暗所をゆく時の燈や、悪い道をゆく時の橋の如くに、自分は冥途の旅路に於ての傾り力と頼みにするよとの意。○さらばよ留る 景清の詞。○行くぞ 娘の言葉。「それでは俺はこゝにとまるよ」といへば、娘が、「では私は歸ります」といふ、親子の別れの語である。○只一聲を聞き残す 只一聲とは「行くぞ」の語を直ぐに受ける。景清が盲目であるために、「聞き残す」といつたものであり、先づ父の方を結ぶ。○これぞ親子の形見なる 互に其の一聲をもつて、形見として別れてゆくといつて、父子を一つに収結した文である。

【評釋】 先づ以上を以て急の段と考へ度い。しかしこれには私も疑問を持つて居る。それは景清の語りの終までを破の第四段として、最後のキリだけを急の段と見ることも出来るやうであるからである。世阿彌は能の進行を序一段、破三段、急一段と五段に別つことを本體として居るが、四段又は六段の變化をみとめて居るのである。そして軍體能(シテが源平の名將の如きもの)には特に六段をも許容して居り、又平家物語などを粉本とした作は、平家になるべく文句を似せる事の必要をとき、且つ一曲の一主要部(所謂ヤマに當る所)は、破の段の終に於て書くべき事

をのべて居るのである。(詳細は、十六部集の能作書の中にある)それで翻つて此の景清の曲を見る時、その中心を、景清の八島合戦の功名談にあるとすれば、語りの部分は、破の四段の位にあたるのである。そしてそれは演能上から見ても一理あるのであつて、この語りは見て面白く、聞いて面白い所であり、考へやうによつては、世阿彌の開聞眼(ヤマの意である)とも考へられるのである。

次に此全體を急の段と考へる私の考は、此の景清の曲柄から考へて見たのである。此の曲の中心は言ふまでもなく、盲目老衰の景清の演出であり、人丸娘と老景清との再會の興味にありと考へられる。その情味の勝つた景清を求むれば、どうしても前段が一曲のヤマと考へねばならなくなる。然らば演能上の可成りの効果があり興味が多い語りは如何なる地位に當るかといふことが次に問題となつてあらはれる。それに就ては私は、此の語りの段は、幽靈能の後、ジテが本來の姿であらはれて、戦場の物語りをし、その戦争の有様を真似て見せる所に相當すると思ふのである。さう考へれば、此の語りを、強いて破の四段と考へる必要はなく、立派に急の段の一節として通用する様に思ふのである。それで以下この假説の下に評釋してゆくこととする。

此の急の一段も、又細別する時には明かに序破急の三段の進行で進んで居る。先づワキシテの問答から景清のかたりを呼び出すまでが序、カタリの段が破、キリが急といふ順序である。

ワキの「あら痛はしや」は景清父子の愁嘆に打たれた里人の詠嘆である。見るに忍びないでワキは其の場の心氣を一轉しようとし、先づ娘をうながして父の側から離れしめ、更に氣を引立てるために、景清に勇ましい功名談をさ

せようとするのである。それを娘の所望であるとかこつけた所は、中々に里人の機智が見えて面白い。景清も「何とやらん似合はぬ所望に候へども」と言ひつゝも、遙々尋ね下つた娘の志にめで、語らうといふのである。しかし此の時の景清には再び昔の意氣が萌え初めて居る。それで「此の物語過ぎ候はど、かの者をやがて故郷へ歸し給はり候へ」と、どこまでも思愛に亂されぬ態度を保持しようとする。武士の意氣地、亦つらい哉である。

景清の語りになつてからは、大體平家物語などを粉本として語を進めて居る。これは謡曲が創作せられて居た當時は、平家琵琶に合わせて平家物語を語ることが流行して居た時代であつたから、其の平家で馴染ある詞句を使用して、見物人にうまく鑑賞させようとしたものであつて、世阿彌などの活眼から生れた創作法である。今此の典據と思はれる平家物語卷十弓流しの條を引用して、謡曲文との比較を試みよう。

平家、是那須與一が、船中で舞ひすました男を射殺したこと（を本意なしとや思ひけん、弓持て一人、楯ついで一人、長刀もつて一人、武者三人落に上り、「源氏安を寄せよや」とぞ招きける。判官「安からぬ事なり。斥強ならん若黨共、馳寄せて蹴散らせ」と宣へば、武藏國の住人、美尾屋十郎、同四郎、同藤七、上野國の住人、丹生四郎、信濃國の住人、木曾中次、五騎つれて、喚いて駈く。先づ楯の影より、漆籠に黒ほろ作だる大の矢を以て、眞先に進んだる美尾屋十郎が馬の左の鞆、盡を、管のかくるゝ程に射込うだる。犀風を返す様に、馬はどうと倒るれば、主は弓手の足を越え馬手の方へ下り立つて、やがて太刀をぞ抜たりける。又楯の陰より大長刀打振つてかゝりければ、美尾屋十郎、小太刀に叶はじとや思ひけん、貝吹いて逃げければ、やがて續いて追駈けたり。長刀にて薙がんずるかと思ふ處に、さはなくして、長刀をば弓手の脇にかい挟み、馬手の手を差延べて、美尾屋十郎が背の鍔をつかまうとす。つかまれじと逃ぐる。三度つかみはづいて、四度のたび、むずこひむ。暫ぞ堪つて見え

し、鉢付の板より、ふつと引切つてぞ逃げたりける。残り四騎は馬を惜うでかゝらず見物してぞ居たりける。美尾屋十郎は、味方の馬の陰に逃げ入つて息つき居たり。敵は追うても來ず。其後背の鍔をば長刀のさきに貫き、高く差上げ大音聲をあげて、「遠からん者は音にも聞け、近くば目にも見給へ、是こそ京童のよぶなる上總の悪七兵衛景清よ」と名乗りすて、味方の楯の陰へぞ退きにける。

平家物語の描寫は第三者の立場に觀察點を置いて居る。そして景清の名を最後に名らせて居る。謡曲はそれを全部景清の立場から述べて居る。平家の文章を全く立場を變へて語らして居るのである。又景清以下三人が陸に上つて戦つた其の動機に於ても、平家と謡曲は異なる。謡曲に於ては景清は義經を打とるためとし、その原因を能登守に持つて行つて居る。かくする事によつて、景清の武勇を一層引立て得られるのである。又謡曲に於ては景清一人が源氏の武者を相手にした如くし、清景と名告りを上げさせ、最後に「汝恐ろしや腕の強きといひければ、景清は三保谷が頸の骨こそ強けれと笑ひて左右へぞのきにける」と、愛嬌味のある話を附加して居る。これ等の謡曲文の作りかへは何から起つたか。それは一つには主人公の景清を鮮明に印象的にうき上らせて、物語りとしての効果を高めるためであり、第二には舞臺に於ける型を生むためである。そしてこの第二の理由が謡曲作者の尤も苦心經營する所なのである。この語りから如何なる型が生れて居るかは、能の型の説明の所で明かにするであらう。

キリの文章は、其の簡結さと、簡結さの中に盛られて居る餘情の豊かさとに注目すべきであらう。これだけの文章を、説明的な文章で書くならば少くとも二倍以上の文字の数を要する。しかもその文章は決して詩的な含蓄味を



持ち得ないであらう。世阿彌が、詞章を作る心得として、どこまでも切り除け／＼して、不要の詞句を省けといつたのは、こゝらによくあらはれて居る。型を生かし、諺つて餘情の含蓄が豊富であること、それは殊にキリに於て必要である。

能に於ける型。

前段の終は、「麒麟も老いぬれば、驚馬に劣るが如くなり」でシテが平座して面伏せて悲嘆の状を示す所で終つて居る。この時能では、景清一人の悲嘆であつて、姫は別にシオリをして居るのではないが、それは能がシテ一人を本意とし中心とするものであるからであつて、姫の悲嘆は其の腹藝ですましておくのである。其の會見を押し包む悲みの氣を一轉させる所から此の段は始まる。ワキは地詠が切れると、「あら痛はしや、先づかう渡り候へ」と言ひながら立あがり、姫をうながし立てる心で、脇正面の座から、脇座の方へ行く。それと同時に、姫も立つて、地詠の前の以前の席に歸り、二人共に下に居る。席定まつて後、ワキは膝立直しシテに向つて、姫の所望であるからと言つて、八島の功名談を所望する。かくて景清の語を引出す役をつとめる。

シテは舞臺の中央、やゝ大小前に近くの座で、下に居る姿勢で扇子を抜き持つて、「いで其頃は壽永三年三月下旬の事なりしに……」と語り出す。語りが進んで、「教經に最後の暇乞ひ、陸に上れば源氏の兵」の所で、チリ／＼と體を右向け、脇正面の方に源氏の軍勢を見る心を示し、「餘すまじとて駈向ふ」と諺ひつゝ、面だけを正面に直し、以て脇正面から正面の方に敵勢雲霞の如く寄せ來る心を示す。そこから地詠になり、「物々しやミ夕日影に打もの

ひらめかいて」で、刀をぬき放つた心で右手に扇持ち、すつと差しのばして。扇に目をつけ。「切つてかゝればこらへずして」と、扇を刀として、右肩から又左肩から、切り拂ふ型をし、「又向いたる兵は、四方へばつとぞ逃げにける」と、左、右、に面使ひ(左・右を見ること)、敵兵四散する心を示す。「さもうしや方々よ」で正面に直し、「源平たがひに見る目も恥し、一人をとめん事は案の打物、小脇にかいこんで」と諺ひすゝむにつれ、少し右受け(右方を向くこと)で、扇を持つ右手に左手をそへて、かこむ型をし、「なにがしは平家の侍、悪七兵衛景清と名のりかけ／＼」で、正面へ向きかへり、「手取りにせんぞ追うてゆく」と、左手を前に差し追ひかける心持を示し、「美保谷が着たりける胃の鏝を取はづし／＼」の所で、左手を差し伸ばして二度つかみはづす型をし、「二三度逃げのびたれども、思ふ敵なれば逃がさじ」と諺ふ間に、扇を開き左手に持ち、「飛びかゝり胃おつとり」で、扇を伏せて前方へ手一ぱいに差のばし、左手で敵の鏝をつかんだ形を示し、「えいやと引く程に」の所で、下に居る姿勢のまま、左足をぐつと後方に引いて、敵を引きとめる心を示し、「鏝は切れて此方にとまれば」と、引切れた心で、差しのばした扇子をばたり膝の上に引きつけ、尻居にどうぞ倒れた心持で、グタリと安座し、「主は先へ逃げのびぬ」と、正面遠く見やつて、美保谷の逃げゆく心を示す。「遙にへだて立かへり」の間に扇を腰におさめ、「三保谷が頸の骨こそ強けれ」と、左手をあげて自分の頸を差し示し、「笑ひて左右へ」で打合をし、「のきにける」の打切に、下に居る姿勢にかへる。以上の段は見てゐて面白く且つ聞いて面白い。正に急の段の眼目である。

キリは一曲を餘情ゆたかに終結する所であるが、こゝではシテは再び老い衰へた景清にかへつて、「昔わすれぬ

物語、衰へはてゝ心さへ亂れけるぞや恥しや、此世はとても幾程の、命のつらさ未近し」を謠ひすゝむる間は悄然  
 ました姿で伏目になつて居る。そして「未近し」のあたりで姫の方に向き、「早や立ち歸り」で、左手で姫を差して、  
 歸路をうながす心を示し、「亡きあとを弔ひ給へ旨目の」と謠ひすゝむにつれて、シテは手探りに杖を取つて、痛々  
 しく立上り、目付柱の方へ少し歩み出す。これと同時に、姫、トモ、ワキも立ち上り、姫はシテの前方を通つて、  
 橋掛りの方へと歩んでゆく。「くらき所の燈、あしき道橋と頼むべし」を謠ふ間に、シテは杖でさぐりさぐり歩む中  
 に、前方を通りぬける姫に行き當る。そして足をとめて靜に左手を姫の右肩にかける。娘の肩を抱いて、しばしの  
 名残を惜しむ心である。見てゐて又思はずホロリと涙ぐましくなる所であつて、實に餘情の深い所である。その頃  
 に地謠の方は「さらばよとまる」を景清の情をのべるあたりに進んでゐるのであるが、姫も暫く立とまつて心持を  
 し、「ゆくぞとの」の語で姫は靜に景清の手をはなれて橋掛りの方へ歩み、ワキ、トモは、シテの後方を通つて、姫の  
 後に従ふ。「只一聲を聞き残す」のあたりで、シテは姫の去りゆく橋掛りの方を見送りつゝ、常座に止り、杖に兩手  
 をかけ胸に當てゝ、姫の去りゆくを聞く心持をし、「これぞ親子の形見なる」で、靜に脇正面に向き直し、その返し  
 にシオリ留めでとめるのである。

(シオリ留とは、最後の留を、シオリつゝ詰めて足で留めるのであつて、足拍子を踏まない。普通の留は、大てい留拍子といつて、  
 足で踏みこめるのである。)

熊野

曲の典據。熊野の曲は、平家物語の小話から暗示を得て作られたものである。同書卷十、重衡海道下りの條に、  
 「濱名の橋を渡り給へば、松の梢に風さえて、入江に騒ぐ波の音、さらでも旅は物憂きに、心をつくす夕まぐれ、  
 池田の宿にも着き給ひぬ。彼宿の長者熊野が娘、侍従が許に、其夜は三位宿せられけり。侍従、三位中將殿を見奉  
 て、日頃は傳にだに思し召し寄り給はぬ人の、今日はかゝる處へいらせ給ふことの不思議さよこて、一首の歌を奉  
 る。

旅の空殖生の小屋のいぶせきに故郷いかに戀しかるらん

中將の返事に

故郷も戀しくもなし旅の空都もつひの柄ならねば

やゝ有て、中將梶原を召されて、さても只今の歌の主は如何なる者ぞ。やさしうも仕つたる者かなと宣へば、景  
 時かしこまつて申けるは、君は未だ知ろし召され候はずや。あれこそ八島の大官殿の、未だ當國の守にて渡らせ給  
 ひし時、召され參らせて、御最愛候ひしに、老母を是にとどめおき、常は暇を申しゝかども、賜らざりければ、  
 比は彌生の始にてもやありけん、

如何にせん都の春も惜しけれど馴れし東の花や散るらん

といふ名歌仕り、暇を賜て罷下り候ひし海道一の名人にて候とぞ申しける。」

これだけの小話を發展させて、熊野の一曲を創作した作者の手腕は誠に非凡と稱すべきものである。

先づ第一に、中心となるべき所は「如何にせん……」の和歌である。一曲は此の和歌の情調に導かれて作られて居る。そしてこの和歌の段に到つてクライマックスになる。その導き方が又極めて巧妙である。ツレの朝顔の點出によつて、故郷の老母の病衰を知らせ、歸心矢の如き熊野の願を一度は宗盛によつて拒絶せしめ、「心は先にゆきかぬる」花見に導く。その道行のロンギ、曲の清水の櫻花の下の熊野の感懐、美しく優雅な熊野の舞、それ等は層々として幽玄雅麗の世界を吾人の前に展開する。そしてそこに突如として春雨を點出し落花を挿み、その變化の妙の中から、一曲の中心たる和歌を引出して來る所など、誠に至れり盡せりの用意であると稱し得るのである。

曲の作者。本曲の名は世阿彌の十六部集中には、能作書の條にも中樂談義の條にも見えて居ない。従つて十六部集からは作者を斷定出來難いのである。しかし世阿彌の女婿である金春禪竹が康正二年に著した歌舞髓腦記及び拾玉得花には、熊野を以て、幽玄能の代表的のものとしてかゝげ、松風村雨の能を「秋の夕暮」に比し、この曲を「春の曙」に比して、頗る重んじて居る所を見る。世阿彌の作とすれば晩年の作と考へねばならない。市川寛氏は曲柄から考へて、むしろこの曲は禪竹の作ではなからうかと言つて居られる。私は此の市川氏の説に左祖したいと思ふ。但し大永四年に吉田兼持の撰した能本作者註文には、此曲を世阿彌作の女能の部に收めて居るし、徳川時代の觀世元章の二百十番謠目錄にも、世阿彌作としてあるので、禪竹作と斷定を下すことには、尙再考を要すると思ふ。

曲の種屬。熊野は本三番目物の代表作である。三番目物と稱するのは、能の番組、神能、修羅能、女能、現在能（狂女物）、鬼事の五番の第三番目の女能、所謂靈物であつて、これを三番目物といふ。この中にも、種々の別はあるが、その中の純粹な三番目物を本三番目ものと稱して居る。熊野、松風、千手、祇王、楊貴妃、井筒など、その代表的なものである。元來此の本三番目物は、美人の舞といふものが、其の共通點をなして居るもので、すべてが美しく上品な情趣と技巧とで作りあげられて居るものである。所謂幽玄の粹である。従つて、此等の曲は、靜かに美しい姿の展開推移に深く目をそそいで、その色と線との織り成す美感の世界に、恍惚として陶醉することが出來なければ、頗る退屈なものとなつてしまふのである。従つて謠曲の詞章の鑑賞も、此の點に充分の注意を拂つて行はなければ生命を失したもとなるおそれがあるのである。

曲の位。「熊野松風に米の飯」にまで言ひはやされる程に此曲は有名である。所謂能における米の飯である。特殊な構想もなければ、技巧に於けるケレンがあるでもないが、味はへば味はふ程、噛みしめればかみしめる程、滋味の豊かな所が此の曲の命である。如何にも能らしい優雅さ、所謂幽玄の氣分の搖漾する所が本曲の特色である。禪竹の歌舞髓腦記に、

遊屋（熊野） 籠深花風

是よりは、常の女がより品々ありといへども、たゞ上類の心姿なるべし。ことに此風姿、春の明ぼの如し。

眞木の戸は軒塙の花のかけなれや床もまくらも春の明ぼの

又心底切なる所、強力體か。

流木と立つ白波と燒鹽といづれかからきわたつうみのそこ

故郷有り母秋風涙、

旅館無人暮雨魂、

と此の曲の位取りを論じて居る。即ち此の曲は、世阿彌の定めた九位次第の順序からいへば、上三花、第二の龍深花風に當り、其の風姿は、宛然として春曙の花やかさを持つべきものであり、それを更に和歌の風情にあてはめれば、「眞木の戸は軒塙の花のかけなれや床も枕も春のあけぼの」といふ一首の和歌の風情にある。しかしそれだけでは未だ熊野が老母を思ふ心底の切なる情をかもすに足りない。それでその上に、藤原定家の定めたといはれる和歌十體中の強力體の心を持つべきである。その心持は「流木と」云々の歌の心持であり、且つ「故郷母有り秋風の涙、旅館人無し暮雨の魂」といふ詩の心持である。この歌と詩との心持を、春の曙の如き幽玄な中に含ませて進んでゆくべきであると説いてゐるのである。以上の禪竹の説明で充分に此の曲の位がわかると思はれる。

シ	テ	熊	野
ツ	レ	朝	顔
ワ	キ	平	宗
ワ	キ	從	者

所 京 都  
季 三 月

ワキツ「これは平の宗盛なり。さても遠江の國池田の宿の長をば熊野に申し候。久しく都に留め置きて候が、老母のいたはりとして度々暇を乞ひ候へども、この春ばかりの花見の友と思ひ留め置きて候。如何に誰かある。ワキツ」御前に候。ワキツ「熊野來りてあらば此方へと申し候へ。ワキツ」畏つて候。

ツレ女次第「夢の間惜しき春なれや、夢の間おしき春なれや、咲く頃花を尋ねん。ヤシ」これは遠江の國池田の宿、長者の御内に仕へ申す、朝顔と申す女にて候。ワキツ「さても熊野久しく都に御入り候が、この程老母の御痛はりとして、度々人を御上せ候へども、更に御下りもなく候程に、この度は朝顔が御迎に上り候。進行「この程の、旅の衣の日も添ひて、旅の衣の日もそひて、幾夕暮の宿ならん。夢も數そふ假枕、明し暮して程もなく、都に早く着きにけり、都に早く着きにけり。

ワキツ「急ぎ候程に、これははや都に着きて候。これなる御内が熊野の御入り候所にてありげに候。まづまづ案内を申さばやと思ひ候。如何に案内申し候。池田の宿より朝顔が参りて候。それく御申し候へ。」

【語釋】

○これは平の宗盛なり 平宗盛といふ人物からいへば、内大臣にまでなつた者であるから、「抑々是は」と出るべき所であるが、それを「是は」としたのは、役がワキであるためであらう。ワキに於ても、神事能は多く「抑是は」ではじまるが、それは曲柄によつたためである。

○池田の宿の長をば熊野と申し候 池田の宿は現在には天龍川の西にあるが、昔は川東にあつた（太平記）のである。村の位置は變らぬが、川の位置の變化したためであらう。宿といふのは宿驛である。街道筋に驛をおくことは、大寶令によつて定まつたもので、由來は頗る古い。長は驛長である。今義解に「凡各置二長一人、取二驛戸内家口富、幹事者二爲之」とある。昔の職は、驛傳、及び戰爭の時、軍人兵馬の往來ある時に、車馬を徴してその便宜をはかり、又宿をつと

めたものである。後にはこれが變じて、朝廷往來の官吏の宿をすることになり、そのために給仕女などを置いた。それが轉じて、宿屋兼遊女屋の如きものともなつたのである。江戸幕府以後は、本陣と稱せられて、大名の旅宿となつた。饗食以後になると、長を轉じて遊女、婦人等の意に用ふるやうにもなつてゐるが、元來は男で宿驛の長であるのである。この謡曲では、長は熊野といふ女性をさして居るのである。熊野は平家物語では、長者の名であつて、宗盛に愛せられたのは、其の姫侍従といふことになつて居る。拾葉抄には熊野は母であると論じて居る。これは謡曲作者の誤であらう。更に本文に關係のない穿鑿であるが、平家物語は、平宗盛が遠江守であつた時に熊野の姫侍従を寵したとあるのも、誤であるらしいのである。それは、宗盛が遠江の國守に任ぜられたのは十三歳の時であり、在任わづか二三ヶ月に過ぎないからである。猶此の曲のシテ熊野のことは、侍従といふ名を以て、大日本列女傳にのせられて居るが、それは熊野(池田宿の長)の召使となつてゐる。列女傳の記事は、熊野を驛長とし、其の家の遊女と見たのである。○老母のいたはり いたはりは病氣をいふ。○此春ばかりの花見の友 この春だけの花見の友の意。花見が過ぎ春暮るれば、暇をあたへて歸らせるが、花見の時だけは是非に熊野と共に賞玩し度い意である。○如何に誰かある おい、誰か居るか。召使を喚ぶ詞である。○御前に候 御前に居りますといふ意。喚ばれた従者が、主人の前に出で、平伏しつゝ主人の命令を待つ時の言葉である。○熊野來りてあらば云々 熊野が來て居るならば、こちらへ來いと言へ。○ツレ次第 ツレが謡ふ次第の意。次第の意義は、隅田川に註した。○夢の間おしき春なれや咲く頃花をたづねん「夢の間惜しき春」とは、花咲く春は、夢の間もいたづらに過ぎまじき好時節である。所謂一刻價千金の好時節であるとの意。やは詠歌の助詞。「咲く頃花をたづねん」とは、花は開いたかと思ふと瞬く間に散り過ぎてしまふから、充分に心して、咲き匂ふ頃に花をたづね見ようとの意である。この次第の文句は、ツレ朝顔の上京する時の感懷を先づ次第の文句として、冒頭に序したのであるから、表面上は、「都は花の名所であるから、その花を、時機を失する事なく、盛りの春の好時節に訪ねよう」といふ意味を

持つと同時に、裏面には、老母の命の危いのを、春の時節の徒に過ぐすべきものでないのに比較して、熊野が時機を失せず老母の許を訪ねるやうに、都なる熊野の許へ急がうとの意をふくめて居るのである。「花を尋ねん」の花は、都の熊野をなぞらへたのである。○サシ 少し節をつけて朗讀する様にうたふ部分である。淀みなくすら〜とうたつてゆく。「サシ瀬の如し」といふ謡曲方面の謠もある位である。○長者の御内に仕へ申す 宿の長の御家に奉公して居るの意。長者は驛長をさしたのである。此の足利時代の宿驛の長は、可なり權勢と富を持つて、豪華な生活を送つて居たものである。幸若舞曲の烏帽子折の中に、美濃青墓の宿の長者の所へ、牛若丸が宿つたことが記してあるが、其の時牛若丸が長者から笛を所望された時に、金賣吉次が「やあ何と申すぞ、上様よりの御所望は、汝がためには生涯の思ひ出にてはあらすや」といひ、又笛を吹いて、長者から盃を貰ふ條には、「京藤太(牛若のこと)が笛を吹かずば、上様の御盃をば、何として賜はらうぞ、それ一つ賜はつて、現世の名聞後生の訴にせよ。あら羨しの京藤太」と、盃をうらやんでゐる文句がある。以て其の權勢のほども察せられるのである。○朝顔と申す女にて候 こゝまではツレの名告である。普通ならば名告は多く詞であるが、こゝはサシである。これは、女性の名告であるからやさしく節づけて、サシで謡はせたのである。○さても 語を改めて他事をいふ時の發語。○御入り候が 御いでになつて居られるがの意。入るは、元來は動作を示す語であるが、こゝでは存在を示す語に用ひられてゐる。わたるといふのもこれに同じい。渡るの例は景清に註した。○この程「御上せ候」にかゝる副詞である。○御上せ候へども 御といふ敬語を用ひたのは、主人である長者に對して敬意を示したのである。長者が度々人を都に遣はしたがの意。○御下り 熊野に對する敬語である。下るは都より地方にゆくこと。○此の程の旅の衣の日もそひて 出發して以來、旅の日數も重つての意。旅の衣の衣はさしたる意味はない。旅行のことを旅衣といつたのである。衣の縁語で紐を出し、それを日もにかけてある。謡曲道行の常套文句である。○幾夕暮の宿ならん 夕暮の宿りを幾つ重ねたことであらうの意。幾に行く、をかけてある。○夢も數そふ假枕明

かしくらして 宿りを重ねるにつれて、見る夢の数も重り添ひ、假枕の旅路の日々を明かし暮しての意。假枕とは旅寢をさしていふ。○程もなく 出發してから間もなくの意。○都に早く着きにけり 早くも都に到着した。○急ぎ候程に 急ぎ候間といふに同じく、急いだためにの意。○これなる御内 こゝの御家の意。○御入り候所にてありげに候 御出でなされる所でありさうである。○案内を申 訪なふことである。○如何に案内申し候 もうし御免下さい。御たのみ申しますの意。○それ〱御申し候へ 朝顔が取次の者に言ふ詞である。「左様御取次が願ひ度い」こゝいふ意。

【評釋】 以上を以て本曲の序の段とする。高砂型の能であれば、ワキの次第、名告、道行、着ゼリフ（何處々々へ到着したといふ詞）と進むのであるが、此の曲は、先づシテツレを序の段に出したから、ワキは名乗だけにとどめツレに次第、道行、着ゼリフを言はせたのである。

先づワキをして、熊野といふシテの身分素性を語らせ、故郷の老母の病氣を知らせ、孝心深い熊野が度々暇を乞ふことを語らせる。一曲の誘導契機はこゝにはつきりとあらはれる。そして、「此春ばかりの花見の友も思ひ留め置きて候」と、暇を許さぬ理由をのべる。この宗盛の人物を冷酷無情であると解する従來の解釋は誤つて居ると思ふ。彼は熊野を愛し其の願を叶へてやり度いではあるが、せめて今一回愛する彼女を伴つて花見がして見たいのである。その上で快く暇をあたへるつもりである。「花見の友と思ひ」といふ詞の中には、花見の席には熊野は無くては叶はぬ女であることをほのめかして居るのである。熊野は單に親孝行な美人といふだけの女ではない。所謂才氣煥發、誠に恰愴な婦人である。歌に於てすぐれた才能を持つて居るばかりでなく、舞も美しく舞へる女である。舞の半ばにも、春雨に散る落花の風情を見のがさぬだけの優雅さをそなへた女性である。かく考へる

と、宗盛が熊野をとどめたのは、花見の友としての熊野の優雅さと縦横に煥發する彼女の才氣に、も一度陶酔して見度かつたのである。宗盛はその陶酔的な詩美を愛する男である。決して冷酷でも情を知らぬのでもない。むしろ美を愛する情のために、人情の方を見る目を一寸蔽はれたといふ所である。それであればこそ、「如何にせん都の花も惜しけれど、なれし東の花やちるらん」の歌に感じて、早速に暇をあたへたのである。「熊野來りてあらばこなたへと申し候へ」は、やがて暇をあたへる筈の愛人との名残を惜しんで、一刻も共に居たいといふ宗盛の心を生かした句である。

ツレの次第は又他方面から此の曲のモチーフを示したものである。一刻千金の春は惜しみても猶あまりあることをいひ、咲く濺を失せず花をたづねんといふ詞は、表面には花の都に上る心の勇みを示すと共に、裏面には老母の命ある中に、熊野の歸らざるべからざる心持を生かして居る。此の熊野の一曲は、陽氣な花見、華麗な都の春を叙すると共に、母を案じて心を痛める熊野の涙を叙したものであるが、その二面が、この次第の中に生かされて居るのである。ツレの詞の「度々人を御上せ候へども、更に御下りもなく候程に」といふ所は、ワキの詞を再び他面から述べ、益々熊野が歸らねばならぬ事情をはつきりとさせたものである。道行、着ゼリフは、取りたてゝいふほどの事は無い。極めて無難に出來て居ることを感ずる。

能の型

揚幕上ると、ワキは從者（太刀持）を従へて橋掛りにあらはれる。風折烏帽子を頂き、厚板の着付の上に地紋の單狩衣、大口袴といふ扮装で、笛のあしらひでしづかに舞臺に入る。立派な品位と優美な感が先づ舞臺に満ちる。

從者は無地の鬘斗目の上に、小紋の素袍、右手に太刀をさし上げて、仕手柱の所で平伏する。ワキは真中に立つて、名告笛の止むと共に、「是は平の宗盛なり云々」の名告りをし、「留め置きて候」と言ひ切つて、靜にワキ座に志し、歩みながら「如何に誰かある」とトモを喚び出し、脇座の床几に悠然とかゝる。トモは呼ばれて直に真中まで進み、平伏して「御前に候」と答へ、「熊野來りてあらば此方へと申し候へ」を聞き、「畏つて候」と答へて、靜に地席の前に下に居る。

かくて、囃子方が次第のはやしを打ち出すと、その囃子につれてツレ朝顔が幕からあらはれる。連面をかけ、摺箔の着附の上に唐織を着流し、懷中に文を入れた姿である。次第の囃子で舞臺に入り、仕手柱先で、大小鼓の方に向ひ、「夢の間おしき春なれや」の次第を謠ふ。地取(地謠)が低音で、次第の文句を、繰返しなく謠ふのをいふ)の間に正面に向直り、「是は遠江の國云々」と名告をサシで謠ふ。やさしくさらりと、そしてかるく可愛らしいといふ氣持である。「さても熊野久しく都に御入候が」と詞になつて、少し右受け、「朝顔が御むかへにのほり候」で正面に向き直つて、詰め足をする。道行になり、「都に早く着きにけり」の返しの所で大小前に向つて詰足し、「急ぎ候程」の詞で正面に向き直り、「是なる御内が熊野の御入り候處にてありげに候」で右受けて、斜脇正面に熊野の宅を見つけた心を示し、「案内を申さばやと思ひ候」といひ切つて、橋掛り一の松まで歩み返り、掲幕に向つて「いかに案内申し候」と言ひ入れ、言ひ終つて後見座に行き後向きくつろぐのである。

シテ女サシ「草木は雨露の恵、養ひ得ては花の父母たり。況んや人間に於てをや、あら御心もとなや何とか御入り候らん。ツレ朝顔の宿より朝顔が参りて候。ツレ朝顔に朝顔と申すかあら珍らしや。さて御痛はりは何と御入りあるぞ。ツレ朝顔以ての外に御入り候。これに御文の候、御覽候へ。シテ「あら嬉しや、まづまづ御文を見うするに候。あら笑止や。この御文のやうも頼すくな見えて候。ツレ朝顔「さやうに御入り候。シテ「この上は朝顔を連れて参り、又この文をも御目にかけて、御暇を申さうするに候。此方へ來り候へ。

シテ誰か渡り候。ワキツレ朝顔に「誰にてわたり候ぞ。や、熊野の御参りに候。シテ「わらはが参りたる由御申し候へ。ワキツレ朝顔「心得申し候。如何に申し上げ候。熊野の御参りに候。ワキ「此方へ來れと申し候へ。ワキツレ朝顔「此方へ御参り候へ。シテ「如何に申し上げ候。老母の痛はり以ての外に候とて、この度は朝顔に文を上げ候。便なう候へどもそと見参に入れ候べし。ワキ「何と故郷よりの文と候や。見るまでもなし、それにて高らかに讀み候へ。

シテ「甘泉殿の春の夜の夢、心を碎く端となり、驪山宮の秋の夜の月、終なきにしもあらず、末世一代教主の如來も、生死の掟をば遁れ給はず。過ぎにし二月の頃申し、如く、何とやらんこの春は、年古りまさる朽木櫻、今年ばかりの花をだに、待もやせじと心弱き、老の鶯逢ふ事も、涙に咽ふばかりなり。たゞ然るべくはよき様に申し、暫しの御暇を賜はりて、今一度まみえおはしませ。さなきだに親子は一世の中なるに、同じ世にだに添ひ給はずは、孝行にもはづれ給ふべし。たゞ返すがへすも命の内今一度、見参らせたくこそ候へとえ。老ぬれば、さらぬ別のありといへば、いよいよ見まくほしき君かなと、古言までも思ひ出の、涙ながら書き留む。上敷地「そもこの歌と申すは、そもこの歌と申すは、在原の業平の、その身は朝に際なきを、長岡に住

み給ふ老母ちやうぼの詠める歌なり。さてこそ業平も、さらぬ別のなくもがな、千世ちよもと祈いのる子の爲ためと、詠よみし事こそ哀あはれなれ、詠よみし事こそ哀あはれなれ。

【語釋】 ○草木は雨露の惠、養ひ得ては花の父母たり 草木は雨露の惠によつて生長してゆく。かく雨露は草木を養ふから、その草木の花からいへば、雨露は自分を育ててくれた父母に當るものであるとの意である。これは和漢朗詠集、春に、仙家春雨といふ題で、紀長谷雄のよんだ「養得ヒテハ自爲ハラリ花父母ハナノチチ、洗ソ、ギ來ツテハ寧辨ニシヤナ藥君臣ヤクシノミ」といふ詩句があるのを、下にもつて作つた句である。詩句の意は、「春雨は草木を養ふから自然に花の父母である、その春雨の降りそぐ時に當つては、平等一様にふりそぐので、その藥草が君藥であらうと臣藥であらうと、少しも厚薄の沙汰はしない」といふのである。(支那で藥に三等の別がある。病を治する主たる藥を、君、臣、といひ、佐使といふのはそれに副へ用ふる藥である。君は上藥、臣は中藥、佐使は下藥である。) ○況んや人間に於ておや 非情の草木ですら、雨露のめぐみを受けては美しい花を開く。況んや人間に於て、父母の惠を受けて生長しながら、老母の痛はりを看護せぬといふのは、草木にも劣る仕わざであると、熊野自ら自分の境過をなげきかこつのである。 ○あら御心もとなや 御の字は母に對しての故の敬語である。あゝ誠に心配な事であるよとの意。 ○何とか御入り候らん 如何にしていらせられることであらうか。 ○御痛はりは何と御入りあるぞ 母上の御病氣は、どんな有様でいらせられるか。 ○以ての外に御入り候 甚だ御重態じやうたいいらせられます。「以ての外」は意外に、非常に、などの意。 ○見うずるにて候 見ようと思ひます。「見うずるにて候」と音便上から變じたもの。 ○笑止や 笑止は元來は氣の毒な状態を言ふ語であるが、それが轉じて、自分の氣の毒な状態、即ち困つた時、困却した時にもいふ様になつたのである。「あゝ困つたことだ、あゝ情ないことだ」といふ意である。 ○此御文のやうも頼たのずくなう見えて候 此の御手紙の様子を見ても誠に頼

少く見えるといふ意。 ○誰か渡り候 誰か居ますか。取次の者を呼ぶ詞。「誰かある」といふのから見れば、さすがに女らしく丁寧な語である。 ○便びんなう候へども 便びんなし、便びんなし、共に不都合であるといふ意であるが、更に轉じて、所謂しやうつきの悪いことにも用ひるやうになつた。こゝでは、「かやうな文を御目にかけることは、つきのわるいことであるが」「かやうな文は、御目にかけるべきではないが」の意に用ひられてゐる。 ○そと見参けんさんに入れ候べし そつと御目にかけますの意。見参は、見るといふことの敬語に用ひたのである。 ○文とさふらふや 文法上、直に候といふ語につゞかぬ語を、つゞけていふ時に、濁音にするのである。「花にてさふらふ」「花さふらふ」の如きである。 ○甘泉殿の春の夜の夢、心をくたく端となり 漢の武帝が、寵姫李夫人と甘泉殿に於ける歡樂も長くはつゞかず、一場の夢となつて、李夫人の死後はそれが武帝傷心の種となりの意。甘泉殿は支那陝西省西安府涇陽縣にある宮殿で、漢の武帝が修築して、寵姫李夫人を住まはせた宮殿である。李夫人のことは、漢書九十七の外戚傳に詳しく書いてある。「春の夜の夢」は短く果敢なく、しかも美しいものにしたまへたので、次の「秋の夜の月」に對した句である。武帝と李夫人との歡樂を、春夜の夢に比したのである。「心をくたくしは心を惱ますこと、心を痛めること、物思ひ、傷心の意である。李夫人は若くして死んだのである。 ○驪山宮の秋の夜の月、終なきにしもあらず 驪山宮に於ける唐の玄宗皇帝と楊貴妃との歡樂も長くつゞくことなく、遂には馬嵬坡下の露と消えてしまつたといふ意である。「秋の夜の月」は「春の夜の夢」と對句をなすもので、玄宗楊貴妃の歡樂を秋月に比したのであるが、それも満つればかける世の習で、遂には光を失ひ闇にたどる悲しみを生じたといふのである。驪山宮は、支那京兆府臨潼縣驪山の麓にある宮殿である。天寶六年玄宗これを華清宮と名を改めた。長恨賦傳に「昔天寶十載、侍シテ聲遊ニシテ驪山宮ニ。秋七月七日、牽牛織女相見之夕、時夜殆半、獨侍リ上ニ。上憑リテ肩而立、因リテ仰テ天ヲ、感シ牛女事ニ密相ニ誓心ニ、願シ世爲ニ夫婦ト、言畢リテ執リテ手各々、嗚咽ス」とある。秋の語を驪山宮に配したのはこれによるのである。この「甘泉殿云々」の句は、其の原據は平家物語卷十、維盛入水の條に「彼の驪山宮の秋の夕の契も、終には心をくた



く備となり、甘泉殿の生前の恩も、終なきにしもあらず」とあるのに従つて作つたものと見るべきであらう。○末世一代教主の如來 末法の世の中の衆生を救はんが爲に、其の一代を教化のためにつくされたる釋尊の意である。末世は末法の世をいふ。一代教主とは、釋迦が一生かゝりて説いた佛教であるから、釋迦をかく言つたのである。如來とは佛のことをいふ。○生死の掬をのがれ給はず 生者必滅の法則をのがれることが出来ずして娑羅林で入滅せられたの意。涅槃經、壽命品に、「一切諸世間、生者皆歸死」さある。○過ぎにし如月の頃申し、如く 前二月の頃に手紙で言ひ送つた如くの意。○何とやらん どうしたわけかは知らぬがの意。何故となく。○年古りまさる朽木櫻 朽木櫻は、母自ら自分の老の身をたとへていふのである。我身がめつきりと老い衰へたことをいふ。○今年ばかりの花をだに待ちもやせじ 今年の春だけの花もおぼつかなく、それまでに死んでしまふであらうとの意。「待ちもやせじ」のやは味歎の助辭と見る。「えう待つまい」の意。○心弱き老の鶯 老鶯は元來は晩春初夏の鶯をいふ。こは母自ら我身を老鶯に比したのである。氣弱くなつた自分の意。○逢ふ事も涙にむせぶばかりなり 自らを老鶯に比して、その自分が今年ばかりの花に逢ふ事もなく、又熊野に逢ふことも出来ずして、涙にむせんでゐるばかりであるとの意。「逢ふ」は表面上では花に逢ふ意であるが、裏面には熊野に逢ふことを含んで居るのである。「なみだ」は「逢ふ事も無み」と「涙」と掛詞をなしてゐる。「おいのうぐひすあふことも」と頭韻で連ねたのである。○然るべくはよきやうに申し 出来るならば、うまく申し上げての意。○まみえおはしませ 「まみえ」は母に対する敬語であり、「おはしませ」は熊野に對する敬語である。昔は身分のよき人は自分のことにも敬語を用ひてゐる。その例は頗る多い。意味は、「今一度面會しに歸つて來なさい」の意。○さなきだに親子は一世の中 病氣でなくてさへも、親子の契はこの世限りのものであるのにの意。親子は一世、夫婦二世、主従は三世などいふ諺もある。○同じ世にだに添ひ給はずは 同じく此の世にあ 間なりとも、母に附き添ひ居給はずはの意。○かへすくも くれんくもの意。○命の内に 母の命がある中に、自分がこの世に存生中に。

○見參らせ度くこそ候へとよ 候へはこそ其の結辭。とよは味歎の詞。○老いぬればさらぬ別のありといへばいよ／＼見まくほしき君かな 老年になると、死別といふ悲しいことがあるといふことだから、益々君に御逢ひ申し度い心持が募つて來るといふ意である。「さらぬ別」は離らぬ別で、避け得られぬ別離即ち死別をいふ。「見まくほし」は見度いといふ意である。○古言 古歌をさしていつたのである。故事と書けば、業平の母がこの歌をよんだその故事をいふのである。○そもこの歌と申すは在原の業平の云々 これは伊勢物語の故事を下にもつたものである。同書八十四段に、昔男ありけり。身はいやしなから母なむみこなりける。その母長岡といふ所に住み給ひけり。子は京にみやづかへしければ、まうづとしけれど、しば／＼もえまうです。ひとり子にさへありければ、いとかなしうし給ひけり。さるほどに、しはすばかりに、とみの事とて御文あり。おどろきて見れば、こと／＼はなくて

老ぬればさらぬ別のありといへばいよ／＼見まくほしき君かな(古今集、さらぬ別も)  
かの子いたう打ち泣きてよめる

よの中にさらぬ別のなくもがな千代もといひのる人の子のため(古今集、千代もとなげく)  
さいふのがある。○その身は朝に際なきを 業平は朝廷の務のいそがしいために、母を訪ぬるひまがないのでの意。「なきを」のをは接續助辭と見度い。○長岡 山城國乙訓郡にある。桓武帝が延暦三年に遷都せられた所である。後今の京都に都をうつされたのである。○老母 業平の母は、桓武帝の皇女伊登内親王であつた。○さてこそ それでの意。○さらぬ別のなくもがな云々 業平の歌「世の中に、死別など、いふこは無くあつてほしい、親の命を千代もましますと祈る子のために」の意である。○よみしことこそ哀なれ 熊野の感懷である。母を思ふ心に於て、業平の歌に相通する所がある。

【評釋】 以上を以て此の曲の破の第一段と見る。即ちこゝでシテが出現して、曲は中心への一步をふみ出す所であ

る。先づシテの感懐と朝顔との問答が序、シテとワキ宗盛の問答からはじまつて甘泉殿云々の文の段が破、地の上が急といふ順序に一曲のテンポが變化してゆくを見る。この進み方なども、高砂型の、シテの一聲、サシ、下歌、上歌のそれと比べると非常に變つた型であるが、かうした變化こそ曲の特色を示して面白いのである。千篇一律の如く見える謠曲も、その作曲の構造からしらべると、誠に千變萬化で、それ／＼の曲の個性をはつきりと示して居るものである。

「草木は雨露のめぐみ……」は熊野の獨語である。故郷の老母を思ふ情は、無心に伸びゆく草木を見るにつけ、爛漫と聞く花を見るにつけ、事毎に傷心の種ならざるものはない。美しき人の麗しき愁ひは、この簡単なサシの中に充分にしつとりとめやかにふくまれて、まさに雨に惱める海棠の趣である。「あら御心もとなや」は思はずももれ出た歎息である。朝顔ミの問答に、あらと詠歎詞をつけた所が三つある。先づ朝顔を見て、「あら珍らしや」と放つ聲は、夢寐にも忘れぬ故郷の使を見て發せられたもので、軽い驚と嬉しさをふくみ、次の「あらうれしや」は、「以ての外に御入り候」とは聞きながらも、母の文を見て、思はず母にめぐり逢つたやうな懐しさを感じた詠歎である。さて文を見て、その頼少い有様を感じては「あら笑止や」と、再び憂愁困惑の中に沈む。同じ「あら」にこの三種の情調を聞き得てこそ妙味は湧き出るのである。ツレが「左様に御入り候」と答へる間に、熊野の決心は定る。そして朝顔を伴つて宗盛の前に出るのである。ワキに向つて「如何に申し上げ候」といふ所からは、閑かに確かりと語られる部分であるが、その中に、雅びやかな麗人の品位と、固い心中の快心のほどが聞かれる。そして老母の様子をシテ自らに語らせないで、そこに老母の文を挿はさんだのは、誠に老巧な作者の用意である。それは文の内容と其の持

つ情調の味はひは、到底語りでは出し得ないしみじみとした哀感を催さしめるものである事を考へれば明かになる。シテの文を差し出すのを見て、「見るまでもなし、それにて高らかに讀み候へ」とワキは極めて素氣ない態度を示す。これもワキを冷酷無情と見るのはまだ當を得ない解釋であらう。宗盛の心は老母の病氣を憐れまぬのではない、しかし熊野を愛する彼の心は更に強い。そこから此の語が生れる。愛人の胸中に同情する心よりも、熊野の美に陶醉し度い心なのである。(下懸りでは、「さらば諸共によみ候べし」となつて、次の文はワキとシテの兩人でよむ事となつて居るが、これはやはりシテ一人で讀む方が興味が深い様である)。

文の段、「甘泉殿の春の夜の夢、心をくたく端となり、驪山宮の秋の夜の月、終なきにしもあらず」先づ二つの故事をあげて居る。拾葉抄にはこれを解して、熊野が今は宗盛の愛寵を一身に集めて居るが、やがては李夫人や楊貴妃の如き悲しい運命がめぐり来るであらう。それで今の中に暇を乞うて故郷に歸れといふ意を暗にほめかけたものとして居る。なるほどさうも考へられるが、私はこれをやはり盛者必衰の心持を示したものと考へ度い。それはこの句が、平家物語の中に於て用ひられて居る心持を考へ、謠曲がその意味でこゝに引用してゐることを思ふからである。平家には

「生者必滅會者定離は浮世の習にて候也。末の露本の半のためしあれば、たとひ遲速の不同有りといふとも、後れ先立つ御別れ、終になくてもや候べき。彼の驪山宮の秋の夕の契も、終には心をくたく端となり、甘泉殿の生前の思も、終なきにしもあらず。松子、松生、生涯の恨あり。等覺十地猶生死の掟に従ふ。」

とある。何れも盛なる者も衰へ、生者必滅の理をのべて居るのである。それのみでなく、今の中に早く見切りをつ

けて、宗盛の所から歸るが良いといふ心持ならば、次の「暫しの御暇をたまはりて、今一度まみえおはしませ」の文がちぐはぐになるのである。それで、この二故事は、やはり老母の我身をふりかへつて、死期の近づいたのを知つた時の歎きの詞と解し度く思ふのである。それに直ぐつゞくのが「末世一代教主の如來も生死の掟を遁れ給はず」であつて、況んや我等如き凡夫はいつ死ぬるかも計り難きことをのべ、それから我身を朽木櫻に比し又老鸞に比して、涙にひたる悲嘆を訴へる。「孝行にもはづれ給ふべし」は、後の儒教風に親が子に意見を加へるのではなくて、孝行にはづれようとする娘をかばふ母親らしい心遣ひである。そして最後に伊勢物語の歌を以て文を結んで居るが、この引歌はまことにビタリとこの母の心持を言ひ現して餘韻豊かに情味つきぬ感がある。さて翻つて此の文の段全體の効果を考へて見ると、病み衰へた母親が、しみじみとした哀調を以て、娘に話しかけるといふ感が特に深い。そしてそれを或は故事を引き、或は故歌を借り、或は母の優しい心づかひを出し、或はたよりない思ひにしほれさせなどして、美しく優しく哀感深く描出して居るのである。一讀深く讀者の心を打つ様に作られたこの文を、シテに靜かに讀ましめる時には、其の演能上の効果は、シテが直接に詞で語るより以上のものある事を、何人もはつきりとうなづかざるを得ぬであらう。

地の上歌になつてからは、文の段の情調を餘韻ゆたかにむすんで、熊野の感懐に落ちつかせる所である。地の同吟ではあるが、心持は熊野の思ひをのべてゐるのである。前の「さらぬ別のありといへば」の歌の説明からはじめ、「さらぬ別のなくもがな千世もといゆる人の子のため」といふ業平の返歌を出し、それによつて熊野の心持をはつきりと浮き上らせるのである。

## 能の型

前段の終りにツレ朝顔が揚幕に向つて、「池田の宿より朝顔が参りて候、それ〱御申し候へ」と言ひ切つて、後見座にくつろぐ。そこでシテは靜に幕を上げさせて橋掛に現はれる。面は小面、摺箔の着附に唐織の着流しであるが、面も衣裳もツレに比べて一段ミすぐれた優美高尚なもので、一目してツレとの區別が判然とあらはれる。そして靜に三の松で留り、正面を向いて「草木は雨露のめぐみ、養ひ得ては花の父母たり……」とサシを誦ふ。其の調子は極めて閑かに、多少の愁の氣分をおび、誠に才色双絶の佳人が胸にあまる憂悶を幽かな溜息と共にもらして居る趣が深い。このサシ一つでシテの技倆の程もトせられるといはれる程である。そして「あら御心もとなや何とか御入り候らん」と面くもらしつゝ詰足する所の心持など、十分に心して見聞くべき所である。この間にツレは後見座から立ち、橋掛一の松まで進み、シテに向つて「池田の宿より朝顔が参りて候」と呼ぶ。シテ「何朝顔と申すか」と靜に、詞一ばいにツレに向き「あらめづらしや、……さて御痛はりは何ミ御入りあるぞ」と問ひかける。「これに御文の候御覽候へ」とツレは懐中の文を渡す。シテはこれを左手で受け、「あらうれしや先づ〱御文を見うするに候」といひつゝ文を開き、サラリと一通り目を通し、「あら笑止や、この御文のやうも頼み少う見えて候」と心持する。ツレが「左様に御入り候」と答へると、シテは靜に正面に直し、「この上は」と決心を語り、「此の御文をも」と再び文に目をそそぎ、「こなたへ來り候へ」とツレをうながしつゝ、文を巻き持ち、ツレと入り替つて、しづやかに舞臺に入る。こゝのあたりのシテの動作又極めて閑雅優美であつて、充分に熊野の品位を示す所である。

舞臺に入り仕手柱先きで、「誰か渡り候」と宗盛の從者を呼出し、從者との問答終つて、靜に大小鼓の前に進み、

ワキに向つて、下に居る姿勢をとり、「如何に申上候……」と老母の重態、朝顔の迎へに來た由をのべ、老母の文を見て貰ひ度い趣をのべる。その詞は閑かな位の中に熊野の決心を見せてしつかりと語られる。「便なう候へども」といひつゝ立上り、ワキに向つて二歩ばかり進み、「そと見參に入れ候べし」と下に居る。ワキが「見るまでもなし、それにて高らかに讀み候へ」と言ひ切ると、シテは其の場で正面向き、靜に文開いて文面に一通り目を通してから「甘泉殿の春の夜の夢……」と朗らかに閑かな位を以て讀み上げる。こゝからが文の段であるが、全くの聞かせ所であつて、靜かにしめやかに、何となくあはれを感じしめると同時に、耳にさらりと聞えて冗長を感じしめぬ様にといはれる處である。所謂口でよむのでなくて、腹でよむべき所であつて、此の文の段だけで、シテの歸心矢の如く、老母を思ふ情の如何にも深いことを觀客に感ぜしめなければならぬのである。地の上歌になつて、「そも此歌と申すは……」と地謠が引取つて謠ひ進むと、シテは文を巻きおさめて左に置き、じつと正面向いて居るが、心は地謠の文句の氣分で緊張して、無言不動の氣力を以て舞臺を引きしめてゆく。ツレは靜に仕手柱際から立ち上つて、シテの後方に下に居る。地謠が「よみしことこそ哀なれ」と謠ひ進むと、シテは左手を以てシオリ、シオリ返すのである。

シテ「今はかやうに候へば、御暇を賜はり、東に下り候ふべし。ワキ「老母の痛はりはさる事なれどもさりながら、この春ばかりの花見の友、いかでか見捨て給ふべき、シテ「御言葉をかへせば恐れなれども、花は春あらば今に限るべからず。これはあだなる玉の緒の、ながき別となりやせん、たゞ御暇を賜はり候へ。ワキ「いや〜さやうに心弱き、身に任せてはかなふまじ。いかにも心を慰めの、花見の車同車にて、ともに心をなぐさ

まんと、上歌地「牛飼車寄せよとて、牛飼車よせよとて、これも思ひの家のうち、はや御出と勸むれど、心は先へ行きかぬる、足弱車の力なき花見なりけり。

シテ「名も清き、水のまに〜とめくれれば、地「河は音羽の山櫻、シテ「東路とても東山、せめて其方のなつかしや、サシ地「春前に雨あつて花の開くる事早し、秋後に霜なうして落葉遍し、山外に山あつて山盡きす、路中に道多うして、道極まりなし。シテ「山青く山白くして雲來去す。地「人樂しみ人愁ふ、これ皆世上の有様なり。下歌地「誰かいひし春の色、げに長閑なる東山、上歌地「四條五條の橋の上、四條五條の橋の上、老若男女貴賤都鄙、色めく花衣袖を速ねて行く末の、雲かと見えて八重一重、咲く九重の花盛、名に負ふ春のけしきかな、名に負ふ春のけしきかな。

ロンギ、地「河原おもてを過ぎ行けば、急ぐ心の程もなく、車大路や六波羅の、地藏堂よと伏し拜む。シテ「觀音も同座あり、開提救世の方便あらたに、たらちねを守り給へや。地「げにや守の末すぐに、頼む命は白玉の、愛宕の寺も打ち過ぎぬ。六道の辻とかや。シテ「げに恐ろしや此の道は、冥途に通ふなるものを、心ぼそ烏邊山、地「煙の末も薄霞む、聲も旅雁の横たはる、シテ「北斗の星の曇なき、地「御法の花も開くなる、シテ「經書堂はこれかとよ。地「そのたらちねを尋ねなる、子安の塔を過ぎ行けば、シテ「春の隙行く駒の道、地「はや程もなくこれぞこの、シテ「車宿、地「馬留、こゝより花車、おりゐの衣播磨瀧飾磨のかち路清水の、佛の御前に念誦して、母の祈誓を申さん。

【語釋】 ○東に下り候べし 東とは故郷遠江を指す。普通は足柄關より東北地方を言ふ語であるが、昔は遠江のあたりまでも言

つたのである。○老母の痛はりはさることなれども、老母の病氣について、汝が心痛し暇を乞ふことは、それはもつとも至極であるが。○如何でか見捨て給ふべき、何として私をふりすて、歸るのか、私を見捨て給ふべきではない。や、嘆願の語調。○御詞を返せば、御命令に對して異議を申し立てるのは。返せば、は文法的に正しくない、返すはとあり度い所である。○恐なれども、甚だ畏れ多いことではあるが。○これはあだなる玉の緒の、これとは病める老母をさす。「あだなる玉の緒」はかりそめの命、はかなき命といふ意。玉の緒は魂の緒の意に用ひられて命をさす。それと同時に、「玉の緒」は次の「永き」といふ詞にかゝる枕詞の役をもつとめてゐるのである。○永き別、死別をいふ。○たゞ御暇を賜はり候へ、たいはひたすらにの心持である。○左様に心よはき身に任せてはかなふまじ、心弱き身は熊野をさす。心よわきそなたの願のまゝにすることは成るまじの意である。○如何にも心を慰めの花見の車同車にて、「如何にも」は發語的な詞であつて深い意はない。さもなくともいふ位の意である。「心をなぐさめの」は熊野の心を慰めるための意。慰めは下二段に使用してゐる。同車は同乗である。○共に心を慰まん、慰まんは四段活に使用してゐる。○牛飼、牛飼童ともいふ。牛車の牛を使役する者。狩衣に鞭をさり、頭は垂髪で童形である。○車寄せよ、牛飼に命ずる詞。牛車を式臺にさしませよといふのである。○是も思ひの家の内、思ひの家の内に火を掛けていつたのである。此の世を佛説（法華經にある）では火宅といふ。此世に於て様々の迷執煩惱に苦しむこと、丁度火宅にあつて火煙にむせびくるしむのたごへたものである。この宗盛の邸も、熊野にまつては今は火宅と同然である。その家を早く出よとすゝめるので意。法華經譬喻品に「三界無安、猶如火宅」とある。○心は先に行きかぬ、花見などに行かうといふ氣が起らぬが、強ひられてゆくのであるからかくいつたのである。○足弱車の方なき花見なりけり、足弱車は、車の輪のひよわいのをいふ。河海抄に見える。心の進まぬのを、車の輪の弱きを以て形容したものであつて、「足弱車」は「力なき花見」にかゝる序詞と見度い。○名も清き水のまに／＼とめくれば、古今集、春、清原深養父の歌に「花散れる水のまに／＼とめ

くれば、山には春もなくなりけり」といふ歌がある。それを下に持つて書いた句である。清き水といふ中に、これから花見に行かうとする清き水をかくしてある。その清き水をかくしたために、名もと書き出したのである。意味は「清き水のまに／＼とめくれば」の意。清き水は、表面上では鴨川をさしたものと見るべきである。とめ来るのとめは「よく心をそゞ目をとどむる」意と解し度い。尋求める意ではない。○河は音羽の山嶽、文のつゞきは水より河を、河より音を、音より音羽をいふ風に、縁語で起してゆく文脈である。音羽は清水寺のある土地である。全體の意は、鴨川にはさら／＼水音をたて、春水が流れ過ぎ、東方を見やれば、音羽山のあたり、一面に櫻の匂ふ様が見えるといふのであらう。大和田氏が「水に花のうつる心にて、音羽の山を山櫻につゞけたり」と解して居られるのは、從ひ難い。○東路さても東山、せめてそなたのなつかしや、東路は京都より東北陸奥までの道筋をいふ。東路といふも東方である。我が向ふ處は東山であるから、我が母のまします東路はこの東山の方向だ。さう考へると、胸せまるばかりに東の空がなつかしいとの意である。せめては、切に、甚しく等の意。○春前に雨あつて云々、百聯抄解の詩に、「春前有、雨花開早、秋後无、霜落葉遲」とある句をとつたもの。○山外に山あつて云々、同じく百聯抄解詩に「山外有、山不盡、路中多、路路无、窮」とある句をとる。○山青く山白く云々、百聯抄解詩に「山青山白雲來去、人樂人愁酒有無」とある句をとつて、下半を「これ皆世上の有様なり」と變じたのである。詩意は、山に雲がかゝれば白く見え、雲去れば山青し、人に酒あれば楽しみ酒なければ人愁ふといふ意である。以上、百聯抄解の詩をこゝに挿入したのは、謡曲文の特色である所の文飾である。名文句を多く取り入れて、吟じあかす讀ひあかぬ様にすると同時に、その文の持つ氣分情調を受し、それから所謂陶玄といふ詩的感興を惹起しようとするものである。従つて引用された文句全部が本筋に關係をもつものではない。この三つの引用の中でも、「春前有雨花開早」「山外有山不盡」「山青山白雲來去」等の句は、車上から見渡した東山の光景と見られるが、それ以外は、本筋には無關係である。○誰か言ひし春の色、げに長閑なる東山、和漢朗詠集、梅の都に、菅原文

時の詩、「誰言春色カフ從ユリ東到ルト露暖カニシテ 南枝花始ナナテ 開」とある。句をもつて書いたのである。「春は東方より立つといふが、梅の枝は南枝より花が開きそめる、さうするに春色東より到るといふのはおかしい」といふ詩意である。それを此の文では、春色は東より立ちそめるといつたのは誰であつたのかなるほど、東方東山一帯は春色をおびて誠に長閑な景色であるといふ風に作り直したのである。

○四條五條の橋の上 四條五條の橋上は、花見の群集が雑沓して、老若男女貴賤都鄙、いづれも色どり美しい花見衣裳を着かざつて、袖をつらね花をたづねてゆくといふ意である。

○行末の雲かこ見えて 袖を連ねてゆくと行末とを掛けた文。「行人の赴く彼方を見やると、あだかも雲のたなびく如くに見えて、八重櫻一重櫻が咲き匂ふてゐる」といふのである。

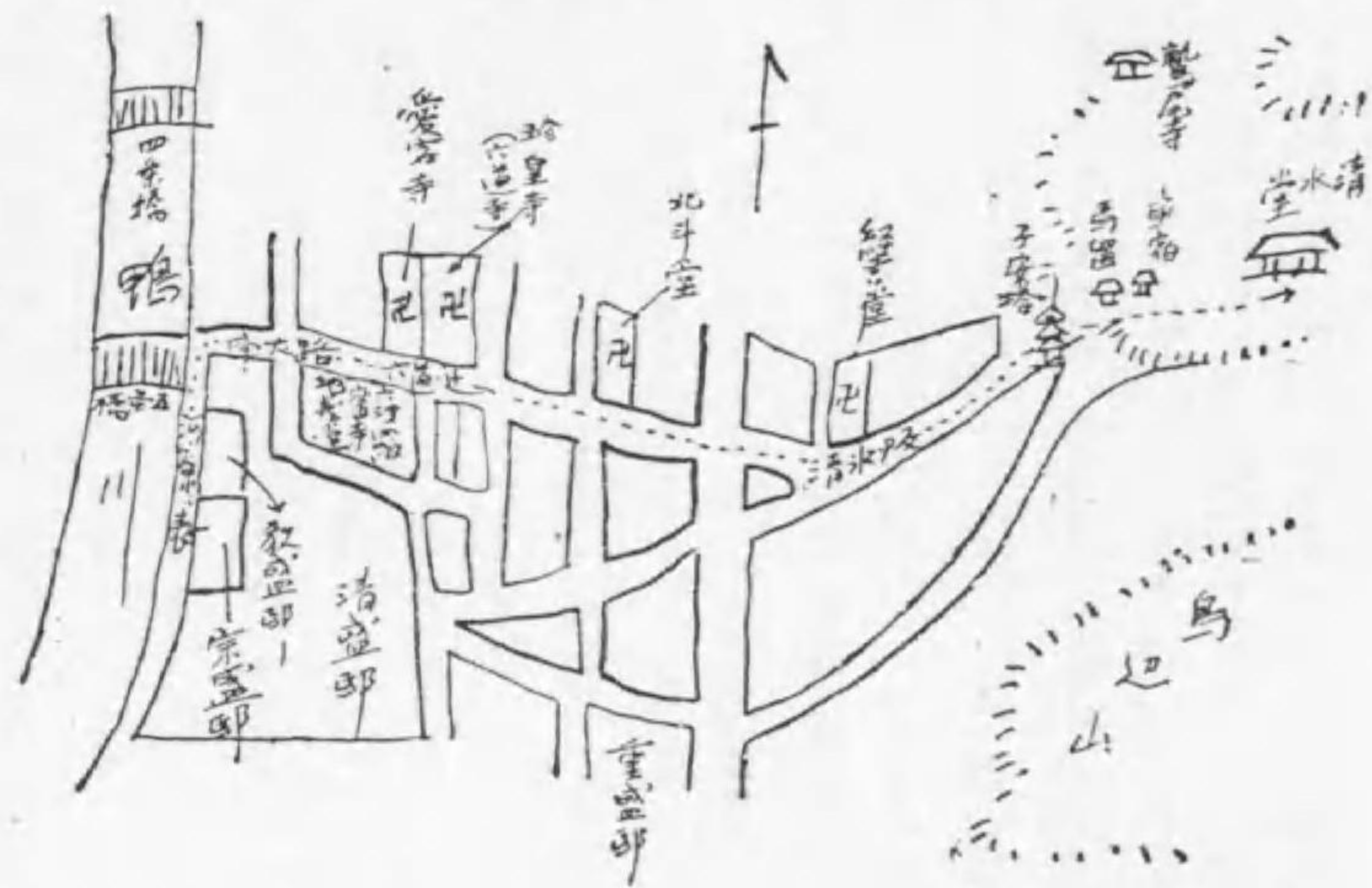
○咲く九重の花ざかり これは八重一重をうけて九重と起した文脈である。九重は天子九門といふことから禁裡をさし、更に轉じて都といふ意に使つたのである。都の花ざかりといふ意。○名に負ふ春のけしきかな 九重の都、花の都といふ名にそむかぬだけの美しい春景色よといふ意。古今集の「見渡せば柳さくらをこきまぜて都ぞ春のにしきなりける」の歌などを考へるべき所である。

○河原おもてを過ぎゆけば こ、からは、六波羅の宗盛邸から清水寺までの道行を、ロンギの形式でのべてゆく所である。ロンギは論義であつて、もとは佛家の口頭試験の名である。經の意義を論ずる時に、問の者も答へるものも、その詞にフシをつけて言つた。それから來た名である。シテ、ワキ、ツレ、地の間で、どれと〜でも構はないが、掛合にうたふ所をロンギといふ。河原表は、鴨川に面した六波羅邸の前の道をいふ。(次頁略圖参照)○急ぐ心の程もなく 心急いで車をやるので間もなくの意。

○觀音も同座あり 地藏堂に、觀音も共に祭られてゐるのをいふ。

○關提救世の方便あらたに 關提は一關提の略である。梵語 Iechanika の音譯で、意譯は斷善根、信不具足、などと譯する。元は解脱の因を缺いて、到底成佛の出來ないものをいひ、又容易に成佛することは出來ぬが、遂には佛の威力にあうて成佛するものを言ふ。轉じては、大悲の菩薩が衆生を濟度するために、故意に成佛せぬものをもいひ、觀音菩薩のことをいふこともある。

は在現。るよに圖地外内師京古中 載所書撰實放  
。ふいと橋原松も橋、ひいと通原松すはいと通條五



關曲講義

る。こゝでは觀音の意と解するが穩經であらう。大和田氏は「關提如き不信の徒にても觀音の慈悲にて救ひ給ふを救世といふ」と解してゐられる。私は觀音が此の世の衆生をあらたかた方便もて救はれるがその有難い方便力での意と解し度い。「方便」とは佛が衆生を救ふために臨機に用ひられる手段方法をいふ。「あらた」はあらたかといふと同じである。○たらちねを守り給へや 母の命に御守護を賜り度いの意。たらちねは元來は母の枕詞であるが、こゝでは母の意に轉用してゐる。○げにや守りの末すぐに、頼む命は白玉の、愛宕の寺も打ちすぎぬ こゝは甚だ文脈の混亂した所である。前文からのつゞきは「愛宕の寺も打ちすぎぬ」へつゞくのである。それまでは、序詞の如きものと考へるべきであらう。その序詞の部分中、「守りの末すぐに頼む命」とは母の命をさす。即ち「觀音菩薩が行末までひとすぢに守護して下さるやうにと願ふ母の命」の意である。その母の命は、いつ果つるかも知れぬはかない玉の緒であるといふ意味をふくめて、「命は白玉の緒」とつゞけたのである。「白」に「知られぬ」といふ語をかけたもの。そして「玉の緒」の緒を愛宕寺のおたぎにかけて連れたものである。「げ

にや」といふ語は「知られず」といふ語にかゝる語だから、「白玉の」しらにかゝると見るべきであらう。○六道の辻 五條通愛宕の寺及六道寺の南側のあたりをいふ。○げにおそろしや此道は冥途に通ふなるものを 六道の辻は、傳説に昔小野篁がこゝから冥途に通つたといはれる處である。其の話は色葉字類抄に出で、又和漢朗詠集古註にのせられて居り、拾葉抄にもそれを引用して居る。冥途に通ふ道と聞いては、母の命を案ずる熊野には恐ろしく感ぜられるのである。「冥途に通ふなるものを」とは「冥途に通ふ道なるよ」の意。○心細鳥邊山 これは新編古今集十六僧正宋縁の歌「とりべ野の煙の末もあはれなりいつかはと思ふ心細きに」といふ歌を下に持つてゐる。鳥邊山は火葬場であり、無常所であるから、心細まつたのである。○煙の末も薄がすむ 鳥邊山の煙が立ちのぼつては大空にうすく消え渡るのを見れば、心ぼそい感がするとの意。○聲も旅雁の横たはる北斗の星の云々 全唐詩にある劉元叔の作、「妾薄命」といふ詩に、北斗星前横三旅雁、南樓月下擣三寒衣」といふ句がある。(この詩は和漢朗詠集にも引かれてゐる)。それを下に持つて、寺名北斗堂をよみこんだ文である。「聲も」は音聲に律呂の二つがあることだから、「聲も呂」といひ、それを旅雁にかけ、詩句を引いて「横はる」といひ「北斗の星」とつゞけたのである。呂は沈んだ音であるから、哀をおびた旅雁の聲を形容し、春の雁は歸雁といつて北方に飛びゆくものだから、北斗の文字をうけ、次に北斗の星の曇りなきことを、御法の光にたとへて言つたのである。○御法の花も開くなる 經書堂はこれかとよ 御法の花の中に法華をかくし、次の經書堂の經へつゞいて、法華經といふ文字を伏せてある。意味は、「東山の櫻花のみならず、佛法の花も開くよ、その經書堂はこれであるのか」と、車上からながめるのである。經書堂は、來迎院と號し、聖德太子自ら法華經を書寫せられた處といふ傳説がある。○そのたらちねを尋ねなる子安の塔を過ぎゆけば 「その」は軽くつけた文字で、別に何をさしてゐるでもない。發語である。「たらちねを尋ねなる」は「子」にかゝる序詞であつて、意味は、「子安の塔を過ぎゆけば」だけが前後の文脈に連る。○春の隙ゆく駒の道 次の「早ほどもなく」を呼び出す序詞。人生の早く過ぎゆくことを、「白駒の隙を通ぐる如し」とい

ふ。白駒は日影であるとも、又白馬であるともいふが、何れにもせよ速く走るものの通り過ぎるのが僅かな隙などの隙間からちらりと見えてすぐなくなること譬へたものである。出典は、莊子知北遊篇に、「人生天地間、若白駒過隙、倏然而已」である。○車宿馬留 共に清水寺西門の北側にある。車を待たせ馬をつなぎおく處である。○こゝより花車おりの衣はりまがた、しかまのかちぢ云々 こゝより花見車を下り、徒歩にて清水の御堂に参り、佛の御前に念誦して母の病氣平癒を祈らんといふ意である。「花車」は花見車をいふ。車より下り居ることを織りに掛け、織りから衣を、衣から張るを、張るから播磨瀧を、はりまがたから播州の地名播磨を、飾磨からその名産の榻織を、榻からかち路を、かち路から來を、來から清水を、何れも順次によび出して、珠數玉の如くに連ねた文である。拾葉抄には、「いませめて懸しき時ははりまなるしかまにそむるかちよりぞ來る」の歌を引用してゐる。尙、清水寺の鐘樓の側に鹿間塚といつて、鹿をうづめた塚があるので、それに「しかまのかちぢ」の文は言ひかけてあるといふ説もある。

【評釋】 以上が破の第二段にあたる部分である。破第一段の終が、シテの文の段の後を受けて、地謠が熊野の感懐を述べる所で終へるので、その後を直にシテワキの問答で起してゆく。この問答はワキが詞でゆくのに對して、シテは節付けた謠方で問答するのである。そこに、シテの心持が漸次に母を思つて感傷的に進んでゆく消息がうかゞはれる。即ち文の段以前の熊野と、此の段の熊野とは、其心持に於てよほど異つて居るものであることを先づ心して、此の段の章句を見るべきである。

「今はかやうに候へば、御暇を賜はり東に下り候べし」といふ熊野の語は、今度こそは宗盛の許可が得られるであらうといふ豫期の下に發せられた語である。しかし宗盛は尙熊野への執着が強い「老母のいたはりはさる事なれど

も」と熊野の心中に同情の意を示しはするもの、「さりながら」と一轉し、「此春ばかりの花見の友いかにか見捨て給ふべき」と婉曲な拒絶をする。「この自分の折角の楽しみを打壊し自分を見すてて歸るといふことは、あまりに自分に對して情愛が薄いではないか」と、敷衍的な口調である。シテの「御詞を返せば恐れなれども」は、單に主人の命に反するのは恐縮であるがといふ主従關係からの話以上に、こゝにも宗盛の執拗な愛を靜かに拂ひのける才女の巧な口吻を感じすべきであらう。そして、なだめさとすやうに、「花は春あらば今に限るべからず」と道理をのべ、「これはあだなる玉の緒の長きわかれとなりやせん」と老母の病の一刻も猶豫すべきでない事を強調し、「たい御暇を賜り候へ」と、只管なる願をのべてやゝ激した心持を示す。かうなつては宗盛の旗色は悪い。言葉や理屈の上では彼は到底才女熊野の敵ではない。さりとして熊野の滯洛を哀願したとて今は彼女の心を動かし得ないことは知れ切つて居る。そこで今度は主人の威光で壓服しようとする。「いや／＼左様に心弱き身にまかせては叶ふまじがそれである。しかし彼も熊野をいたはる事は忘れない。「いかにも心をなぐさめの花見の車同車にて共に心なぐさま」と愛撫の一語をなげかけ、「牛飼車寄せよ」と、連座に花見の催しを嚴命する。「これもおもひの家の内、はや御出とすゝむれば」はワキの立場。「心は先にゆきかぬる足弱車の力なき花見なりけり」は、シテの立場である。諸の方では、前を嚴命の急なる勢、トク／＼と催促する心持に勢強く諂ひ進み、「心は先に」からはジリ、ツと引きしめて、心の進まぬ氣分をはつきりと生かし出す所である。

「名も清き……」からは、車中の場面へ展開して居る。(演能の方ではこゝでシテは車の作り物の中に入つて居る)既に城門を出で、東山さして立ち出で、見れば、鴨川の水音、音羽山の遠望等、さすがにうら／＼かな春色は京洛を包んで人の心を駑蕩たる春のいぶきの中に包む。こゝからは大體に於てその美景を叙してゆく文章であつて、文章の美と相俟つて京洛の春色を色こく表現して居る所を見るべきである。「名も清き」から「河は音羽の山櫻」まで、先づ、清水へと志し進む春景色の美しさを總括的にのべ、「東路とても東山、せめてそなたのなつかしや」で、心ならずも花見に連れゆかれる熊野の切ない胸中を、全體的に打ち出して居る。この二つの氣分は、互に錯綜して以下の文中を流れてゆくのである。

「春前に雨あつて花の開くる事早し」以下、百聯抄解の詩句を重疊してゆく所は、瑰麗な詩句を吟する時の美感を以て、花の都の春色の美しさを象徴的に表現しようとしたものであつて、全體の文意の進行からはかけはなれたものである。かくかけはなれた遊離的美辭麗句は、現代人の眼から見ると非藝術的にも見えようが、それは讀む文章として致命傷であつても、かうした諠ひ物としては、却つてそれが一種美しい情調をかもし出す重要な役目を演じてゐるのである。能樂といふものが優美雅麗な幽玄といふ情調を生命として居るものであることを考へる時は、かうした修辭は當然價値を認めらるべきであらう。「人樂しみ人愁ふ、これ皆世上の有様なり」で、諠の調子はやゝ靜まり、下歌の「誰か言つし春色の色、げにのどかなる東山」で軽く靜かに諠ひおさめて、次の上歌の準備をする。そこで打切(囃子の手)があつて、「四條五條の橋の上……」とがらりと氣を換えて、うら／＼かに麗はしく歌ひ進んでゆくのであるが、この調子の變化の中に、充分に詞章の持つ情調が出かし出されて餘蘊なき感がある。「四條五條」からは、全然春陽の季節の都下の繁榮と行樂とをのべる所であつて、作者は全力をあげてその華美をのべ駑蕩たる情調をのべて居るのである。

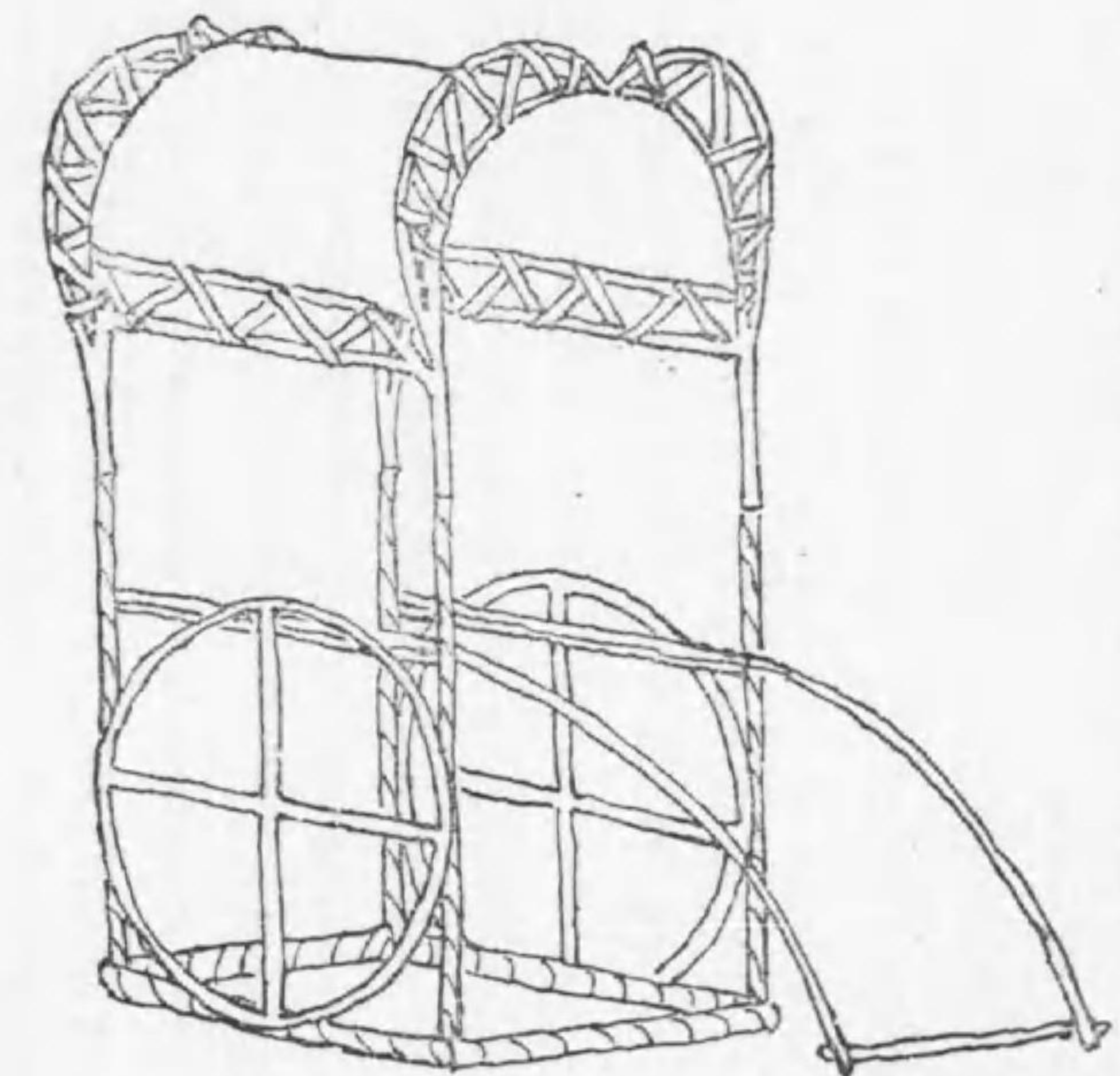


次のロンギ(地謠とシテとが掛合にうたふ部分をいふ)になると、地とシテと其の心持はすっかりかけはなれてゆく、即ち地謠の章句は大體から言へば、前の上歌を受けて、華やかに軽く、清水への途中の風光をのべてゆくのに對して、シテは、故郷の病母を思ふ情が益々深まつてゆく。地が華やかに軽々とすゝむに對して、シテは靜まつて愁をふくんでゆき、二つの氣分が錯綜しもつれあつて進んでゆく所を注意すべきである。地藏堂の觀音に對しては、方便力を以て母の命を守護せられん事を祈り、六道の辻と聞いては、冥途を思ひ、母の萬一を恐怖し、鳥邊山を眺めては不定の世の中を心細く感じ、清水に詣で、は先づ母の祈誓を申す熊野の心持が、あたりの華やかさと好箇の對照をなして、一層に「心なき花見」、「心は先きに行きかぬる花見」の情感を濃くうきあがらせて居るのである。

能の型

前段の終は「千代もと祈る子のためこ、よみし事こそあはれなれ」で、シテが母を思つて、シオリ、シオリ返す型で終つて居る。そこで、シテは靜にシオリの手を下しつゝ、「今はかやう候へば」と謠ひ、「御暇を賜はり東に下り候べし」で、ワキの方へ向直つて歎願する。ワキはシテに向ひ、「老母の痛はりはさる事なれどもさりながら、此の春ばかりの花見の友」といひ切り、「如何でか見捨て給ふべき」と、ズイミ正面に向き直る。到底許しさうにもない宗盛の心持が良く生かされた型である。シテは猶も「御詞を返せば恐れなれども」とかゝつて謠ひ、「花は春あらば今に限るべからず」と閉めて道理をのべ、「これはあだなる玉の緒の長き別れとなりやせん」と老母の命の危さをのべて左手を以てシオリ、「唯御暇を賜はり候へ」と哀願しつゝシオリ返す。母を思ふ孝女の心中、そゞろに哀を催す所である。ワキは再びシテに向ひ、「いや／＼左様に心弱き身にまかせては叶ふまじ」とかゝつて言ひ、「如何に

も心を慰めの花見の車同車にて、共に心を慰まん」ミキツバリと言ひ切る。地謠が直ぐに、「牛飼車寄せよとて」と引受けて急に強く謠ひ進む時、ワキは「急ぎ車を用意せよ」とワキヅレに命ずる。打切の所に、車頭と稱する鼓の手が



あつて、そのアシラヒを打つ間に、後見は、車の作物を持ち出して、目付柱の所に置く。花見の車が式臺に寄せられた心持である。作物は能樂特有の簡素なものであつて、牛車の形に模して作つたものである。(上圖参照)。車を出し終ると、地謠が「牛飼車よせよとて」と打返しを謠ひ、つゞいて「是も思ひの家の内、はや御出でとすゝむれど」と謠ひすゝむと、ワキは床几にかゝつたままで、扇を上げてシテを指し、乗車をすゝめる心持を示し、「心は先きに行きかぬる」と地謠の調子が今までの急調から轉じて、チリリツと引きしまり、熊野の心のすゝまぬ遠巡を示す所に到つて、シテは靜に立ち上る。ワキも同時に立ち、「足弱車の力なき花見なりけ

り」でシテは作物の車の中に入り、ワキはシテと並行に脇座近くの正先に立つ。ワキヅレ、及び朝顔も立つて、ワキヅレはワキの後方に、朝顔はシテの車の後方に立つ。美しく装ふたこの四人が、舞臺の鏡板の老松を背景として立ち並んだ姿は、誠に品位高く雅やかで、宛然極彩色の土佐繪を見る感じがある。

シテ車中であつて「名も清き水のまにまにとめくれば」と謠ふと、地が「河は音羽の山櫻」と引とる。シテは車中であつて、左受けの形をとり、「東路とても東山、せめてそなたのなつかしや」で、謠ひながらシオリ、シオリ返す。車中であつて東山を望み、東路を思ひ、老母を思つて愁にとざされる心地である。地謠が「春前に雨あつて……」と、よどみなくすらくと謠ひゆく間は、シテは靜に立つたまゝである。下歌になり、「誰か言つし春の色、げに長閑なる東山」で、シテは車中であつて、少しばかり前方に進み、遙に東山を望む心持を示し、「花衣、袖をつらねて行く末の、雲かと見えて」のあたりで、車中靜かに右向き「八重一重、さく九重の花ざかり」と進むにつれて、靜に正面に向き直り、「名に負ふ春の景色かな」の打返しの時、車中で又少し前方に出で、京洛の春色を見渡す心持を生かす。

ロンギになつてもシテの動作は殆んどない。「愛宕の寺も打すぎぬ」で靜かに右受け、「北斗の星の曇なき」で正へ直し、「經書堂はこれかとよ」で左受け、「子安の塔を過ぎゆけば」で正へ直す。「車宿り」で右受け、「馬留め」で左受け、「下りゐの衣はりまがた」で、車より下る心持で、後退して車中から出る。「しかまのかちと清水の」の所に到ると、ワキは脇座の方に向き、シテは正中へ出で、「佛の御前に念誦して母の祈誓を申さん」で、下に居、正面向き、合掌禮拜の型をする。本堂に詣で、母の病氣平癒をいのる心持である。その間に、ワキヅレはワキ座の次に下に居、

シテヅレはシテの後方大小前の所に靜に下に居る。かくて舞臺は清水寺の場面となるのである。

ワキ同「如何に誰かある。ワキヅレ」御前に候。ワキ「熊野はいづくにあるぞ。ワキヅレ」未だ御堂に御座候。ワキ「何とて遅なはりたるぞ、急いでこなへと申し候へ。ワキヅレ」畏つて候。いかに朝顔に申し候。はや花の本の御酒宴の始まりて候。急いで御参りあれとの御事にて候。その由仰せられ候へ。シテツレ「心得申し候。如何に申し候。はや花の本の御酒宴の始まりて候。急いで御参りあれとの御事にて候。シテ」何とはや御酒宴の始まりたる申すか。シテツレ「さん候」シテ「さらば参らうするにて候。

シテ同「なう、皆々近う御参り候へ。あら面白の花や候。今を盛と見えて候に、何とて御當座なども遊ばされ候はぬぞ、」げにや思ひ内にあれば、色外に顯はる。地「よしやよしなき世のならひ、歡きても又餘あり。シテサシ「花前に撥舞ふ紛々たる雪。地」柳上に鶯飛ぶ片々たる金。花は流水に随つて香の來る事疾し、鐘は寒雲を隔て、聲の至る事遅し。タセ「清水寺の鐘の聲、祇園精舎をあらはし、諸行無常の聲やらん。地主權現の花の色。姿羅双樹の理なり。生者必滅の世の習、げにためしある粧。佛も元は捨てし世の、半は雲に上見えぬ、鷲のお山の名を残す、寺は桂の橋柱、立ちいで、峯の雲、花やあらぬ初櫻の祇園林下河原。シテ「南を遙に眺むれば、地」大悲擁護の薄霞、熊野權現の移ります、御名も同じ今熊野、稻荷の山の薄紅葉の、青かりし葉の秋又花の春は清水の、たゞ頼め頼もしき春も千々の花盛。シテ「山の名の、音羽あらしの花の雪。地」深き情を人や知る。シテ同「わらは御酌に参り候べし。ワキ同「如何に熊野一さし舞ひ候へ。地」深き情を人や知る。(中の舞)

【語釋】 ○御堂 清水寺の本堂をさしていふ。 ○遅なはりたるぞ 遅なはるは、「一の動詞である。遅くなるの意。 ○花の本  
 櫻花の下の意。 ○御當座 當座とは、即席に歌をよむことをいふ。兼題に對した語。 ○クリ 音曲上の名である。次の、  
 サシ、クセ、の準備をする所の曲中で、クリ上げて歌ふ所のあるのが當であるから、此の名が起つたものである。拍子には合は  
 ない。 ○思内にあれば色外にあらはる 諺である。内心に何か深い思のある時は、自然にそれが顔色にあらはれるをいふ。拾  
 葉抄に、詩經の序や新古今の眞名序などが典據として引かれてゐるが、それは詩歌に關する論であるから、この出典とは申し難  
 い。むしろ天徳歌合の兼盛の歌、「忍ぶれど色に出にけり我戀は物や思ふと人のとふまで」などが原意に近いであらう。出典とし  
 ては、孟子に「淳子見曰、有思於内、必形於外」が正しいと思ふ。 ○よしやよしなき世ならひ、歌きても又あまりあり  
 「よしやよしなき世の習ひ」と頭韻を踏んだ書き様である。「よしや」は「えままよこかあましかたがない」とかいふ意で、歎息  
 を交へたあきらめの語である。「よしなき」は、「術なき」の意である。様々に心を碎いても、結局は宿命のまゝにしか過ぎな  
 いて、如何ともする術なき此の世のならひといふ意である。「よしなき」を、つまらないと譯するのはいけないと思ふ。「歌きて  
 も又餘りあり」は、歌いてもなげき切れないといふ意で、愁の深く永いことをいつた語である。 ○花前に蝶舞ふ云々 百勝抄  
 解の詩に「花間蝶舞紛々雪、柳上鶯飛片々金」とあるのを取つたものである。「紛々たる雪」とは蝶のひら／＼と飛び亂れるのを  
 雪と見たたものであり、「片々金」は鶯の飛びかふ様を、ひら／＼と金色のものがとぶ如くに見たたたのである。花間に蝶の  
 舞へるは、紛々たる雪に似たりといふ意である。 ○花は流水に従つて香の來ること疾し、鐘は寒雲をへだてて聲の到ること遅  
 し 寒雲は冬の雲をいふ。花香は流水に従つて來る故に早く、鐘聲は寒雲のへだてがある故に、ひゞき來ること遅しといふ意  
 である。詩句を引用したものであるらしいが、出典未詳といはれてゐる。 ○クセ 曲舞の節で歌ふ部分をいふのである。曲節上  
 の名である。クセは大抵一曲の間かせ所、語ひ所となつてゐる。觀阿彌清次が、曲舞の曲節を謡曲にとり入れて、謡曲を一層立派に

したといはれてゐることも、これ等の點からもうかゞひ得られるのである。大小鼓の拍子に合はして讀はれる部分である。○清  
 水寺の鐘の聲祇園精舍をあらはし、諸行無常の聲やらん 清水寺の鐘の聲は、印度の祇園精舍の鐘の聲を現世にあらはし、諸行  
 無常と響くやうであるとの意。この文句は源信僧都の往生要集から暗示せられて作つた平家物語の巻頭の有名な句、「祇園精舍  
 の鐘の聲、諸行無常の響あり、娑羅雙樹の花の色盛者必衰の理をあらはす」を借用して作つた句である。平家物語の句意は、本  
 講座中に既に石川講師によつて解説せられてゐるから略する。 ○地主権現の花の色、娑羅雙樹のことわりなり 同じく平家物  
 語に依つて作つた句である。地主権現の庭に咲く櫻花の色は、印度の娑羅雙樹の姿をこの世に示して、盛者必衰の理を示して居  
 るとの意である。地主権現は、清水寺の境内にある。神社考に、「清水寺鎮守、本地文殊、號地主権現、大己貴之垂跡也、四月  
 九日祭之云々」とある。 ○生者必滅の世のならひ、げにためしある粧ひ 粧とは、景色有様といふほどの意である。生者必滅  
 といふ此の世のならひ、それは誠にこれ等清水寺の鐘や、地主の花の色)の有様に、はつきりと實例を以て示されてゐるといふ  
 意である。 ○佛も元は捨てし世の、なかばは雲に上見えぬ、鶯の御山の名をのこす、寺は桂の橋柱 「佛も元は捨てし世」と  
 は、釋尊もこの生者必滅、諸行無常の理を觀じたので、この世の中をすて、山に入つたといふ意である。世の中となかばとが  
 掛詞になつて居る。「半は雲に上見えぬ鶯の御山」とは釋迦が成道した後に説法した靈鷲山をいふ。高い山であるから、半以上  
 は雲のために上が見えぬといふので、かゝる形容詞を用ひたのである。「鶯の御山の名をのこす寺」といつたのである。「寺は桂の橋  
 柱」は、桂橋寺といふのを、桂の橋と文字を分つて言つたもの。遠江を遠き江といひ、日向を日に向ふといふのと等しく、謡曲  
 に多い修辭である。「橋柱」といつたのは、次の「立」つにかゝつて、縁語上から添へたものに過ぎない。 ○立ち出で、峯の雲、  
 花やあらぬ初櫻の祇園林下河原 峯に見をかけてある。意味は、立ち出で、見れば、靈山のあたりを立ちこめてゐる雲と見える

のは、花のさかりではなからうか、實にそれこそ祇園林から下河原へかけての櫻花の雲であるといふ意である。「花やあらぬ」は前の雲をうけて、その雲は花ではなからうか、花であるといったもの。祇園林とは祇園の社の南、石の鳥居のあたりをいひ、下河原とは、祇園の南方から、清水坂へかけての地名である。初櫻の初には意味はない。「花やあらぬはつさくら」「祇園ばやししも河原と顔をつかつて口調をとゝのへてゐる所を注意、べきであらう。○南を遙にながむれば、大悲擁護のうすがすみ熊野權現のうつります、御名も同じ今熊野」「南を遙にながむれば」は、清水寺から南方遙に眺むればの意である。「大悲擁護の薄雲云々」は、平家物語卷十、熊野參詣の條に

終夜御山の體を眺め給ふに、心も詞も及ばれず。大悲擁護の霞は、熊野山にたなびき、靈驗無双の神明は、音無河に跡を垂るし。

とある文を借用して來たものである。「大悲」は觀音菩薩をいひ、「擁護」とは觀音が衆生を守護せられることをいふ。「薄霞」は平家物語の用語を模したものであつて意味は殆んどなく、清水寺から南方今熊野の方が、春霞でうすく霞み渡ることを示したものである。「熊野權現のうつります御名も同じ今熊野」とは、今熊野の觀世音は、紀州熊野の觀世をこゝに移し祭つたものであり、名も紀州の熊野に對して、同じく今熊野といふといふ意である。熊野の名も同じといふ意味をかけたと見る大和田氏の説には賛成し難い。今熊野のことは、百練抄に、「應保元年十月十六日、奉移熊野御體於新造社壇、今熊野是也。後白河御願也矣」とあるので、其の移された年代も明である。○稻荷の山の薄紅葉の青かりし葉の秋 この文など極めて意味の通じ難い文章であるが、これは古今著聞集に出た和泉式部の稻荷詣の故事を含んだためにかやうな悪文になつたのである。著聞集卷五に

和泉式部忍びて稻荷に參りけるに、田中明神の程にて、時雨のしけるに、いかゞすべきと思ひけるに、田刈りける童の、襖といふもの借りて着て參りにけり。下向の程に晴れにければ、この襖をかへしとらせてけり。さて次の日、式部、端のかたを見

出して居たりけるに、大きやかなる童の、文もちてたゞみければ「あれは何者ぞ」といへば、「この御文參らせ候はん」といひて、さしおきたるをひろげて見れば、

時雨する稻荷の山のみぢ葉は、あをかりしより思ひそめてき

と書きたりけり。式部あはれと思ひて、この童を呼びて、「奥へといひて呼び入れけるとなん

といふ小話が出て居る。この歌を下に持つて、この謡曲の文は出來てゐるのである。文意は南方をながめると、今熊野一帯は春の霞にうつすらと見え、稻荷山には、紅葉の秋をかざるべき木々がまだ青々と緑色であるとの意である。葉の秋としたのは、次の「花の春は」といふのに對するために出した語である。「御名も同じ、まぐさの、いなりの山」「青かりし葉の秋」など、顔額を使用した所である。○又花の春は清水の、たゞたのため頼もしき春も千々の花盛 又花の春は、清水寺の千々の花盛といふ文脈である。「たゞたのため頼もしき」は清水寺の觀世音の詠み給ふたといふ歌「なほたのためしめじが原のさしも草我世の中にあらん限りは」を下に含んだ句である。(謡曲では、「たゞ頼め」として、多く使用してゐる。しめじが原は下總の地名。さしもぐさは「もぐさ」である。「しめじが原のさしも草」は「さしも有りとも」といふ語の序詞と見る。そしてこの語は省かれてゐるのである。歌意

は「さしも辛きことありとも、猶、我れ世の中に有らん限りは、我を頼めといふ意である」文意は、「又花咲く春は、たゞたのためと尊詠をのこされた頼もしき清水觀音の寶前の千々の花盛」といふのである。○山の名の音羽嵐の花の雪、深き情を人やしる 「山の名の音羽」とは、清水寺のある山が音羽山であるからかくいつたのである。「嵐」に「有らん」を掛けて、「嵐の音は有らん」とつゞける。意味のつゞきは、「山の名は音羽といふが、この花の雪には、嵐の音はあるまじ」といふ工合につゞくのである。「音羽」といふ山名を「音は」と掛けたのである。「花の雪」は、多くは落花の亂れ散る様を雪にたとへていふ語であるが、こゝは、花の白く咲いたのを雪になぞらへていつたもので、ひどく散り亂れてゐるのではない。「深き情を人や知る」は、熊野の母を思ふ深

い情愛は知る人もあるまいといふ心地である。○一さし舞ひ候へ、さしは舞を教へる助数詞である。○中の舞、舞の中に、その位の早さから別つて、序の舞、破の舞の三つがある。序は静にゆつくりと舞ふものであり、破の舞は急速な舞である。中の舞はその中間に位して、最も上品優雅な女舞である。笛の旋律を基本として舞ふのであつて、すべて定まつた型に従つて舞はれる。

【評釋】 以上を以て第三段と見ようと思ふ。中の舞を急の段に入れる方を説く人もあるかも知れないが、中の舞は舞臺上の型の連続から考へて、どうしても破の三段の終局を彩るものと私は考へ度く思ふ。

此の一段は世阿彌の所謂開開眼に相當する所であつて、聴く者の耳を開かしめ、看者の眼を開かすべき要所である。此の曲には尙急の段に一段の精彩を加へる所があるが、それも此の段の連続的進行に於て、はじめてその妙が出るのであるから、やはり此の段の重要さを裏書きするものであると思はれる。

此の段はワキの言葉で始まる。宗盛は花見の席に着いてゐるが、一座の花形役者熊野の姿は未だ見えない。やゝ待ちくたびれた形である。従つて彼は従者をして熊野に急いで來れと命ぜざるを得ない。彼は熊野の心を慰めるために——勿論彼自身の慰めのためにも大にあるが——此の花見を催したつもりで居るのである。従つて熊野が其の席に姿を見せないのは、彼に取つては甚だ不本意なわけである。この不本意の心が従者をして熊野を呼び出させるのであつて、別に熊野の祈誓をさまたげようといふ様な酷薄な心持ではないのである。熊野の立場としては花見は清水へゆくお添へものに過ぎない。彼女の心は故郷の母を思ふ心で一ぱいである。従つて清水寺に着けば、早速に靈驗あらたかな觀音に、母の病氣平癒を祈るのは當然すぎるほど當然である。我々はこの熊野の立場には充分に同感し同

情し得る。それで宗盛の詞「何きて遅なはりたるぞ、急いでこなたへと申し候へ」が、如何にも暴君の我儘らしく聞こえるのである。しかし熊野の返答に六分の道理ありとすれば、宗盛の焦れてゐる心持にも四分の道理はあるのである。一言ワキのために辨じておく次第である。

ツレ朝顔が従者の口上をとりつくと、熊野は「何と早や御酒宴のはじまりたと申すか」と聞き返す。この語の中にあらはれた驚きの心は、間接に熊野の心事をよく示してゐると思ふ。佛前に祈誓をこめる孝女の心には、時間を絶した一心の祈禱あるのみである。従つて自分の祈りが長いか短いか、そんな他事を顧慮する餘裕のない眞剣さにみちてゐる。そこへ宗盛の催促の嚴命であるから、はつこおどろかさざるを得ない。「さらば参らうするに候」といふ語の裏には、佛前を去りたい名残惜しさの心が聞かれる。

惜しい名残の心を内に包み、母を思ふ熊野ではあるが、宗盛の一座へ出ると彼女は直に其の白け氣味の空氣を一轉せしめようとするだけの才氣を示す。「なふく／＼皆々近う御参り候へ」といかにも陽氣らしく一座を引きたて、「あら面目の花や候」と咲きほこる美花に衆心を一轉せしめ、「今をさかり見えて候に何とて御當座なども遊ばされ候はぬぞ」と、手持無沙汰に不機嫌顔をしてゐる宗盛に、揶揄をふくめた嬌笑をあびせかける處など、誠に自在に煥發する彼女の才氣を躍如たらしめてゐる所である。かう先手をうたれては、宗盛の方は小言をいふ處か頗る押され氣味で旗色が悪い。

「實にや思ひの内にあれば……」からは、シテの氣分はぐはらりと轉ずる。「萬葉の花を見ながら、即興の歌を何故よまぬか」と宗盛の無風流を咎めたシテは、自分の痛い處へ自分の言葉がちくりと觸れた。あゝ人を咎めるべき

か、自分も心の思のために、この花を見ても、本心からこれを賞玩する気はおこらないではないかといふ反省、それが、「思ひ内にあれば色外にあらはる」となつて出たものである。そして、人爲を以て如何ともし難い無常の世の習を思つて、深い憂愁の心地に沈む。

「花前に蝶舞ふ紛々たる雪……」からは、再び花の美に眼を轉じて、其の立派さにしみじみと見入る心である。その美景を、百聯抄解の詩句を以て、象徴的に示した手際も巧である。この同じ詩句は、杜若かづはににも引用せられてゐるが、それとは用法が大分にすぐれて、半ばは眼前の美景を彷彿たらしめる効果をあげてゐる。次に「清水寺の鐘の聲……」からは、シテの情緒は、以前の花への詠嘆から轉じて、再び憂愁へ沈む。鐘の聲を聞いても諸行無常を思ひ、咲き亂れた花を見ても盛者必衰といふ理が先づ心にうかぶ。生者必衰の理を見るもの聞くものにつけて観ずる心は、遂に大聖釋尊の身の上まで想を馳せるのである。そして釋尊もこの生者必滅の習をなげいて此世を捨てられ、遂に悟道に入つて靈山の教化に衆生を濟度せられたものであると思ひ及ぶのである。又一方その文章に於ては、前の詩句の終「鐘は寒雲をへだて」を直ぐに取つて、「清水寺の鐘の聲……」と、次句を起してゆく所などは、洗練を極めた技巧と稱すべきであらう。

次の「半ばは雲に上見えぬ……」からは、シテの情調は又一轉して、清水寺の上から遙にながめ渡す四邊の春色蕩たる情景の詠嘆になる。「祇園林下河原」までは、北方の景色を叙したものであり、「南を……」からは、南方の眺望についての叙景である。しかも其の中に幽かに交る情緒は、佛の慈悲の讚美であつて、以前の「花前に蝶舞ふ紛々たる雪……」とは、其の詠嘆の情調の匂ひが、大分と異つて居ることを感じる。文脈として、釋尊の古へに想ひをめぐらしたそれを直ぐに取つて、靈鷲山桂橋寺を、美しい文で起した手際を見るべきであらう。「又花の春は清水の……」所からは、四邊の顧望から生れた詠嘆を、再び目前の清水寺の櫻に轉じたものであつて、ここでは熊野の情感は著るしい進展を示して、清水寺の櫻も、「たゞ頼め……」といふ歌をよみ給うた觀音の利益によつて、千々の花盛を見せてゐるが如くに、情調を色どつて居る。そして、山の名は音羽であるが、嵐の音はこの咲き匂ふ花の雪にはあるまじと、觀音利益の廣大なことをのべ、「深き情を人やしる」と最後にシテの感懐におちつかせて、故郷の母を思ふ憂愁の情を、この一句にとちめてゐるのを見る。

以上のクリ、サシ、クセの文句は、シテの感情の進展を、變化錯落の妙を極めて叙したものであるから、清水の花見の席に於ける場面の叙述ではない。従つて、「何とて御當座なども遊ばされ候はぬぞ」といふ熊野の語と、「妾御酌に参り候べし」といふ語の間には、長い時間の間隙はないものと見なければならぬ。そこでシテは宗盛に舞を所望せられて、花の本の美しい舞となるのである。中の舞の前に、再び「深き情を人や知る」といふ語がくり返されて居る。これは次に始まる中の舞の氣分を示す基調音ともいふべきであつて、熊野の舞はこの氣分を以て全體が貫かれるのである。

## 能の型

前段の終に於て、シテが車より出で、舞臺中央に進み、下に居て合掌する間に、ワキは、脇座に着き、トモはワキの右方地謡の前に、ツレはシテの後方大小前に、何れも下に居る形となり、場面が清水寺に轉じた所まで進む。此の段になつて、ワキは下に居る姿勢のまゝで「如何に誰かある」と従者を呼び出すトモが出で、「御前に候」と平

伏すると、「熊野は何處にあるぞ」と問ひ、「未だ御堂に御座候」と聞いて、「何とて遅なはりたるぞ急いでこなたへと申し候へ」と嚴命する。トモは「畏つて候」と平伏し、朝顔の方へ向き直つて、「如何に朝顔に申し候、はや花の本の御酒宴の始りて候、急いで御参りあれとの御事にて候、其よし仰せられ候へ」といふ。ツレは「心待申し候」とトモへ答へ、靜に立ちあがつて、仕手柱の方から、シテ斜右後方に進み、そこで下に居る姿になり「いかに申し候……」と、催促の趣をシテに傳へる。シテは、「何とはや御酒宴のはじまりたると申すか」といひながら朝顔の方に向き直る。そして「さん候」の答を聞き、「さらば参らうするにて候」と靜に立ち上る。清水觀音の寶前を立ち出る心持である。それから靜に大小前の方から仕手柱際の常座へ歩んでゆき、脇正面の方を見やりながら「なう／＼皆々近う御参り候へ」と呼びかけて、そのあたりに供人の姿を彷彿せしめ、「あら面白の花や候」と面使つて左右を見まはし花の美しさ愛づる心持を示し、「今を盛と見えて候に」と正面の方へ向き直り、「何とて御當座なども遊ばされ候はぬぞ」とワキの方を見やる。ワキのボツンとしてゐる様を見て、その無風雅を彌次る心持である。それから「げにや思ひ内であれば色外にあらはる」とクリを諺ひつゝ、大小鼓の方へ向き歩み出し、そこから正面に出で、舞臺の中央に出で、地謠が「よしやよしなき世の習ひ」と引きとつて諺ひ出すにつれて靜に下に居る姿勢になり、「歎きても又あまりあり」で、シオリ、シオリ返して、なげきの心を示す。「花前に蝶舞ふ紛々たる雪」は、シテが朗かな調子で諺ひ、「柳上に……」以下地謠が、颯々と歌ひ進む所は、シテは下に居る姿勢のままである。「聲の到る事おそし」でワキに向ひ、打切りの間に正に直す。地謠のクセの前半は、シテは殆んど動かない。たゞ「生者必滅の世の習ひ」の所でチリ／＼と脇に向き、「佛も元は」の所で正面に直るのみである。「寺は桂の橋柱、立ちいで」

からシテは立ちあがる。そして、「花やあらぬ初櫻の、祇園林下河原」と扇で差し廻して、遙に北方祇園のあたりの春色を見渡すさまを示す。「南を遙にながむれば」の上羽うへはになつて、扇を開き顔前にかざし、地謠が、「大悲擁護のうすがすみ」と引とつて諺ふと、上げ扇して大左右おほまぎらひ（左右の型の大きいもの）、し「熊野權現のうつります」で角かど（目付柱際）へ出で、「御名も同じ今熊野」の所で、打込み開く型がある。（打込むとは扇を前方から下へ靜に打ち下して胸の所へあげるのをいひ、開くとは、三步ばかり後へ退くをいふ）「稻荷の山の薄紅葉の」で角を見て、その方に稻荷山を見る心地を示し、「青かりし葉の秋」で右廻りに廻り、「又」で差し、「花の春は清水の」で角取り大きく左へ廻り（角取るとは、目付柱の所まで行きそこから左の方へ大きくまはる型をいふ）「たゞたのため頼め、春も千々の」と諺ひ終る頃に大小前の方まで來、「花盛り」で左右し、「音羽嵐の花の雪」で、差し開き、地謠が「深き情を人やしる」と靜にひきとる時、右手に開き持つた扇で、酒を一つ汲む型をする。この所の型など誠に優美で、何回見ても見あかぬ所である。それから「妾御酌に参り候べし」と、汲んだ酒をさくけてワキの前に進み、「如何に熊野一さし舞ひ候へ」と言はれて、扇たゞみ靜に立ち上り、地謠が「深き情を人やしる」と諺ふ間に、する／＼と橋掛り二の松のあたりまで進み、そこから笛のイロへになつて舞臺に歸り、中の舞をはじめるのである。（イロへとは、笛も大小鼓ミのはやしの一種である）（中の舞を舞ふ時に、橋掛まで行かずに舞ひ出づるものもあるが、橋掛までシテがゆく方がより多く美的である）。

シテ「なう／＼俄に村雨のして花の散り候はいかに、ワキ「げに／＼村雨の降り來つて花を散らし候よ。シテ「あ

ら心なの村雨やな、春雨の、<sup>地</sup>降るは涙か、降るは涙か櫻花、散るを惜しまぬ人やある。ワキ詞「よしありげなる詞の種、とりあげ見れば、如何にせん、都の春も惜しけれど、シテ「馴れし東の花や散るらん。〇キ詞「げに道理なり哀なり、はや〜暇とらするぞ東に下り候へ。シテ「何御暇と候や、ワキ「なか〜の事、とく〜下り給ふべし。シテ「あら嬉しや尊やな、これ観音の御利生なり。これまでなりや、嬉しやな。地「これまでなりや、嬉しやな。かくて都に御供せば、<sup>また</sup>もや御意の變るべき。たゞこのまゝに御暇と、ゆふつけの鳥がなく東路さして行く道の、やがて休らふ逢坂の、關の戸さしも心して、明け行く跡の山見えて、花を見捨つる雁金の、それは越路われはまた、東に歸る名残かな、東に歸る名残かな。

【語釋】 ○村雨 一しきりづ、降りすぎる雨をいふ。 ○花の散り候はいかに 花の散りますのは、まあ何としたことでサウの意。「如何」にはおどろきを示した語である。 ○あら心なの村雨やな あゝ情をしらぬ村雨よ。「やな」は二つともに味嘆の助詞である。 ○春雨の降るは涙か 古今集、春下、題不知、大伴黒主の歌に、「春雨のふるは涙か櫻花ちるを惜しまぬ人しなれば、とあるこの歌の下の句を少しかへて、引用したのである。 ○散るを惜まぬ人やある 散るを惜まぬ人があらうか、そんな人は無い答だの意。「や」は反語。 ○よしありげなる詞のたね これは宗盛が、熊野の差し出した短冊を受とつて讀ふ所であるから、「詞のたね」とは「歌」をさしていつたものである。しかし、「詞の種」といふ語を、和歌の意味に使つた例は私の管見には入らぬ。無理な新造語である。或はこれは、「和歌は人の心をたねとして、よろづのことはさぞなれりける」といふ古今集の序文などから思ひついたものであるかもしれない。「よしありげなる」は普通には、「何かいはれのありさうな」といふ意に用ひてゐるが、こゝでは「趣ありげな」「情趣ありげな」といふ意に解すべきであらう。春雨に花の散るを惜しんだ熊野が、即席に作つた歌で

あるから、宗盛としては、何か面白い趣向でもあるのだらうと一種の期待をもつてゐるわけである。 ○如何にせん都の春もおしけれど 都の春の美しさも見すてには惜しいが、それよりも東の花が散る（故郷の老母の命の消ゆることをたとへたもの）かも知れぬのが心配である、如何にしたものであらうの意である。「如何にせん」と眞先きに當惑と嘆きの聲を打ち出した所は、全體の歌をすこぶる生氣あるものたらしめてゐる。 ○げに道理なり哀なり 語の順序が、よく心の動きを示してゐる。先づ道理だと思ひ、哀れであると同情するのである。 ○はや〜暇とらするぞ 早速に暇を與へるぞの意。 ○何御暇と候や シテのおどろきである。「何」とは、「何と仰せられるか」と、あまりの唐突な許可に、己が耳をうたがつた語である。 ○なか〜の事 左様左様。いふまでもなしの意。 ○これ観音の御利生なり 「これ」とは宗盛が歸郷を許すに至つたことをさす。それからは観音の御利益をたまはつたのであるといふ意。 ○是までなりやうれしやな 宗盛の傍に侍するものもこれまで、これからは東に歸れるのか、あゝ嬉しいといふ意であると思ふ。考へ方によつては、前文の「これ観音の御利生なり」を受けて、「御利生は、かほどまであらたかであるのか」とも解せられようが、さう解する時には、次の文が、「尊やな」とあり度い所である。どの流義の本にも、「これまでなりや嬉しやな」とあるので、しばらく前の如き解釋に従ひ度いと思ふ。 ○かくて都に御供せば 清水にありながら、都といふのはおかしいやうであるが、當時の京都の町は、清水からは遠にはなれてゐるから、都にといつたものであらう。宗盛の供をして六波羅邸へ歸りなどしたらの意である。 ○又もや御意のかはるべき 再び宗盛の心が變つて、東に歸ることを許さなくなるかも知れぬといふのである。「又もや」のやは疑問詞と見る。 ○ゆふつけの鳥がなく 御暇を賜はらんと言ふと木綿付鳥とを掛詞にした文脈である。木綿付鳥とは鶉の異名である。古今榮雅抄に「世の中さしがしき時は、君の御祈りに、四境の祭といふ殺あり。鶉に弊へ木綿の弊である」を付けて、陰陽師に悪しき事を祈り付けさせ、四境の關にはなたる、故に木綿付鳥といふ。四境とは、東は逢坂、北は有乳、南は龍田、西は穴生云々」とある。「鳥がなく」は「あづま」にかゝる枕詞であ



る。文脈は「御暇というて、東路さして」とついで、その間の「ゆうつけの鳥がなく」は全文の文意には無関係である。○東路さしてゆく道の 故郷の遠江をさしてゆく道の途中にて。 ○やがてやすらふ逢坂の關の戸さしも心して やがてやすらふ頭顱をふんだ句である。『都を出で、間もなく辿りつき、そこで暫し休らふ逢坂の關』といふ意。「その逢坂の關の戸さしも、孝女の心に同情して開けてくれる」といふ意を、夜の明けゆくにかけた表現である。 ○明けゆく跡の山見えて 「跡の山」は逢坂山から振りかへつて見た京都東山一帯をさしたものである。従つて文意は、「逢坂を越え過ぎようとして、振り返つて見れば、夜のほとん、明ける東山が見えての意。(尚以上の解の他に、又他に一通りの解釋も下し得ると思ふ。それは、夫木和歌集の中の體量の歌「戸さしせぬ御世に心やとむらん、ゆきき障らで越る關路は」を下に持つて作つたものとして、「關の戸さしも心して」を、「關の戸をさしぬ御代の有難さに、その關のほとりに心さめて」を解し、「あけゆく跡の山見えて」は「打ち過ぎゆく關路より振れば東山一帯が遙に眺められて」の意とする。「あけゆく」を「夜が明ける」意とせず、「打過ぎ行く」意とし、「過ぎゆく」ことを、「關の戸さし」の縁語をとつて、「あけゆく」を表現したものと見るのである。この解は随分無理であると思ふが、普通の解のやうに「夜があける」と「關の戸さしを開ける」とを、掛けたものとすると、あまりに事實を無視した解となるから、かうも考へて見たのである。即ち熊野が清水寺から直に暇を乞うて歸京すると、京から逢坂までは先づ一里餘であるから、夜明に逢坂を越すこともあままいし、強いて、夜明に逢坂を越すとすると、清水寺の花見は、眞夜中の事件となつて矛盾撞着を生じるからである。これは此の本文が、何か既成の市下りの文句を借用したために、かうした難解な悪文となつたものと思はれる。何から借用したかは目下明でないから、一寸斷言はし難いが。 ○花を見つる 雁の、それは越路我は又、東に歸る名残かな。熊野が逢坂山から遙にふりかへり見た時、空に雁のとびかへるのを見ての感懐と見る。即ち「同じく都の花を見つて、歸るのであるが、雁の志す方は故郷の越路であり、自分は又我が故郷の東に歸るのである。しかし、さて別れるとなつて見ると、都

に名残の情しまる、事よ」といふ意である。古今集の「春がすみ立つを見つて、ゆく雁は花なき里に住みや習へる」の歌を下に持つて、「花を見つる雁」といふ語を出したのであらう。

【評釋】 以上を急の段と見る。即ち破の第三段と急の段との境を「中の舞」において分つたのである。この段はいはゞ一曲の眼目をなす重要な所であつて、その中心は「如何にせん……」の歌にある。この歌を出すための準備が前半であり、歌の後の晴れやかな餘韻が後半をなすものである。

此の段の初は春雨によつて切つて落される。熊野は宗盛に強ひられて、心ならずも舞ひを舞ふ。心の中はしかし故郷の老母を思ふ情で満たされて居る。表面上は優雅な舞を舞ふて、花見の興をそへてはゐるものゝ、その内の憂愁は去るべくもない。その舞の最中に突如として、一しきりの村雨が襲ひ來り花は無慘にも散り亂れる。多感な熊野がどうしてこれを見のがさう。思はずも舞の半ばながら口をついて洩れ出た歎きの聲がなう／＼……である。熊野が「花の散り候は如何に」といふに對して、宗盛の言葉は、「花を散らし候よ」となつてゐる。女性と男性の相違のはつきりと書きわけられてゐる所を味はふべきである。「散らし候よ」の語を直ぐにうけて「あら心なの村雨やな」と出た詞、亦極めて自然に感情の進みを示してゐる。それから古歌をとつて、「春雨のふるは涙か、櫻花散るを惜しまぬ人やある」と落花を歎く詞となる。こゝには大きい感情のうねりがある。花を散らす春雨と思へば、春雨も恨めしいが、やがては果敢なく散るべき運命の花を思へば、その春雨は、天地の花を惜しむ涙とも見るべきである。やがては散りゆく運命、それはたゞ花には限らぬ、現に故郷の我が老母は……、かく思ふ熊野の心が、次の歌を呼び起すのである。こゝで熊野は一首をもつて宗盛の前に出す。

この歌を解して、熊野が故郷へ歸る策略として、この歌を作つて宗盛を動かさうと志したのであると解する従来の解は、少くとも、此の謠曲中の一首の歌としては的をはずれたものであると私は考へる。この歌は左様な術策を弄して作られたのではない。これは熊野の純情のつく痛ましい溜息である。刻下の感情そのものを詠じて、我が悩みを宗盛の前に披瀝したに過ぎぬ。それによつて許されて故郷に歸れるであらうなどいふ豫期は彼女には全くなかつたのである。だから宗盛から「故郷に歸れ」と許された時、彼女は「何御暇と候や」と、事の意外に我耳を疑つてゐる。そして次にその眞實なることを宗盛から確言されるに及んで、「あら嬉しや」と思はずも歡喜の聲をあげ、次に「尊やな、これ觀音の御利生なり」と、すべてを觀音慈悲の救済に歸してゐる。策略をめぐらして讀んだとしたならば、これ等の次々の詞は全く意義を失つてしまふわけである。又、この歌をワキ一人によましめずして、「なれし東の花やちるらん」を、シテに詠はしめた作者の用意も、充分に味はつてやるべきである。

地の同吟になつて、「是までなりやうれしやな」以下は、全曲を餘韻ゆたかに結ぶキリ地であつて、「たゞこのまゝに御暇と」といふ、いそ／＼として歸りゆく心が主となつて居るが、その中に、都への名残を惜しむ心を點出した處は、この曲のシテの優雅さをどこまでも發揮せしめて、有終の美を成さしめて居る處であると思ふ。即「花を見すつる雁かりがねのそれは越路」といふ所で、嬉しき歸郷といふ情調の流れにしばしのたゆたひを起させ、雁の花を見すつる名残を靜に我身に轉ぜしめて、「我はまた東に歸る名残かな」と結びを付けた處、などまことに美しく優しいシテの雅情を巧に表現し得たものと、毎度感ずる所である。

## 能の型

前段の最後は舞に入る。此の中の舞は三段が、りであつて、それが又序破急の位をふんで、段々と閑かな位から急の位へと進んで行く。急の段に入る頃には、觀客は全く其の舞ぶりのあでやかさに恍惚と見入る。大小鼓の囀子、笛の響き、皆其の優艶な情調を助けて、將に閑になる時、(舞の第三段の最後から少し前)、シテは仕手柱際から、脇正面の方に目をそゝいで、「なうなう俄に春雨のして花の散り候は如何に」と、突如として謠ひ出す。如何にもさつと山嵐に交る村雨が襲うて、脇正面のあたり一帯に櫻花の散り亂れるのを見る如き感がする所である。(この謠ひ出しを、中の舞の終の頃に、シテが舞臺をはなれてサラ／＼と橋掛に進み、一の松のあたりでふり返り、舞臺を見越して、ワキに向つて呼びかけた型を見た事があつた。觀世元滋氏のシテであつたが、型が大きいだけに、呼びかけも眞に生きて感ぜられ、舞臺一面に落花の繽紛と散り亂れる如き感がして、誠に興の深いのを覺えた事があつた。普通にはシテ柱際から謠ひかけるのが常である)この呼びかけで、今まで舞に見とれてゐた宗盛も始めて心づいて、「げにげに村雨の降り來つて花を散らし候よ」と答へる。シテは「あら心なの村雨やな」と正面へ乗込拍子踏み、地謠が「降るは涙か、降るは涙か櫻花」に謠ひ出すと共に角すまに行き、扇をかざし空を見上げて落花の亂れるを見る心持を示し、それから大きく左へまはつて地謠席の前方までする／＼まはり行き、そこから脇正面の下方を見廻して、地上に散りしく花を痛む心持を示し、「散るを惜しまぬ人やある」と謠ひ進む所で、扇左手に持ち、脇正面の方へする／＼と二三歩み出でながら、散り來る花を扇で二度ばかり受けとめ、正面に出でながら扇を手元へ引いて受けとめた落花をとくと見入つて惜しむ心を示し、小さくシオリつゝ右廻りして舞臺中央まで行き、そこで正面向き下に座し、扇を伏せて受けた花を靜に捨てる型をする。こゝの所は、誠に優美な型所であつて、曲中第一の

見所といふべく、何回見ても見飽かず、見る度毎に情趣の深まりゆくをおぼえる所である。それから有名な短冊の段となる。その時シテは下に居てしばらく面伏せて考へる心持をし、おもむろに左手を以て左袂から短冊をとり出す。歌稿成つて短冊に對する心である。それから右手で扇を逆持ち、要の所を筆の穂先とし、墨に浸して短冊に書く心持で、開いた短冊の上に一度(型によつては、二度、三度)すらくと棒を引く型をする。そして靜に扇を開いて、短冊を其の上に乗せる。この動作の間は、囃子方はアシラヒの鼓を靜かに打つて居るが、愈々書き終つて、短冊を扇にのせるのを合圖に、囃子の調は急調に變じ、シテは立つてすらくとワキ座に行き、短冊をワキに差し出す。ワキが此をとりあげて、ワキ正面に向き直り將に讀み上げようとする時、拍子は打上げて治まるのであつて、其の囃子の緩急にも亦、えも言はれぬ面白味がある。拍子の打上げと共にワキは、「よしありげなる言葉の種とりあげ見れば」と氣をかけて謠ひ、「いかにせん都の春も惜しけれど」と上の句を讀むと、此時すでに舞臺中央に歸つて下に居るシテは靜に引きとつて、「なれし東の花やちるらん」とやゝ押へ氣味に謠ひつゝ、左手を以てシオリ、泣く心を示す。ワキが、「げに道理なり哀なり、早や／＼暇とらするぞ、東に下り候へ」と和歌に感じて歸郷をゆるすと、シテは「何御暇と候や」と、シツカリと謠ひつゝワキに向き、「中々のこと……」とワキの答を聞き、飛び立つばかりの嬉しさの心で、「あら嬉しや尊やな」と謠ひ、「是觀音の御利生なり」と、正面向いて合掌禮拜の型を示す。地謠が、「是までなりやうれしやな」と引きとつて謠ひ出し、「かくて都に」と謠ふ所でワキに向つて會釋の心を示し。「たゞ此のまゝに御暇と」のあたりで立ち上り、「木綿つけの鳥がなく東路さしてゆく道の」の處で、故郷へ歸る心で仕手柱際までゆき、「やがてやすらふ逢坂の」と謠につれて、再び立歸つて正面へ出で、「明け行く跡の山見

えて」では、雲の扇(開いてうつむけた扇と、左手を合せて、引き分ける様に左右へのける形)をしつゝ、遙に山を眺め渡す型をし、「花を見つる雁金のそれは越路我はまた」の謠につれて、角へサシテ行き、扇かさして左へ廻り、「東にかへる名残かな」で、大小前から正受けて開き、返しに、拍子踏んで舞ひ納めるのである。尙此のキリの段は、「木綿付の鳥がなく」から、橋掛に進んでゆき、そこで舞ふのもある。「なう／＼俄に村雨のして」の此段最初の呼び掛が橋掛から出る時には、キリも橋掛で舞はれる。その時は、「木綿つけの鳥がなく」で立ち上り、「東路さしてゆく道の」の謠一ぱいに、シテは橋掛二の松の邊までサラ／＼と歩みゆき、「やがてやすらふ」のあたりで振り返り、「關の戸さしも心して」のあたりで、扇開いて正受け、「あけゆく跡の山見えて」で雲の扇し、「花を見つる」以下の所では、二の松邊で、扇かさしつゝ左廻り、掲幕に見入り、「それは越路我は又」で幕際までゆき、「東にかへる名残かな」と拍子ふんで舞ひとめるが、この方がずつと見榮えがして、如何にも歸路の途中にある佳人熊野を思はしむる趣が深い。シテ舞ひとめて幕に入り、つゞいてツレ、ワキ、トモ、も幕に入つて、こゝに一曲は終る。

砧

一、曲の作者。此の曲の作者は世阿彌元清の作であると思はれる。彼の十六部集中、申樂談儀の中に、世阿彌作の曲目をあげた所には、此の曲名は見えない。従て確證をもつて斷言する事は出来ぬが、世阿彌が此の曲に關して述べた條が、申樂談儀の中に二所ある。

「靜成し夜、きぬたの能の節を聞きしに、かやうの能の味は、末の世に知人有まじければ、書きをくも物ぐさ

きよし、物語せられしなり。然ればむしやうむみのみなる所(無上無味のみなる所の意と思はれる)は、味はふべき事ならず。又書き載せんとすれ共、更に其の言葉なし。位上らば、自然に悟るべき事と承れば、聞書にも及ばず。たゞ浮船、松風村雨などやうの能に、相應したらんを、無上の物と知るべしと、云々。」

「きぬたの能、後の世には知る人あるまじ、物うきなりと云々」

申樂談儀は、世阿彌が能に關して語つた所を、世阿彌の子の元能が筆録したものである。さて此の二ヶ所の文章は、同一の談を二所に別つて、一は簡に、一は詳細に記したものであると思はれるが、世阿彌が如何に此の曲に對して深い自信と理解とを持つて居たかどうかはされる。

世阿彌は、後世此の曲の味はひのわかる人間はあるまいと言つて居る。即ち此の曲が無上の妙曲であり、含蓄深く幽玄であつて、しかもどこも言つて特にとり立て、美事であるといふ點が指摘出来ないといふのである。味はひの濃厚なるものであれば、何人でも其の五味を味はひ得る、しかし無味なること水の如きに到つては、何人も其の甘露の美味を賞し得るとは言へない。無味とは味の無いことではない。たゞ其の味の美なるために、言語を以てこれを傳へることが出来ず、又觀賞眼のすゝんでゐない者には、其の味はひのわからない所をさしたものである。世阿彌は其子の元能にすら説いて聞かせることは出来ぬと考へ、元能の能が進んで、藝の位が上つたならば、自然にその妙味は自悟し得られるとのべてゐるのである。この碯の能の味のわかるまでは、先づ松風村雨や浮船の能のやうなものを、無上の物と考へて居るが良い。といふ庭訓である。

世阿彌が能曲に關して語つて居る語は、十六部集の中にすいふと多い。しかしこれほどに深い理解と自信とに満ちた言葉を吐いて居る曲は他には無い。この點から考へても、此の曲が世阿彌會心の作であるといふことは考へられる。又此の曲の詞章の持つ美しさ立派さから考へ、其の辭句の簡潔で餘韻の豊かな所から考へて、此の曲が世阿彌以外の人の手になつたものとは思はれない。從來の曲目に於ては、父親阿彌の作曲に於てすら、彼はその章曲に縦横の批正を加へて、立派なものに作りかへて居るのである。當時これだけの名詞章を創作し得るものは世阿彌を措いて他には求められないのである。第三に、若しこれだけの曲が、何人か他人の手に成つたものであるならば、世阿彌ほどの人が、何かそれに關して語つて居るべきである。しかるにさうした言は十六部集中には見當らない。これ等の理由から推して、私は此の曲を世阿彌作と斷じ度いのである。たゞいぶかしく思はれるのは、これほどに父がのべて居る名曲であれば、同じ申樂談儀の中に於て、曲の作者を記した所に、世阿彌作として元能があげるべき筈であるのに、それが見えない點である。そこに疑へば疑ひ得る一點がある。しかし私は、此の曲は世阿彌作と斷じ度い。因に吉田兼持の能本作者註文及び觀世元章の二百十番謡曲目錄共に、作者は世阿彌と記してゐる。

一、曲の典據。此の曲は何等の典據といふべきものはないやうである。出典があれば、世阿彌の能作書にのべて居るやうに、破の三段目あたりに、それらしい所がほの見えるやうに書かれて居るべきである。能作書の中、書所に、

「書とは、其の能の開口より、出物のしなじなによりて、此の人體にては、如何やうなる言葉を書きてよかるべしと案得すべし。祝言、幽玄、戀、述懐、望憶、色々の縁に因るべき詩歌の言葉を、能の風體によりて、とりあてがひて書くべし。能には本説の在所あるべし。名所舊跡曲の所ならば、其處の名歌名句の言葉をとること、能

の破三段の中の詰とおぼしからん在所に書べし。是能の堪用の曲所なるべし。」

と述べて居るが、此の曲には、さうした所に、出典と見るべきやうなものは見當らない。

曲の内容から考へると、室町時代にあり勝ちな巷談のやうにも思はれる。地方の人々が、土地其他いろ／＼の訴訟のため、幕府の所在地へ出かけて其の裁断を乞ふ。所がその訴訟の思ひのまゝに運ばないで、二年三年に亘る長逗留となる。その間に故郷に残した妻女が、戀慕の心に胸を焦し、或は夫が都の美女と契つて自分を見すてたのではないかといふ様な嫉妬心などから、心亂れて狂死するといふ様な事は有勝ちである。狂言などを見るに、夫の長年の留守に、待ちわびてしびりを切らして他の男を迎へるなどいふ様なものも随分とある。さうした巷談によつたものかとも考へられるが、隅田川ほどの傳説的なものでもない。

私は此の曲は全然世阿彌の創造したものであると考へ度い。たとひさうした巷談があつて、それから暗示を得たものとしても、これだけにまとも上げるのは作者の創造力である。而して、其の暗示はむしろ漢詩文の方から得たものと私は考へ度い。和漢朗詠集や三體詩などから暗示を得たものではなからうか。婦人が遠境の夫を思つて、砧を打つなどいふ詩境や、夫の愛の薄れるのをなげいた鶯怨の詩などは、漢詩文に甚だ多い。それ等の詩境を渾融して、其の素材を當時のあり勝ちな巷談に求めて、その上に築き上げられたのが此の一曲であると思はれる。

一、曲の種屬及位。此の曲は其の種屬から述べると四番目物である。そして幽霊能として凄婉なるものである。幽霊能は其の數が甚だ多いが、多くは前ジテが樵夫や漁夫や里女などとなつてあらはれ、後ジテとなつて、在りし世の華やかな姿を現はして見せるといふのが普通であるが、此の曲などは、後ジテが凄婉な幽霊となつてあらはれて、

地獄の苦惱を訴へるといふ怨靈物に近い性質である。しかもその前ジテが優美な女性の悲戀といふ婉なものであるだけに、一曲の凄婉の趣は益々深まるのである。この前ジテの性質から、略三番目物として、女能の位置に置かれる事もある。

此の曲の位は頗る重いものとせられて、練達勸能の役者でなくては、演ずべからざるものとなつて居る。此の位に關しては、前に作者を論ずる處でのべた世阿彌の語を思ひ出せば、如何に重い曲であるかどうかはれると思ふ。世阿彌が砧の曲は、無上無味で、後世の人々にはわかるまいと言つた。その心持を一面からのべたと思はれる。條が、十六部集中の覺習條々にある。その中、「批判の事」の中に、

「心より出で来る能とは、無上の上手の申樂に、物數の後、二曲も物眞似も、きりも、さしてなき能の、さびくとしたる中に、何とやらん感心のある所あり。これを冷たる曲とも申すなり。この位、よきほどの目利も見しらぬ也。まして田舎目利などは思もよるまじきなり。是れはたゞ無上の上手の得たる瑞風かと覺えたり。」

といふ條がある。砧の曲は、此の點からいへば、誠に心より出で来る能と稱すべきであらう。池内信嘉氏は、「砧といふ能は、各流通して重き能とす。いかにも重き能なり。誠に難かしき能なり。見ても重き能とつけられ、謠つても難かしきものと感ずる。何故に此の能は重きか、何のために此の謠は難しき難きか。別段むつかしき節があるにもあらねば、是といふ舞の手があるでも無し。むつかしき節もなく別段の形もなき能のむつかしき謂さへ判れば、此の砧といふ能の性質も明瞭となる譯なり。(中略)たゞ秋の夜半に響く砧の聲と、戀慕に泣く可憐なる女の心情とを對照したる點こそ、此の能の生命にて、其の景情の趣きをあらはすこそ、實に此の能の難物として、

世に重んぜらるゝ所以ならぬ。」

と述べて居られる。舞にむつかしき所なく、節まはしに困難なる所もなく、それで居て、むつかしきとは、此の曲の生命を把握しそれを演出することの困難をいつたものである。曲の生命の把握のむつかしさについては、世阿彌がすでにのべて居る。又舞歌の二方面に於てむつかしき所なき曲で、その生命のきらへ難く、その眞の趣の感じがたいといふのは、見や聞より出づる能ではなくて、心より出づる能、冷えたる曲であるからである。實に此の一曲の生命は、秋夜擽衣と閨怨といふ悲涼凄婉なる情趣を渾融せしめて、その情趣を、具體的な芦屋某の妻女といふ一婦人を通じて、濃やかに舞臺上に醸し出す所である。芦屋某の妻女の閨怨と擽衣を演ずるのではなくて、有史以來の薄命な婦人の擽衣によつて洩らす閨怨の情を、こゝに凝結して演出する處にある。世阿彌が靜夜に妬の、節を聞いて後人此の曲を知る者あるまじと歎じたといふ語を見る時、私は切に此感を強くするものがある。

金春禪竹の歌舞體腦記、五音三曲集、共に此の曲に關しての記載はない。従つて彼の意見はうかゞふ由もないが、或は彼の頃には、あまりもて囃されなかつた曲であるかもしれない。

ワキ	芦屋某
ツレ	夕霧
前ジテ	妻女
後ジテ	妻女の亡靈
處	筑前芦屋の里
季	秋

ワキ男詞「これは九州芦屋の何某にて候。われ自訴の事あるにより、在京仕りて候。かりそのの在京と存じ候へども、當年三年になりて候。餘りに古里の事心もとなく候程に、召し使ひ候夕霧と申す女を下さばやと思ひ候。

いかに夕霧、あまりに古里心もとなく候程に、おことを下し候べし。この年の暮には必ず下るべき由心得て申し候へ。ツレ「さらばやがて下り候べし。必ずこの年の暮には御下りあらうするにて候。ワキ申入。更行「この程の、旅の衣の日も添ひて、旅の衣の日も添ひて、幾夕暮の宿ならん。夢も數そふ假枕、明し暮して程もなく、芦屋の里に着きにけり、芦屋の里に着きにけり。」「急ぎ候程に、芦屋の里に着て候。やがて案内を申さうするにて候。いかに誰か御入り候。都より夕霧が参りたる由、御申し候へ。

【語釋】 ○是は九州芦屋の某にて候 無名のワキではあるが、ワキであるから「是は」といふ位としたもの。芦屋は九州筑前遠賀郡芦屋村である。昔より茶釜の名産地として有名である。 ○自訴の事 國語辭典には、他に托せずして自ら起したる訴訟の意とあるが、公訴に對していつた語であると思ふ。自己の所有の犯された場合などに訴へ出ることであらう。自訴といふのは室町時代に多いらしい、鳥追船にも、「某自訴の事あるにより、十箇年餘り在京仕り候處に」といふ文句がある。 ○在京仕りて候 訴訟のために幕府の所在地、京都に滞在してゐるといふ意。 ○假初の在京 ほんの暫時在京のつもりでゐたがの意。當時の訴訟などいふものが、手廻を求めて役人に近づき、因縁や賄賂などによつて事を行ふので、甚だ長い間かゝつたらしい事は、當時の文献に多く見える。讀者の知らるゝ例でいへば、十六夜日記の例もある。 ○當年三年 今年で足かけ三年になつたの意。 ○下さばや 京都より九州へ遣はすのであるから、下すといふ。上す下す、上る、下る、等いづれも京都を中心としたいひで方

ある。○おこと 二人稱代名稱御事の義であるそなた汝の意。○心得て申し候へ 心得ては申すの副詞と見る。○やがて下り候へし やがては直にの意。○必ず御下りあらうするにて候 必ず御下りなりますやうの意。必ず下つてくれといふ心持である。○此程の旅の衣の日もそひて 此の道行は、熊野の序段、朝顔の道行と殆ど同文である。たゞ最後の一句が異なるのみ。熊野の條を参照せられ度い。以下の文章も熊野の條に註した。

【評釋】 以上が本曲序段である。構造は熊野によく似て居る。次第を省いて、直にワキの名乗から始まる。「假初の在京と存じて候へども」といひ、「あまりにふるさとの事心もとなく候程に」といふ語調によつて、此のワキが都に心ならずも長逗留して居ることを知らせ、始終故郷の妻女を心配して居るらしい心情をさとらせてゐる。ワキは決して無情に妻を見すてたのではない。たゞ訴訟事が涉らぬため、つい故郷に歸ることが出来ぬに過ぎぬ。然るに故郷の妻は女心の一すじから、戀慕極まつて夫の歸らぬのを恨むに到る。その夫妻何れの心情にも、各々道理はある。そこに此の悲劇の生るゝ契機がひそめてあるのである。夫が召使を手離して、故郷へ歸らしめるのは、故郷の妻の心もとなさを慰めん爲であり、「此の年暮には必ず下るべき由心得て申し候へ」といふのは、妻女に待つ力をあたへんがためである。しかも、事實は其の暮には訴訟落着せずして、歸ることが不可能となつた。こゝに、折角の夫の志は、却つて妻女の心を一層つよく痛ましめる種となつて、妻女の死といふ悲劇を生む結果をもたらしたのである。かく考へて來ると、此の序段は、一見サラリと出來て居て苦心した處もないやうであるが、詳しく見ると、この一段の中に、將來の事件の伏線となり、機縁となること、簡単な詞の中に、うまく織りこまれ居ることを見る。ツレの詞・道行共に、淀みなくきれいである。

## 能の型

笛大小鼓の囃子方座に付くと、ワキは幕をあげさせて橋掛にあらはれる。段鬘斗目の着付の上に、素袍の上下、小刀を帶した姿で、ツレの夕霧を従へて堂々とする處、能柄の重き曲のワキとしての品位が備はつて居る感がある。舞臺に入り、真中に立つて、「是は九州芦屋の何某にて候」と名のり、故郷心もとなきたために夕霧を下さうと思ふと述べツレの方に向つて、「如何に夕霧、あまりに古里心もとなく候程に、御事を下し候べし。此年の暮には必ず下るべき山、心得て申し候へ」と命ずる。此の時、ツレはワキに従つて出で、仕手柱際に下に居て控えて居るのである。面は連面(小面)をつけ、色鬘帶、褶箔の着付に、赤地の唐織着流しの姿である。ワキに命ぜられて、其の座で、「さらばやがて下り候べし。必ずこの年の暮に御下りあらうするにて候」と優しく答へる。そこでワキは悠々として幕に入り、ツレは残り、ワキが入り終つて後、常座に立つて、うるはしく滯らぬやうに道行を謠ふ。都の主人の許を立出で、九州への旅に出かけた心持である。「此の程の旅の衣の日も添ひて、幾夕暮の宿ならん、夢も數そふ假枕、明し暮して程もなく……」と、熊野の曲に於ける朝顔と同じほどの位で謠つてゆくが、朝顔にはやさしき中に陽氣な所があるに反して、此の曲には幾分しめり氣分の陰なる所が聞かれるべきである。春と秋との相違といひ、シテの相違といひ、曲柄によつて、ツレの謠の情調にも、全曲の位が備はつて居るべきである。着せり終つて、「やがて案内を申さうするにて候」といひ、靜に橋掛に行き、一の松の邊で、幕に向つて、「如何に誰か御入り候、都より夕霧が参りたる由御申候へ」とよびかけて、一先づ後見座の所にクツロギ、次のシテの出を待つのである。

シテ女サシ「それ鴛鴦の衾の下には、立ちさる思ひを悲しみ、比目の枕の上には、波を隔つる愁あり。ましてや深き妹背の中、同じ世をだに忍草、われは忘れぬ音を泣きて、袖にあまれる涙の雨の、晴間まれなる心かな。ツレ詞「夕霧が参りたる由、それ〱御申し候へ。シテ詞「何夕霧と申すか、人までもあるまじ此方へ來り候へ。いかに夕霧、珍らしながら怨めしや。人こそ變り果て給ふとも、風の行方の便にも、などや音信なかりけるぞ。ツレさん候とくにも参りたくは候ひつれども、御宮仕への隙もなく、心より外に三年まで、都にこそは候ひしか。シテ「何都住居を心の外とや。思ひやれげには都の花盛、慰多き折々にだに、憂きは心の習ぞかし。下歌地「鄙の住居に秋の暮、人目も草もかれ〱の、契も絶えてぬ、何を頼まん身のゆくへ、上歌地「三年の秋の夢ならば、三年の秋の夢ならば、憂きはそのまま覺めもせで、思出は身に残り、昔は變り跡もなし、げにや傷の、なき世なりせば如何ばかり、人の言の葉うれしからん。愚の心やな、愚なりけるたのみかな。

【語釋】 ○それ鴛鴦の衾の下には立去る思をかなしみ云々 「それ」は發語。「鴛鴦の衾」は、鴛鴦は雌雄甚だ睦しい鳥であるから、普通の場合には「男女相寢る夜具」をいふのである。しかし此處の文章に於ては、鴛鴦の共に寢る衾の意に用ひてゐる。勿論、鴛鴦の二鳥が、衾を着て寢るなどいふ事はあり得ぬことであるが、一の擬人的修辭を用ひたものである。「立去る思を悲しみ」は前をうけて、その雄雌何れか何かの事情で獨寢しなければならぬといふ辛さを悲しむ意である。大和田氏は、「鴛鴦の模様を縫にしたる蒲團を鴛鴦の衾といふ」と解し、「此の衾を獨り着つゝ、夫の家にありし日に夫婦睦しくせし事を思ひ出して、遠く別れたるを悲しむと也」と解してゐられるのが、それは從ひ難い説である。大和田氏の如く解すると、次の「比目の枕の上」は比目魚の蒔繪でもしたやうな枕と解しなくては、對句の性質上おさまりがつかなくなる。それはあまりに滑稽である。

○比目の枕の上には波を隔つる愁あり 比目は比目魚である。此魚は雌雄が打ち連れ、二つの目をならべて水中に住むといふ傳説的な話がある。支那の戰國策といふ書に、「比目之魚、不<sub>レ</sub>相得、則<sub>レ</sub>不能<sub>レ</sub>行」とある。即雌雄相捕はなくては、進むことも退くことも出來ぬものと考へてゐるのである。「比目の枕」は、普通には、枕を並ぶること、同衾する意である。しかし此の文章に於ては、前の鴛鴦と等しく、比目魚が雌雄枕をならべて寢ることをいつたものである。「波を隔つる愁あり」とは、二魚の間に水のへだてが介在して、びつたりと一所になれないといふ悲しみがあるとの意である。「衣さへ中にありしはうとかりきあはぬ夜多くへだてつるかな」といふ古歌の上句の心である。鴛鴦比目は古來から、男女の相はなれぬ事に多く用ひられてゐるが、最も人口に膾炙してゐるのは、唐詩選の長安古意中の「得<sub>レ</sub>成<sub>レ</sub>比目<sub>レ</sub>何辭<sub>レ</sub>死、願<sub>レ</sub>作<sub>レ</sub>鴛鴦<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>羨<sub>レ</sub>仙、比目鴛鴦真可羨、雙去雙來君不見」の句であらう。本語曲の全體の文意は、「鴛鴦比目は、昔から雌雄互に相はなれぬものとして、人々から羨れてゐるものであるが、それすら、互に相わかれるかといふ心配に憐む折もあれば、又雌雄の間に何か介在して、眞にビタリと一所になり得ぬといふ愁もあるものである」といふ意である。この二つの對句の文章を受けて、「ましてや……」と次の句は起されてゆくのである。この對句は、「弱法師」の破第一段、シテサシの冒頭にも用ひられてゐるが、これは親子の別を悲しむ所に引用せられてゐるので、此の曲ほどの痛切さはない。○ましてや深き妹背の中 前句を受けて「鴛鴦比目すら然り、まして人間としての深き縁を結んだる我等夫婦の中に於て」とつゞく文脈である。○同じ世をだに忍草 同じ世とは、共に此の世に生き永らへてゐる間をさす。「だに」といふ助詞があるから、「死別せし人が亡夫をしのび思ふは常であるが、自分は、同じく生きてゐる世に於てさへ、夫婦はなれ〱になつて、偲はねばならぬといふ悲しき運命である」の意。「忍ぶ草」は思ひ偲ぶ意に、草名をかけ、次の「忘れぬ」の「忘れ」を呼び出す序詞の役をつとめる。忍ぶ草、忘れ草は、異名同草である。古今榮雅抄に、「忘れ草



は古宅などの軒に生ふる草也、又しのぶ草をいふ也」とあり、伊勢物語にも、「忘れ草生ふる野邊とは見るらめどこはしのぶなり後もたのまん」といふ歌がある。○我は忘れぬ音を泣きて 我はと強調したる所「夫はいざしらず、自分は夫を忘るゝことなく、夫戀しき思を音にたて、泣きて」の意を示してゐる。「音には根をかけて、草の縁語とす」大和田氏はのべてゐられるが、そこまでは穿ち過ぎであらう。○袖にあまれる涙の雨晴間まれなる心かな 我は音に泣きて、落つる涙は袖にもあまるばかり、しかもその涙の雨はたえず降り下つて、我が心は晴間極めて稀であるといふ文脈である。簡單にして餘情つきぬ表現である。「涙雨の晴間稀なる」は、心の晴れ慰むこと殆どなく、常に悲嘆にくれ勝ちであるとの意。「それ鴛鴦……」から「晴間まれなる心かな」までは、芹屋の里に夫の歸りを待ちわびてゐるシテの感懐を叙したものである。○それそれ御申し候へ 夕霧が取次の者に向つていふ詞。「左様に御取次が願ひ度い」の意。○何夕霧と申すか 「何」は驚き發した語である。我耳をうたがつた表現である。「何といふぞ、夕霧が来たといふのか」といふ意。○人までもあるまじ 取次の者を介するにも及ばぬことであるの意。○珍らしながら恨めしや 久々で會うて、珍らしく嬉しい氣はするが、しかしそなたまでも恨めしいといふ意。簡單な二語の中に、シテの心情を寫し得て餘蘊なき表現である。○人こそ變りはて給ふとも 敬語があるから、「人」は夫をさしてゐること明である。「夫こそ、よしや心變りせられて無情にも我を忘れ給ふことありとも」の意。○風の行方の傾りにも 風の傾りにも意。○などや音信なかりつるぞ「そなたまでが、一度の音信もせぬといふは、あまりではないか」と恨んだ語。○御宮仕の隙もなく 主人の御そば仕への御用の忙しさにの意。○心より外に 心ならずも、不本意ながらも意。○都にこそは候ひしか こそ、その掛りをうけて、しかと結んだのである。○なに都すまひを心の外とや 夕霧が「心より外に」といつた語を聞き咎めて放つた嫉妬的な一語である。我が夫と一所の都の住居が何の不本意な事があらうや、そんな事は無い筈である。○思ひやれ實には都の花ざかり、なぐさみ多き折々にだに、憂き心の習ぞかし 「思ひやれ」は「我が身の上を察しても見よ」の

意。「實には」は「實に」の意。はは強めの助詞と見る。この語は、「憂き心は心の習ぞかし」の「憂き」にかゝる副詞と見る。「都では花盛りの好季節で、人々も慰みも多き折々ですら、自分は誠に心憂き物思に沈み勝ちな日々を送つてゐたのである。」との意。「心の習」とは、物憂い事の度重つて、それが心の習慣となつたといふ意。○鄙の住居に秋の暮れ 前句の「都の花ざかり」を受けて、「鄙の住居に秋の暮れ」と對句的な表現をとつたのである。「自分がかうした田舎の住居をして、幾度かの悲しき秋は暮れゆき」の意。○人目も草もかれゝの 古今集、冬、源宗子朝臣の歌、「山里は冬ぞさびしきまさらける人目も草もかれぬと思へば」の歌を引いたもの、「人目離れて訪ふ人もなく、草木も枯れて淋しきながめとなつた、そののみならず、かれがれであつた我等夫婦の契も、絶え果てしまつた」とつづく文である。「かれゝの」は更に次の「契」にかゝつて形容詞の役をつとめてゐる。○かれゝの契も絶え果てぬ とだえ勝ちで、殆どあるかないかわからぬ程の我等夫婦の契も、こゝに全く絶えてしまつた。○何を頼まん身の行方 我が行先は、何を頼みに生きて行かうぞの意。○三年秋の夢ならば 夫と別れて後の三年の間が、若し夢であつたならの意。秋の字に、三年の間の淋しさの心持が聞かれる。「若し夢であるならば」、いふ語は「夢なれかし、若し夢ならば、夢のさむるゝ共にその三年の間の心憂き事も消ゆべきに」といふ餘意を生み出す。この語を省いてゐる處に簡潔と餘情の豊かさをねらつた作者の腕が見られる。○憂きはそのまゝさめもせで 夢でないために、物うき事はそのまゝに覺めずして。○思出は身に残り昔は變りあともなし 追憶の心は胸に満ち、昔の樂しかつた境遇は全く變り果て、跡形もないことよといふ意。○實にや 次の「如何ばかり人の言の葉うれしからん」にかゝる副詞。○偽のなき世なりせば云々 古今集、戀人不知の歌である。下句、「人のことは嬉しからまし」とある。「此の世に偽りといふものゝ無い世であつたならば。人の約言はいかばかり嬉しからうに。」の意。○愚の心やな、愚なりける頼みかな 「愚の心」とは自嘲の語である。「夫のあだなる頼みの言葉を、あてにして居たる我が心は、何といふ愚な心であつたかといふ意。「愚なりける頼み」は「夫の詞を頼みにしてゐたの

は愚なりしことよ」の意である。同じ思想を、くりかへし言つたもの、しかも平板な繰返しをさせて表現をかへた處を注意すべきであらう。

【評釋】 以上を「破の第一段」と考へ度い。その中にも、又序破急の變化が有つて、先づシテのサシが序、シテとツレとの問答が破、地の同吟の下歌上歌が急といふ工合に、一段の情調は漸層的に進んでゆくを見る。

先づシテのサシは、「三年の間夫と別れ、孤閨を守つた婦人の閨怨をのべた感懐である。其の冒頭に、鶯鶯比目の契にも、立去る思ひの悲しみや波を隔つる愁ありとのべてゆく對句的な一文の中に、よく此の一曲の精神を打ち出して居るのを感じる。それを直ぐに受けて、「ましてや深き妹背の中、同じ世をだに忍草」とつゞけてゆく所、しみじみと疎き縁を嘆きかこつ薄倅の婦人の溜息を聞く心地がし、「袖にあまれる涙の雨の、晴間まれなる心かな」と、靜に餘韻深くとちめてゆく所に、淋しき閨に眺めあかすあはれさが感じられる。「忍ぶ草」「忘れぬ音」と、掛けてゆく詞にも、少しの無理もない自然さがある。誠に上々の出来と稱すべき文章である。

シテが心細く身を歎いて居る情調に、一の波瀾を起させ、一波は又一波を呼び起して、變化の妙に導くのが、ツレ夕霧の出現である。「夕霧が参りたる由、それ／＼御申し候へ」と、いそ／＼として主人の北の方を慰めるべく歸つたツレに對して、素直に其の歸郷を喜び迎へるには、妻女の心はあまりに傷み過ぎてゐた。「何夕霧とか、申すか珍らしながら恨めしや」この二語、シテの胸中にむら／＼と湧き起つたなつかしさと恨めしさの混交つた、何ともいへぬ情緒の喘ぎを、端的に表現して餘蘊ない。淋しい折節に夕霧の歸還を見ては、懐しさうれしさ慕はしさの心は油然として湧く、それと同時に、夫の無情を怨む心は、その夫と三年の起居を共にした夕霧にまで波及して、一種

のヒステリックな嫉妬となつて心を暗く掻き亂す。シテの心は泣き笑ひといふ一種の奇妙な心情でみたまされ、そのあらはれが、「珍らしながら怨めしや」となつて出たのである。「人こそ變りはて給ふとも風の行方のたよりも、などや音づれなかりけるぞ」は、其の「恨めしや」心の一端が、する／＼と袖ぎ出されたのである。「そなたまでが何の便りもしてくれぬとは、あまりに恨めしい」と恨まれた夕霧は、妻女の權幕におどろいたであらう。が靜にさす如くに、「さん候とくにも参り度く候ひつれども、御宮仕への隙もなくて」つい三年の間、不本意ながら都に居た由をのべる。「心ならずも」の語は、「とくにも参り度く候ひつれども」の語と照應して、幾分なりともシテの心を和げんがために發せられたものであるが、感情が變に昂ぶつて居るシテは、すかさず其の言葉尻をつかまへる。「何といふぞ、殿に仕へる都住居を心の外といふのか、それが何の不本意であらうぞ」。我等はこゝに妻女の痛ましいヒステリーの爆發を見る感がある。歌右衛門の扮した孤城落月の淀君を思ひおこす。

「思ひやれ實に都の花さかり……」以下はシテの氣分に重大な變化がある。鋭い擲論と皮肉を夕霧にあびせかけたシテも、其の昂奮の頂上から再び我身の悲愁へと急轉直下に沈んでゆく。そして今までは嫉妬の情にかられて敵視して居た夕霧に、同情を求めて縋つてゆく心持となる。春の都の花さかりに、そなた方は暫し心のなぐさむ折々ですら、涙かはかぬ習に沈む自分の心情を察してくれといふ心である。下歌になつてからは、シテの心情は全く沈靜に歸して、再びしみじみと身の上をかこち歎く状態へと進んでゆくのである。

わびしい鄙の住居、哀れをそよる秋の暮、その淋しい感を象徴するやうな木草の凋落、さうした状況を叙し來つて、「かれ／＼の契も絶え果てぬ」人事に轉ずる所に、契絶えたる閨怨の情の、さびしい哀れや、はかない身の上

をしみじみと感じさせる筆力が生きてゐる。それを受けて「何を頼まん身の行方」と出る所又心の推移を巧に描いたと稱すべきであらう。「かれく」といふ掛詞の使用も嫌味がない。「三年の秋の夢ならば」を打返して、「憂きはそ  
のまゝ覺め」とつゞけ、恰もさむるやうに表現し來つて、それを「すして」と一轉して否定し去る所に、前句からの  
思想の流れを巧にあやつつて、餘韻豊かに次句へ渡す面白さがある。「思出は身に残り、昔は變り跡もなし」といふ  
對句的な修辭は、今までの叙述をこの二句に凝縮した表現であつて、その餘情から、「偽りのなき世なりせば」と古  
今集の歌へ移り、「愚の心やな、愚なりける頼みかな」と、シテ自ら吾が心の愚さをかこつ所へ移つてゆくあたり、  
文の連續として誠に申分がない。最後のシテの語は、吾が心の愚さをかこつ詞であるが、その裏面には、自分の信  
頼を裏切つた夫への痛烈なる怨恨の聲が聞かれるものであつて、此の段全體の情調に最後の楔を打込んだ強さがあ  
る。

## 能の型

前段の終は、ツレが揭幕に向つて、呼びかけ、後見座にクツログ所で終つた。ツレのクログと共に、囃子方では、會釋の鼓を打ちはじめ、それにつれてシテは幕をあげさせて橋掛に現はれる。面は深井か曲見の類であつて、妖艶といふ感は少しもなく、やゝ深く沈んだ心持を示す面をかける。この面にシテの位は充分に象徴された感がある。髪帯も無色（赤色の交らぬのを無色といふ。白色をいふのではない）であり、摺箔の着付の上に着流してゐる唐織も無色である。この無色といふのは、淋しさを表徴するもので、その装ひを一見ただけで、シテの心情や心持は大體推測せられる。梨の花といふ感じである。靜に幕をはなれたシテは、橋掛三の松の邊でとまり、正面に向き直つて、「それ鴛鴦の衾の下には、立さる思を悲しみ、比目の枕の上には、波を隔つる愁あり……」とサシ語を詠ふ。物思に充ちて、あはれにシツポリと、しかも上品に詠はれるこの語は、舞臺一面を引きしめて、觀客の心を靜寂の境に引き入れてしまふ。詠ひ進んで、「袖にあまれる涙の雨の、時間まれなる心かな」と面曇らして別れて久しき夫を戀ふる心の切なるを示す。この語の中に、後見座にクツロイで居たツレは靜に立上り、橋掛の一の松のあたり立ち、シテの詠切るゝと、「夕霧が参りたる由、それく御申し候へ」と、呼びかける。「何夕霧と申すか」とシテはツレの方に向き直り。「人までもあるまじ、此方へ來り候へ」といひつゝ、靜に進み出で、ツレと入り替りになつて、舞臺へ入る。シテは地謠席の前に、ツレは真中に、向ひ合つて靜に下に居る。夕霧を奥の間へ通して對面する心である。それからシテの「如何に夕霧、珍らしながら恨めしや……」の怨言がシメヤカなる……心持で發せられる。ツレは無邪氣に可愛らしく、「さん候、とくにも参り度くは候ひつれども……」と、節づけて詠ふ。こゝから此の段の後まで、シテツレ少しも動かないで、向ひ合つたまゝである。全く詠によつて氣分を生かし出してゆく所である。「なに都住居を心の外とや」は、ツレの詞を遮り止むる心持で、愁をふくむ中にもキツパリと詠はれ、「思ひやれ實には都の花さかり……」からは、愁の中にも麗はしい品位を以て詠はれる。地が「鄙の住居に秋のくれ……」と、シテの心情を詠ふ間は、シテは無言の中に魂の力を以て舞臺を引しめてゆく。上歌の終になつて、「愚なりける頼みな」と詠ふ頃になると、シテは、遠くから響き來る砧の音を聞きつけた心持で耳を傾け、地謠が終つて、「あら不思議や」と次の段に移る準備をする。此の段は型は殆どなく、詠所聞き所である。

シテ「あら不思議や。何やらんあなたに當つて物音の聞え候。あれは何にて候ぞ。ツレあれは里人の砧搗つ

音にて候。シテ「げにや我が身の憂きまゝに、古事の思ひ出でられて候ぞや。唐土に蘇武といひし人、胡國とやらんに捨て置かれしに、古里に留め置きし妻や子、夜寒の寢覺を思ひやり、高樓に上つて砧をうつ。志の末通りけるか、萬里の外なる蘇武が旅寢に、故郷の砧聞えしとなり。わらはも思ひや慰むと、とても寂しき吳服、あやの衣を砧に搗ちて、心をなぐさまばやと思ひ候。ツレ「いや砧などは賤しき者の業にてこそ候へ。さりながら御心慰めんために候はゞ、砧をこしらへて參らせ候べし。

シテカ、ム「いざ／＼砧搗たんとて、馴れて臥すの床の上、ツレ「涙かたしく小筵に、シテ「思ひをのぶる便ぞこ、ツレ「夕霧立より諸共に、シテ「怨の砧、ツレ「搗つとかや。

【語釋】 何やらんあなたにあたつて物音の聞え候 彼方の方向に、何であるかはわからぬが、物音が聞える、さいふ文脈である。「何やらん」をまつさきに出したのは、疑問を強めるだけであつて、「あらふしぎや」を來て「何やらん」を起してゆく所に、心理の推移の自然さがある。○砧 砧とも書く。觀世流では砧の字を用ひる。木(時に石をも用ひる)で作つた臺の上に布帛をのせて、小杵で打つをいふ。衣をやはらかにのばすためである。その音をきぬたの音といひ、打つ臺をきぬたといふ。語原は衣板から來たともいふ。打つ時節は多く一定しないであらうが、詩文の方では秋の末のやうであつて、和漢朗詠集などにも秋末の部にある。漢詩では搗衣ともいふ。この砧の音は昔から悲涼な感をそよるものとされてゐる。朗詠集のを二三あげて見ると、

八月九月正長夜、千聲萬聲無了時。

誰家思婦秋搗帛、月苦風凄砧砧悲。

(應天) 到天明、頭盡白、一聲添得一室糸。

白樂天。

擣處曉愁三月冷、裁將秋寄三塞雲寒。

菅茂馬。

風底香飛雙袖舉、月前杵怨兩眉低。

年々別思驚秋雁、夜々幽聲到曉鐘。

後中書王

これ等を見渡して見て感ぜられることは、砧を搗つことに、一つは婦人の悲愁のひびきを感じることである。衣と閑愁はこゝに結合せられてゐる。二つには、砧の音が聞く者をして悲愁の情に堪えざらしむることである。「一聲を聞く毎に、頭髮に一本の白髮を増し、曉に到らば頭髮悉く白くなるであらう」などいはれるのはその例である。本曲の眼目はこの搗衣にある。搗衣のもたらす閑愁の感にある。曲の典拠を詢する時に、私はこの曲は漢詩文から來たものであらうとのべたのは、このためである。○我身のうきまゝに——もの憂きにつれて、物うきのために。○古事——昔のこと、古のこと。故事といふほどの學問的な意味ではない。○唐に蘇武といひし人——前漢の武帝時代の人。漢書卷五十四、蘇武傳に詳しい。尙平家物語卷二の終に蘇武といふ章があり、源平盛衰記卷八に、「漢朝蘇武事」として、その物語がのせられてゐる。諸曲作者などは漢書によつて故事を知るほどの學者でないから、平家あたりを讀んだものであらう。左に平家を引用する。

古、漢王胡國を攻め給ひし時(中略)次に蘇武を大將軍にて五十萬騎を向けらる。今度も亦漢の戰弱くして胡國の軍勝ちにけり兵六千餘人生擒にせらる。其中に蘇武を始として、宗徒の兵六百三十餘人、すぐり出いて、一々に片足を切つて追放たる。即ち死ぬる者もあり。程へて死ぬる者もあり。其の中に蘇武は一人死なざりけり。片足をば切られながら山に上りては木の實を拾ひ、里に出で、は根芹をつみ、秋は田面の落穂拾ひなどしてぞ、露の命をば過しける。田にいくらもありける雁ども、蘇武に見なれて恐れざりければ、此等は皆我が故郷へ通ふ者ぞかしと懐しくて、思ふ事一筆書て、相構えて、是れ漢王に得させよと言合めて、雁の翅にむすびつけてぞ放ちける。甲斐々々しくも田面の雁、秋は必ず越路より都へ通ふものなるに、漢の

昭帝上林苑に御遊ありしに、夕ざれの空うすぐもり、なにとなく物あはれなりける折節、一行の雁飛渡る。其中より雁一つ飛さがつて己が翅に結び付たる玉章をくひ切てぞ落しける。官人これを取て御門へ参らせたりければ、披て寂覽あるに「昔は巖窟の洞に籠められて三春の愁歎を送り、今は曠田の畝に被捨て胡狄の一足なれり。たごひ骸は胡の地に散らすと云とも、魂は二度君邊に仕へん」ミぞ書たりける。其よりしてこそ文をば雁書ともいひ雁札共名附けれ。

平家物語の文は、漢書に遠ざかること最も甚しく、全く日本的に作り直して居る。源平盛衰記は比較的漢書に近い。漢書に最も近いのは今昔物語の記事であらう。○胡國とやらん——胡國は支那北境の蕃地を指す。匈奴の地である。○故郷に留め置きし妻や子云々——蘇武が胡國に赴くに當つて、故郷に妻子をのこして行つたといふ事、並に其の妻子が夫を慕つて碣を打つたといふやうな事は、全然漢書蘇武傳には見えない。又文選に見える蘇武李陵の詩中にもない。是は我國に於て新撰朗詠集にはじめて見えることであつて詩人の想像に過ぎない。同書、秋、擣衣の條に、江都督の作として次の如き願文の一節があげられてゐる。雁雁繫書飛上林之霜、忠臣何在。上林は漢昭帝が雁を得た苑をいひ、忠臣は蘇武をさす。寡妾擣衣泣南樓之月、良人未歸。(寡妾は蘇武の妻をさし、良人は蘇武をさす) 平家物語、盛衰記、今昔物語等にはかゝる記事はない。

(因に云。蘇武が胡地に赴いたのは、匈奴を征する爲ではなく、匈奴の使節を送つて行つたものであり、彼が十六歳で胡地に赴いたといふも誤で、四十歳前後の年である。匈奴に捕はれた間は十九年間であるが、その原因も戦争に因るのではない。又蘇武の子も漢の方にありしは事に座して死し、後に胡國の婦人と幽囚中に通國といふ子をまうけてゐる。蘇武の妻子が別れを惜んだと文選の詩に見えるのは、この胡國に於ける妻子が、武の歸漢の際の事である。源平盛衰記などの文章は、これ等のことに關して大に誤つた所がある。

○夜寒の寢覺 胡國の夜寒に於ける蘇武の寢覺のわびしさを思ひやる意。○志の末通りけるか 妻子の至心が天地神明に通じたのか。○とてもさびしきくればとり「とても」は「とてもかくても」の略。如何とするも淋しきの身にせまり来る夕暮の意。「くればとり」は日の暮と哭服を掛け詞とした用法。哭服は往昔支那南方の吳の國より來りたる機織をいひ、次の「あや」の枕詞をするものである。哭服、漢服、は上代文化史に有名なる事實である。○綾の衣を碣に打ちて 漢の音に同じき故に、綾を用ひた。綾の衣は上流貴人のもの。慰みのためであるからこれを打たうといふのである。○心を慰まばや 心の助詞があるから、慰めばやとあり度い所である。しかしかゝる用例は謡曲に頗る多い。熊野に「共に心を慰まん」とある所に註した。○碣などは賤しき者の業 身分ひきき者の婦人は自ら碣を打つが、貴人はさることをしなかつた。○碣をこしらへて 碣を打つ用意をととのへて。製する意ではない。○なれて臥猪の床の上 臥し馴れたる床の上の意。臥猪の床は元來は本草などをしき散らして作つた猪の寢床をいふ語であるが、後には徒然草に見える様に、猪の歌詞となつた語である。従つて本曲の詞の用法は妥當でない。馴れて臥居の床の上の意に誤り用ひたのであらう。○涙かたしく小縫に「片しく」は衣の片袖を敷いて寝ることである。「衣かたしきひとりかも寝ん」の片しくである。従つてこゝは、涙にぬれた袖を片しき寝る床の意である。さ縫は狭き縫の意にも用ひられるが、さは接頭語と見て、單に敷くむしろ、しとね、などの意に用ふる場合が、歌文には多い。こゝは寢床をさす。「きりり」すなくや霜夜のさむしろに衣かたしき、一人かもねん」の歌を下に持つたもの。さむしろを片しきぬるといふ風に大和田氏が解してゐられるには從ひがたい。片しくといふ語は、兩方あるものゝ片方をしき寝る意である。即ち袖袂を片しくことはあるが、むしろを片しくなどいふことはないのである。○思をのぶる恒り 愁思を晴らし遣る手段の意。思をのぶるは、氣晴らしをすること。○打つとかや「打たんかな」の意に用ひたものであらうが、とかやは疑問の表現であるから、こゝの文句としては妥當でない。

【評釋】 以上は破の第二段の中の、更に細分した序の段に當ると思はれる。本曲は破の第二段が頗る長く、破の第三段が極めて簡結に出来て居る。従つて作者は破の第二段於にて最も力を盡してシテの閑怨を表現しようとする努力して居る。本曲の眼目は此の破第二段に存するといつても過言ではなからう。普通の曲は、破第三段が最も絢爛を極める所であるが、本曲は破の第三段は、次の急の段の準備と、破第二段の波瀾を、極點に導いて、陰慘悲痛なシテの死を示す所に用ひてゐる。従つて表現もなるべく簡にとつとめたものであらう。

此の破の第二段の序ともいふべき所は、五十嵐力氏も新國文學史に於て論じて居られるやうに、割合にまづい所がある。作者は前段のシテの悲しくも痛ましい感懐を一轉して、こゝに本曲の眼目である砧を持ち出さうとして居るのであるが、其の持出し方にやゝ妥當を缺く所があるのである。シテが砧の遠音を聞いて、「あら不思議や、何やらあなたに當つて物音の聞え候。あれは何にて候ぞ」といふ所である。砧の音は菅屋の里の如き鄙の住居であれば、秋の末にもなればいつも悲しい響をたてゝゐる筈である。シテがそれを今まで一度も聞いた事がないといふことは言へない筈である。それをあたかも始めて異様な物音を聞いたやうに叙した所は、どうしてもまづいとより評し得られない。この文を生かすには、私は砧の音を聞いた時のシテの感情の高潮を以てするが、唯一の方法であると思ふ。悲痛の極にあるが爲に、砧の音がふと何か他の物音の如くに聞きまがへられたと見るのである。それで夕霧があれは砧の音にて候と答へると、「げにや」と我耳の疑を晴らしたものと見る。この「げにや」は下にかゝる副詞ではなく、前を受け下を起す發語的な用法である。「我身のうきまゝに古事の思ひ出でられて候」といつて語り出す所は、蘇武に別れた妻女の物思ひである。蘇武雁札の故事ではない。そして蘇武の妻女が夫を哀み夫を戀ふる一

念に打つ砧の音が、萬里異域の夫の旅寐に聞えたといふ想像的な古事は、次のシテが砧を打つといふ直接的な動機を示すための用をつとめてゐるのである。

「妾も思や慰むと」以下は自然に流暢に前段からの情調の流れを受けて進んでゐる。「思ひ」は恨めしき思である。勿論恨めしさの上皮一枚剥ぎとれば、戀しさ慕はしさの思ではあるが、あらはれてゐる處は怨情である。身を焼き心を悶えしめる怨めしさ、それが幾分でも慰められるかと、砧でも打つて氣を紛らさうといふ心である。こゝにシテのやゝたしなみを忘れた感情の昂奮がある。それを示す語は「いや砧などは賤しき者の業にてこそ候へ」といふ夕霧の語である。夕霧といふ女性はこの場合シテと好對照をなす。しかし主人のヒステリックな有様を見ては、彼女は「さりながら」と一轉し、「御心を慰めん爲にて候はゞ、砧をこしらへて參らせ候べし」と、駄々ツ子を賺しなだめるやうな態度をとる。

「いざ／＼砧打たんとて」以下、シテ・ツレ掛合に歌ふ所であるが、文意はシテ一人の情懷である。「馴れて臥猪の床の上」の次に、「涙かたしくさむしろに」と重疊してゆく所に、「昔は夫婦むつまじく枕ならべた閨であるが、今は涙の袖を片しきさびしく獨ねる床」といつた様な氣分を醸成させてゐる所など、巧な修辭である。

地次第「衣に落つる松の聲、衣に落ちて松の聲、夜寒を風や知らずらん。シテ一聲「音信の、稀なる中の秋風に、  
地「愛きを知らずる夕かな。シテ「遠里人も眺むらん、地「誰が世と月はよも問はじ。シテサシ「面白の折からや、頃  
しも秋の夕つ方、地「牡鹿の聲も心すこく、見ぬ山風を送り來て、梢はいづれ一葉散る、空すさまじき月影の、

軒のしのぶにうつろひて、シテ「露の玉簾かゝる身の、思ひをのぶる夜すがらかな。宮漏高く立ちて風北にめぐりシテ隣妬緩く急に」して月西に流る。地「蘇武が旅寐は北の國、これは東の空なれば、西より来る秋の風の、吹き送れと間遠の衣擽たうよ。」

【語釋】 ○衣に落つる松の聲 衣は砧上の衣である。その砧の上に、松籟のサと吹き落ちるをいふ。松の聲は風の松の梢を吹いて響かせる細々たるひびきをいふ。松の聲が落ちるとは松ぶく風が吹き落ちることである。 ○衣に落ちて松の聲 次第の文は同じ七五の文句を繰り返すのが常式であるが、こゝはそれを巧に變へてゐる。文の變化の妙巧なりと評すべき所である。落つると落ちてとの間に、又氣分の相違も感ぜられる。落つるには現在風々と吹き落ちつゝある感があり、落ちてといふと、一しきり吹き落ちた後に來る風のこゝみやみの靜寂が聞かれる。 ○夜寒を風や知らすらん 吹き來る松風が、夜寒を人にしみじみ感ぜしめるやうであるの意。夜寒の語亦含蓄が深い。單なる夜の寒さといふ以上に、何となくふり捨てられた哀れた者の感ずる悲涼の氣も交るやうである。前句に「松の聲」といひ、此句に「風や」としてあるのは、松風といふ文字を二つに分つて巧に配置したものとといへよう。 ○音づれの稀なる中の秋風に憂きを知らする夕かな 文は、音信の稀なる中に秋風のうきを知らする夕かなの意である。「音信の稀なる中」とは、夫と我との間に音信の殆ど絶えてしまつた二人の中をさす。それを音信の稀なる中の秋風とつゞけることによつて、音信絶えた二人の中といふ以上に、その音信絶えたのは、人の心に秋(厭き)風が立つてであるといつた様な語感がひびく。秋風に男女の間の愛情の變ることを連想するのは、歌の方では古今集以來の常套である。全體の文意は、「さなきだに夫よりの音信もなくて心痛ましき折からに、松吹く秋風までが悲しくおとづれて、身の憂きを知らする此の夕よ」の意。 ○遠里人も眺むらん 遠里人もあまねく此の月をながめるであらう。(其のながめる遠里人の中には戀しくも恨め

しい我夫も居るであらう) ○誰が世と月はよもとはじ 月は無心に照らしてゐるものであるから、誰の夫婦中にかゝる物思があるのかといつて問ふてくれることは、よもあまるいといふ意。世は男女の中をいふ語である。隈なく照らす月の無心さに一度はうらめしき感を起すのである。 ○面白の折からや こゝより以下はやゝ月に興じた所である。 ○牡鹿の聲も心すこく見ぬ山風を送り來て 秋の夕暮、牡鹿の心すこき聲を、目に見えぬ山風が吹き送り來つての意。それを牡鹿の聲が目に見えぬ山風を送り來るさいつたのは、例の謡曲に多い文章のあやである。このあやから次の「梢は何れ一葉ちる」が巧に生かされてゐる處など、巧妙を極めた修辭といふべきであらう。 ○梢は何れ一葉ちる 鹿の音に吹き送られ來つた風に、ほろりと一葉落ちし梢は何れやらの意。 ○空すさまじき月影の軒の忍ぶに移ろひて 空にすさまじく照り渡る月光が、軒端に生ふる忍ぶ草に照り映つての意。「すさまじ」は荒涼たる意である。 ○露の玉簾かゝる身の思をのぶる夜すがらかな 忍草における露の玉は、さびしく月の光を宿してゐる。あゝかゝる果敢なき我身の、夜すがら擽衣に憂さを晴らすことよとの意。玉簾は玉を飾つた簾をいふが、こゝでは、「露の」をうけて「露の玉」とつゞき、下のかゝるといふ語を呼出す序詞の役をつとめてゐるだけで、玉の簾の意はない。 ○宮漏高く立ちて風北にめぐり、隣妬ゆるく急に」して月西に流る 新撰朗詠集、秋夜の條にある後中書王(村上帝の皇子具平親王)の詩、「宮漏高低風北透、(イ送)隣妬緩急 月西傾」を少し變へて用ひたものである。宮漏は内裏の水時計である。漏は漏刻のことで、古昔時刻を測定する道具。その仕掛は、銅の壺をまうけ、それを漏壺といふ。その蓋に穴ありそれに箭を挿して立てる。これを漏箭といふ。箭の幹に四十八の刻みがある。これを漏刻といふ。さて他の壺から水が漏つて滴り入り、その水の溜るに従つて箭が次第に上つて。刻みがあらはれる。一晝夜四十八刻として、一時を四刻にして時をはかるのである。「宮漏高く上り」といふと、時が経つて箭の高く上つたことをいふ。「風北にめぐり」は風の方向が北風となる意。隣妬緩急は隣で打つ砧の音は或時はゆるやかに或時は急にひびきの意。月西流は月の西方に傾くことをいふ。 ○蘇武が旅寐は北の國 蘇武の赴き

留つて居た所は北方の胡國。○是は東の空なれば「是」は我が夫をさす。「東の空」は九州芦屋の里からは京都は東方にあたる故にいふ。我が夫の居所は東帝都の方であるからの意。○西より来る秋の風の吹き送れと 秋風は西より吹くものとせられてゐる。春は東風、夏は南風、冬は北風である。折しも西より来る秋風に託けて吹き送らせるやうにとの意。吹き送るは砧の音を吹き送るをいふ。○間遠の衣打たうよ 間遠の衣は綾方のあらくして、糸目の間の粗い衣をいふ。それと、間遠に打つことを掛けてある。たよわき腕にゆるく打つをいふ。前に「綾の衣を砧に打ちて」とあつて、こゝに「間遠の衣打たうよ」とあるのは、一寸矛盾のやうであるが、前のは「吳服」を受けて綾と出し、此の度は、緩く間を隔て、打つことに掛けたために間遠の衣といつたので文章のあやの上から来た表現の相違である。

【評釋】 以上を破第二段中の破の部分とする。本曲はこゝで愈々中心に入るのであつて、此の部分と後の急に當る部分とに於て、絢爛の妙を極めるのである。

最初の地の次第、及びシテの一聲に伴ふ地の掛合、即ちシテのサシ謠までに、砧の段の中心をなす所の三つの情調が描かれて居る。その三つの情調が絡みあひ縫れあひ錯綜し合つて、砧の段全體の情調の流れをかたづくるのである。先づ地次第の「衣に落つる松の聲、衣に落ちて松の聲、夜寒を風や知らすらん」は、其の折からの風趣を示す。こゝには、松風の響が砧上に落ち來つて夜寒身に沁むことをのべるのであつて、何となく身にしみ入る秋の夜風の情調がこの地次第の中に於てかもし出される。次に、シテ一聲の「音づれの稀なる中の秋風に」と地の「憂きをしらする夕かな」は、其の松風身に沁む秋夜に於けるシテの感懐である。こゝでは情調は、單に物さびしい秋の夜寒といふ以外に夫よりの音づれの絶えた婦人の、堪え難い悶怨の情調を加へ來つて、物思ひに沈む佳人の力なく洩らす哀愁の溜息を聞く感じがするのである。第三に、「遠里人も眺むらん誰が世と月はよも間はじ」に到つて月を

點出して、シテの心を二千里の彼方に誘ひ去る。しかも全く月に憧れられる所まで行かしめずして、「誰が世と月はよもとはじ」と少し減入らせる心に無心に照り渡る月を思はしめる。謠の方ではこゝで打上げの囃子があつて、サシに入る。

「面白の折からや」以下、月に興じた心持でシテの心は少しづつほぐれて來る。文章の續き工合又えいはれぬ趣を示して、シテの姿を文の情調によつて描き出して居ることを感ずる。「牡鹿の聲も心すこく、見ぬ山風を送り來て」には、風の音にまじる鹿の音に耳傾けるシテの姿が見え、「梢は何れ一葉一葉ちる」の語に、ほろりと一葉落ちた梢を見上げる有様を思はせ、その見上げた形から「空すさまじき月影の」と月に眼を轉ぜしめるのも自然で、「軒の忍ぶにうつるひて」と、我軒端の忍ぶ草におく葉末の露の玉に、月の光を見る姿を彷彿せしめ「露の玉だれかゝる身の」と進めることによつて、再び遠き夫を思つて涙にひたる我身の上に想をうつして、力なくしほれるシテの姿が生かされてゐる。その間に、「牡鹿の聲も心すこく」「空すさまじき月」と、荒涼たる氣分をそゝる文字を交へて、情調のしめやかさを示し、シテの氣分を暗示してゐる處など味はひつきせぬ詞章といふべきである。

「宮漏高く立ちて」と朗詠の句のはさまれたのも、よく此の場の情味にあてはまつてゐて、些の唐突さもない。前句に夜の更け過ぎた趣を示し、後句に曉かけて西の山に傾く淋しい月の光と斷續して聞える砧の哀音とを忘ぜしめる。その妬の音を直ぐに受けて、「蘇武が旅寐は北の國」と起してゆく文にも連想の自然さがあり、「これは東の空なれば」と再び我身の上に取りなして、西より吹き來る秋風に、我が砧の哀しき音を都の夫に吹き送らせうといふのも、上藤らしい婦人のはかなき願事があらはれてゐて面白い。「間遠の衣打たうよ」は五十嵐氏ものべてゐられる如



く「此の場合、黒人のやうに活潑に打つては面白くない。たど／＼しく間違に打つて、始めて凄婉の情にうつる」のである。

「古里の軒端の松も心せよ。おのが枝々風音を残すなよ。今の砧の聲添へて、君がそなたに吹けや風。餘りに吹きて松風よ、わが心通ひて人に見ゆならば、その夢を破るな。破れて後はこの衣、誰れか来ても訪ふべき。きて訪ふならばいつまでも、衣は裁ちもかへなん。夏衣、うすき契はいまはしや。君が命は長き夜の、月にはとても寐られぬに、いざ／＼衣掃たうよ。かの七夕の契には、一夜ばかりの狩衣、天の河波立ち隔て、逢瀬かひなき浮舟の、梶の葉もろき露涙、二つの袖やしをるらん。水陰草ならば、波打ちよせようたかた。

シテ「文月七日の曉や、雪八月九月げに正に長き夜、千聲萬聲の、憂きを人に知らせばや。月の色風の景色、影に置く霜までも、心凌きをりふしに、砧の音、夜嵐、悲しみの聲、虫の音、交りて落つる露涙、ほろ／＼はら／＼と、いづれ砧の音やらん。

【語釋】 ○古里の軒端の松も心せよ、己が枝々に風の音を残すなよ。「夫の君の古里なる我が家の軒端の松も、我がために心して呉れよ。汝の枝といふ枝に、嵐の音を残さずして、東の方に吹き行かしめよ」の意である。「古里の」は夫の住み馴れた古里の意であつて、吾が家をさしてゐる。「心せよ」はよく氣をつけよの意。西より吹きくる風を、枝々に遮りさめめることなかれの意を、「嵐の音を残すな」といつたのも趣ある表現である。○今の砧の聲そへて、君がそなたに吹けや風。「風よ、今我が夫戀しい思に打つ處の砧を音を伴つて、夫のゐます部の方に吹きゆけよ」の意。「聲そへて」は前に「嵐の音を残すなよ」とあるを受け

て、嵐の音に砧の音をたぐへての意を示す。○あまりに吹きて松風よ、吾が心、通ひて人に見ゆならば、その夢を破るな。前の「君がそなたに吹けや風」を受けて、「しかし松風よ、吾が夫を思ふ一念が通じて、夫の夢に吾が見ゆる事もあるならば、あまりに強く吹いてその夢を破るやうなことはしてくれな」の意。「あまりに吹きて」は「破るな」にかゝる副詞句である。○破れて後は此の衣、たれかきても訪ふべき。「破れて後は衣を誰が着よう。それと同じく、折角の夢が中途に破れて、吾が一念の通じることがないならば、吾身を不問に思つて夫が来、訪はれるといふことがどうして有り得よう」といふ文意。「破れて後は此衣誰か着べき」といふ意と「夢破れて後は、此の我を誰か来訪ふべき」といふ意を掛けてある。能に於ては、「此の衣」と、自分の左袖を出して見る型があつて、「此衣」が吾身を指したものであることを、はつきり示すのである。○きて訪ふならばいつまでも衣は裁ちもかへなん。前を受けて文意は二重に結んでゐる。即ち「來りて、我を訪ふならば、いつまでも自分は契を新しくしよう」といふ意に、「着るといふのならば、いつまでも衣を裁ちかへて、新しくしよう」といふ意をからませてゐる。○夏衣うすき契はいまはしや。「夏衣」は前からの衣の縁で出したもので、この語で衣、といふ文飾の最後をとぢめると同時に、次の「薄き」の序詞としたのである。夏衣は薄い衣であるから、かゝる序に用ひた。意味は「夏衣の薄きにも比すべき、我等夫婦の薄き契こそ思はしいことである」の意である。○君が命は長きよの。前に薄き契と縁起わるい語を用ひたので、それを祝ひかへる心持で、「我夫の命は秋の夜の長きが如く長かれ」といつたのである。長きよは夜と世をかけてゐる。そして「長き夜の」は次につゞいて、月の形容詞的修飾語を作るやうに掛詞させられてゐる。○長き夜の月にはとても寝られぬに云々。秋の夜長の月を見ては、君戀しさの思がつのつて、とても寝られさうにもないから、いざ／＼衣を打たうよの意。○彼の七夕の契には牽牛織女二星の故事である。この二星は一年に一度天の河を渡つて相逢ふことを許されるといふ面白い傳説となつてゐる。支那の淮南子といふ書に、「鳥鵲填河成橋度織女」とあり、我國には奈良朝時代から詩歌によまれてゐる。尙たなばは織女

星をさしていふ例が多い。古事記の中にすでに、「天なるや、おまたなばたの、うながせる、玉のみすまる……」などよまされてゐる。○一夜ばかりの假衣 一年にわづか一夜だけの假の逢瀬といふ意を、衣の縁語を用ひて狩衣としたのである。○天の河波立ちへだて、逢ふ瀬かひなき浮舟の、梶の葉もろき露涙 「その逢ふ瀬もやがてはかひなく天の河の河波に立ちへだてられて、もろくもこぼれ落つる涙の露に、二つの袖はしをれるであらう」といふ文脈である。「河波立ちへだて」は二星の契を、河波が立ちへだてるのである。さなきだに短き夏の夜、逢ふかと思へば又別れねばならぬ。その後は又一年の長きに亘つて河波は二星のへだてをするが故である。「逢瀬かひなき浮舟」のは逢瀬のはかないことをかひなきといひ、それを「權なき」に掛けて「浮舟」に連ねたのである。浮舟から梶を出し、梶から梶の葉を出した。梶の葉は七夕の夜に、それに歌などを書いて織女星に手向けることがあるので、七夕には縁のある物である。梶の葉のもろく落ちる所からもろくを出し涙のつゆのもろくこぼれ落つることとに連ねつゞけた文飾である。「二つの袖」は大和田氏は二星の袖としてみられるが、自分は織女星の双袖と見度い。この文章がシテが我身のはかなさに、天上の織女星を思ひおこしてゐるからである。○水かげ草ならば波うちよせよたかた 牽牛星が若し水陰草であるならば、天の河波よ、泡沫と共に、織女の岸邊に打ち寄せよといふ意である。「水陰草」は水のかげに生ふる草の意で、和歌では殆ど天の河についてのみ詠まれてゐる。新勅撰集、秋にも、「天の河水かげ草におく露や、あかぬ別れの涙なるらん」といふ歌がある。萬葉集によまれてゐる「水かげ草」は古義の説によると、「みこもりぐさ」で水の分派する所に生ひたる草であるといふ。○文月七日の曉や 前の「天の河波立ちへだて……二つの袖やしほるらん」を受けて、「その七夕のあかぬ別は文月七日の曉であるが」と起し、我が悲しみは八月九月の夜長云々と下の句につゞけてゆく文である。○八月九月實にまさき長き夜、千聲萬聲の憂きを人に知らせばや 「八月もすぎ九月にも入つて、げに長々しき秋の夜、夫を思うて千聲萬聲の砧を打ちつくす我が心憂きを、無情き人に知らせ度いものであるよ」との意である。この文は、和運期詠集、秋の部にある白樂

天の「八月九年正長夜、千聲萬聲無了時」を下に持つて書いた文章である。○月の色風のけしき、影に置く霜までも心すこき折ふしにシテ再び眼前の状に眼を轉じた所である。「月の色といひ風のけしきといひ、月光に照されて白く輝く霜に至るまで、見るもの聞くもの一つとして心すこからぬは無き折ふしに」の意。○砧の音夜風、かなしみの聲虫の音、まじりて落つる露涙 「砧の音に交る夜の風、我が悲しみ泣く音に交る虫の聲、更にそれらの物音にまじりて落つるは、果敢なき露や我が涙」の意である。○ほろ／＼はら／＼と、いづれ砧の音やらん ほろ／＼はら／＼は露や涙の落ちる擬聲的形容である。「いづれ砧の音やらん」は砧打つ手を止めて靜に聞き入る心である。

【評釋】 以上は本曲破の第二段の中、急の部と稱すべき所である。前の所と共に謠曲文としては誠に得がたき名文と稱すべきものである。

「古里の軒端の松も……」以下しばらくの間は、「西より來る秋の風の吹き送れと、間遠の衣打たうよ」の文を受けて、砧打ちつゝあるシテの、感じ易く傷みやすい心づかひの哀れさをよく示して居る。「軒端の松も心せよ、己が枝々に嵐の音を残すなよ。今の砧の聲をへて君がそなたに吹けや風」と呼びかけるシテの心は、吾が悲しい思を都の夫に知らせ度さの一心から、砧の音の悉くを都の夫に吹き送ることを乞ひ願つてゐるが、不圖我が一念の通じて夫の夢に見える事もあらうかと思ふと、「吹けや風」を松風に命じた事が、とりかへしのつかぬ失錯をした如く感ぜられて、矢も盾もたまらず、「あまりに吹きて松風よ、吾が心通ひて人に見ゆならば、その夢を破るな」と再び松風に哀願する。如何にも心弱くオロ／＼としてゐるシテの心情を寫し得て神に入つて居る。「破れて後はこの衣、誰か來ても訪ふべき」の語、矛盾した二つの願を連發した我身の粗忽さを詫びつゝ、さうした願をしなければならな

つた理由を、松風に向つて言ひ含めて居る様な感がある。「来て訪ふならばいつまでも衣は裁ちもかへなん」は、夫が我が淋しさを來り訪ねてくれる場合を想像して、さすが自分も今までの怨みつらみを全く打ちすて、いつまでも契を新しくしようと、やゝ希望の光を仰いだやうな心持であるものゝ、又現實に歸るに、二人の薄い契のほかない悲が胸にせまつて來て、「夏衣うすき契は思まはしや」と、減入らざるを得ない。減入つて居るかと思ふと、不圖口を洩れた「薄き契は思まはしや」の語が、何か不吉な事の讖でもあるかの如き恐怖心が湧き起つて、「君が命は長き世の」と縁起を祝ひかへる語を發せざるを得なくなる。この動き易く感じ易く波の如くに動搖して定まらぬ心理、それによつてシテの傷める胸のなやみは餘蘊なく描かれ盡して居ると稱すべきであらう。さうした物思に満ちた心では、「月にはとても寐られぬ」も、もつともと感ぜられ、「いざ／＼砧打たうよ」といふ語は、極めて悲しい響を我々の胸に傳へるのである。

「彼の七夕の契には、一夜ばかりのかりころも」以下は、シテが我身の果敢ない契りに比して、天上の織女星の哀れな戀を同情する心持を叙してゆく。「月にはとても寐られぬに」と、空の月を仰いだ所から、二星相逢ふ天の川を點出し、その果敢なき戀をなげく姫星を哀れと感ずるやうに筆をすゝめてゆく所にも、作者細心の注意が見られる。「二つの袖やしほるらん」と織女星の双の袂の涙を同情する處から、「水陰草ならば波打ちよせようたかた」と天の川邊に生へるといふ水陰草を以て彦星をたごへ、川波に向つて、姫星の方へ打ちよせよと、及びなき願事を命ずるも自然で、その裏面には、我が夫を早く都より故郷へ連れ歸れよと、打ちつゝある砧の音に呼びかける心持をひゞかした處も、巧な文といふべきである。

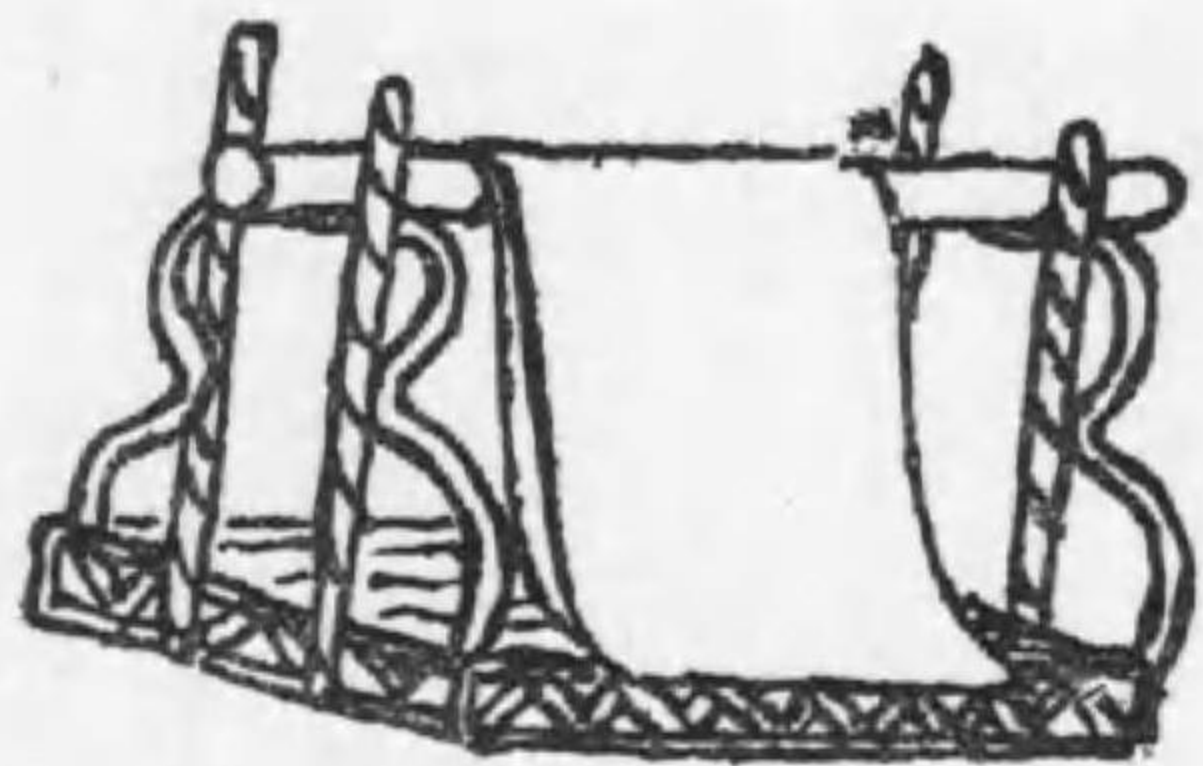
「文月七日の曉や……」以下は、前の様々の想像の中にひたつて居たシテが、再び現實の世界に歸つた處を描いてゆく所である。「文月七日の曉や」と、二星のはかなき別れの折をのべた語は、直に轉じて「八月九月、げに正に長き夜」と、我身の悲しき折節に進んで、其の長夜に、千聲萬聲のうらみつきぬ砧の音をたて、我が悲しさを都の夫に知らせようと、再び心とり直して砧に向ふシテの姿を示す。その次の、「月の色、風の氣色、影におく霜までも心すごき折ふしに」は、先づシテの眼に映する荒涼蕭條たる秋夜の情景をうつし、更に砧の音、それに交る夜風の響、すゝりなくシテの嗚咽、それに交る虫の聲々、更にそれ等に砧の音まじり落つる露や涙、さうした斷腸の思あらしめる悲しき物の音を錯落して描いた處、全曲の悲愁は此の僅々二行の中に描きつくされた感がある。「ほろ／＼はら／＼はら」の優艶な擬聲的諧調、亦極めて巧にそれ等の物音の響を訴へ、「いづれ砧の音やらん」と、最後に砧打つ手をしばしとどめて耳かたむけるシテの姿を描き出したのも、餘韻つきせぬ妙味がある。修辭的方面から眺める時、五十嵐の述べてゐられる如く、軒端の松も心せよ……」から「……其の夢を破るな」までの、松や風に呼び掛けた招呼法の巧な用ひ方。「吹けや風——あまりに吹きて、其の夢を破るな——破れて後は」誰れかきても訪ふべき——きて訪ふならば」の尻取文句の連鎖の面白さ。「ほろ／＼はら／＼はら／＼」の擬聲的詞藻の優美さ。それ等は此の文を味はふ上に充分に心して見るべき所である。

### 能の型

破の第二段の型を一括して述べて見よう。

前段の終に於て、「愚なりける頼みかな」の所で、シテが何か物音聞きつけた心持で耳を傾け多く形をとる。そし

て地謠がうたひ終ると、シテは面上上げて「あ不思議や、何やらあなたに當つて物音の聞え候。あれは何にて候ぞ」とツレに問ひかける。ツレがあれば里人の碇打つ音であると答へると、「實にや我身の憂きまゝに古事の思ひ出でられて候ぞや」とシテは正に直して、唐の故事を語り、夫を乞ふる妻女の一念が通つて、碇の音が萬里をへだてた蘇武の寐覺に聞えた由をいひ、「妾も思ひや慰む」とツレに向き、「綾の衣を碇に打つて心を慰め」ようといふ。ツレは碇を打つなどいふことは賤の女の業であると一度は諫めるが、又シテの心を思ひやつて「碇をこしらへて参らせ候べし」といふ。そしてシテ・ツレ共に立ち上り、入り替つてツレは地謠席の前に下に居る。シテは靜に歩んで後見座に行き、そこでクツロイで右肩の衣を脱ぐ。碇を打つ準備をする心である。その間に、後見は碇の作り物を持ち出で、脇座の前に据え置く。作り物の形は上圖のやうなものである。(流義によつては作り物を用ひぬのものもある。)



シテは準備が終ると仕手柱先の常座に立ちかへり、「いざ／＼碇打んとて、馴れて臥すの床の上」とサシの調子で謠ひ、ツレは地謠前に下に居るまゝで、「涙かたしくさむしろに」と受け、シテ「思ひをのぶる便ぞ」と謠ひつゝ碇の作り物に目をつけ、ツレが「夕霧立より諸共に」と謠ひながら立ち上つて碇の後方に行くと共に、シテも又常座から歩んで碇の前方に行き一怨みの碇」と謠ひ、ツレが「打つとかや」と謠ふにつれて、シテ・ツレ二人は碇をさしはさんで下に居る姿勢をとる。

地謠が「衣に落つる松の聲」と次第をシツボリと麗しく謠ふにつれて、シテツレは碇を隔て、向ひ合ひ、シテは眼を碇にそゝぐ。碇上に落ちくる松風に心とめる姿である。「夜寒を風や知らすらん」で、シテは面上上げて、ツレに向ふ。しみじみとせまる夜寒を感じる心である。それから地取り(地謠が低音で次第の文句を繰り返すのをいふ)の間に、シテツレ共に立ち上り、以前の所、(シテはシテ柱先きに、ツレは地謠の前に)歸る。これからシテの舞が、つた型がはじまるためであるが、心持としては、二人對座して碇を打つ心である。

シテは仕手柱先に立ち、「音づれの稀なる中の秋風に」と一聲を謠ひ出す、のび／＼と張つて謠ふ中にも何となく、しめやかさを帯びた趣である。地謠が「憂きを知らする夕べかなと引」とると、シテは其の場で開き、それかなイロへ(翔や働に似て極く簡單なもの)になつて、角に行き、左へ大きく舞臺を一廻りして仕手柱に来、遠里人も眺むらん」と謠ひつゝ右受け(右を向く形をいふ)で脇正面を遠く見やり、地が「誰が世と月はよも問はじ」と謠ふにつれて、「誰が」で一寸月を見やり、「世と月はよも問はじ」と右へ小さく廻つて、左右打込して開く。(左右は左向き右向く動作をいひ、打込は扇を前から打こむ様に下して、胸の所へ上げる型をいひ。開きは、二三足後方へ體を開きつゝ退くをいふ。)それから、シテ「面白の折からや頃しも秋の夕つ方」とサシをうたふ。こゝからシテのやゝ月に打興じた心持があらはれる所であるから、サシ謠もサラリと麗はしく謠はれる。地謠が引とつて、期々と「牡鹿の聲も心すごく見ぬ山風を送り來て、梢はいづれ一葉ちる空すさまじき月影の」と謠ひ進むと、シテは月影を脇正面の方に見、「露の玉だれかゝる身の」と謠ひ、「思をのぶる夜すがらかな」と地謠になつて、面曇らし(やゝ伏目になる形)で、悲しみの心をあらはす。

地が「宮漏高く立ちて風北にめぐり」と謡ふにつれて、伏せた面を「宮漏高く」と上げて見上げる心を示し、次に「隣砧ゆるく急にして月西に流る」と謡ひつゝ、月の傾く影を橋掛の方に見やり、「蘇武が旅寐は北の國」と正面直し、「これは東の空なれば、西より来る秋の風の」と、又西の方角を橋掛に見やり「吹き送れと、間達の衣打たうよ」と夕霧に向つて詰足する。此處の所を先代觀世鐵之丞が演じた時の觀能印象を大和田氏が能謠秘訣の中に、極めて趣深くのべてゐられるから、左に引用しよう。氏の名文によつて此の能の面白味を感じて下されば幸である。

「宮漏高く立ちて」の高調子は、地謡いつもの青年團體にて、萬三郎これが主任となり、六郎その副となり、豊作、勇次郎、織雄、亥三郎、といふ顔揃ひ、イナ喉揃ひなれば、朗々と天まで響きのぼる心地して、愉快なること限りなかりしが、「隣砧ゆるく急にして」と、神さびたるシテの謡の繼ぎ出でたるは、是亦肺腑を貫く如く、更に胸を断たる、思あり。之を物に喻ふれば、前なるは木枯さつと落し來て梢の葉を大空高く吹き捲くるが如く、後なるは一嵐遠く吹き去りたる跡に、散りこぼれたる枯葉の音のなほ庭をめぐるとやいはまし。

「古里の軒端の松も」以下は、此の一曲の型所で誠に見ごたえのする妙所が多い。「いざ／＼衣打たうよ」とツレに詰足した所から「古里の」と正に直し、「己が枝々に風の音を残すなよ」で、指し廻して松の枝々を見まはす心を示し、「今の砧の聲そへて」と砧の作り物をとくと見、「君がそなたに」と胸ざしして、遠く見やり「吹けや風」と拍子一つ踏む。如何にも心あまつて松嵐に命する佳人の心が生かされた拍子である。次の「あまりに吹きて松風よ」で、前に指し廻した枝々の所を見、「我が心、通ひて人に見ゆならば、其の夢を破るな。破れて後は此の衣」と左の袖を出して見入り、「誰か來ても問ふべき」と再び砧に眼をそゞぐ。「來て訪ふならばいつまでも衣は裁ちもかへなん、

夏衣うすき契はいまはしや」と、指して角に行き、角取つて左へ大きく廻り、正後へかへり來り、「君が命は長き夜の、月にはとてもねられぬに」と、月を正面の上に見て聞き、「いざ／＼衣打たうよ」とツレに向ふ。「かの七夕の契には一夜ばかりの假衣」と正に直し、「天の河波立ちへだて、逢ふ瀬かひなき浮舟の、梶の葉もろき露なみだ、二つの袖やしほらん、水かげ草ならば、波打ちよせようたかた」と謡ひすゝむ間に、シテは右へ大きく廻り來つて地謡の前まで行き、そこから脇正面かけて、水陰草など見わたす心持で面つかつて見まはし、上扇となる。シテ「文月七日の曉や」とうたひ、地が「八月九月實に正に長き夜、千聲萬聲の愛きを人にしらせばや」と謡ひ進むに伴つて、シテの大左右、打込、開きなどの常型の型があり、「月の色風のけしき」と、角へ指して行き、扇うつむけかざして「影に置く霜までも」と、角柱の下の方に、置く霜を見、「心すこき折ふしに」と、左へ廻り脇正面に出で、「砧の音」と面下げて聞く心を示し、「夜あらし」と面上げ、「悲しみの聲虫の音」とシオリながら脇産前の作り物の前に行く。ツレも此の時立つて砧の後ろに行く。そして「まじりて落つる露涙」と、シテ、ツレ共に下に居て砧を見、「ほろ／＼はら／＼はら」と、扇を以てシテとツレと相互に砧を打つ型がある。こゝは一曲中の尤も趣深き所であつて、此の打ち方は、深い傳受があるといはれるものであつて、千聲萬聲の間に、露と涙と相和してこぼれおつる趣を生かし出す所である。打ち終ると、砧杵さしてゐた扇をすて、「何れ砧の音やらん」と正面直して聞き入る姿にかへる。上手に演ぜられる時には尙シテの耳には、松風の遠くひびき残れる如き感じが生きる所である。(寶生流では、砧を打つことなく、シテツレ向あつて、じつと聞き入るだけの簡素な型である。謠曲詞章の意味を生かし出したものとして見れば、私はこの單に聞き入るだけの型の中に無限の味がある如くに思はれる)

ツレ詞「いかに申し候。都より人の参りて候が、この年の暮にも御下りあるまじきにて候。シテ「怨めしやせめては年の暮をこそ、偽ながら待ちつるに、さてははや真に變り果て給ふぞや。地」思はじと思ふ心も弱るかな。上歌「聲も枯れ野の虫の音の、亂るゝ草の花心、風狂じたる心地して、病の床に伏し沈み、遂に空しくなりけり。遂に空しくなりけり。(中入)」

【語釋】

- 都より人の参りて候が 都の主人の許より使者が参りましたが。
- あるまじきにて候 あるまじき由にて候の意。
- 偽ながら待ちつるに 偽とは思ひながらも、猶若しやと思ふ希望をかけて待つて居たのに。
- さてははや それではもはや。
- 真に變りては給ふぞや 實際に夫は心變りせられて、我を見すてしまはれたよ。
- 思はじと思ふ心も弱るかな 縷の望も絶えて頼に氣力も脱けおち、それと共に、「夫の事などは忘れよう思ふまい」と思つて我慢してゐたその心さへも弱り果てたことよ。
- 聲も枯野の虫の音の 泣く音も今は枯野の虫の音の如く弱り衰への意。聲も潤れることを枯野にかけ、枯野より秋の末に弱りゆく虫の音を點出したのである。
- 亂るゝ草の花心風狂じたる心地して 心は、秋の花野の草花が野分木枯に吹き痛めらるゝ如くに、亂れくゞて、遂には物狂はしくさへなり果ての意。
- 病の床に伏し沈み 病氣となりの意。
- 遂に空しくなりけり 遂に歸らぬ人となつてしまつたの意。

【評釋】

前段に於て絢爛の美を極め、波瀾の妙をつくした其の後を受けて、此の破の第三段は極めて簡結に、しかも餘韻盡させず綴られてゐる。前段との對照からして、尙一層この段の緊密さが感ぜられるのである。此の段の中心は芦屋某の妻の死を寫すにある。亂れんとする心、發狂せんとする心を強ひて抑へて、碇にわづかの思をやつて一

縷の望みを年の暮れにつないで居る折ふし、つれなき都の音信は忽ちその果敢なき望を絶ち切つてしまつた。前段に於けるシテの悲戀の苦惱を充分に味はつた讀者には、此の都よりの音信が、如何に致命的な作用をシテに及ぼすかがあまりに明かである。「思はじと思ふ心も弱るかな」の一句、簡にして要を得てゐる。この中に全く絶望に陥つたシテの急激な衰へがはつきりと見える。上歌になつて、「聲も枯野の虫の音の、亂るゝ草の花心……」以下は、第三者の立場から寫した姿である。「秋の暮れ冬の始めを病の床に臥し沈み、枯野の虫、潤るゝ草の花と運命を同じうし、戀に亂るゝ心は木枯と共に狂じて、終に歸らぬ客となる。枯野の淋しき味はひ、亂れても花心を失はぬ趣、木枯しに狂じたる心凄さ、すべて謠曲特殊の品位と幽玄の味はひとを失はずして、閑怨悲涼の心持を活した處、筆力千鈞」三五十嵐氏は新國文學史に評してゐられるが、誠に同感である。

能の型

前段の終は、「いづれ碇の音やらん」と扇を捨て、聞き入る所で終る。そこでツレは立ち上り、シテの右の方に行き、下に居て、シテに向ひ、いかに申し候、都より人の参りて候が、此の年の暮にも御下りあるまじきにて候」さといふ。都よりの使の口上を取りつぐ心である。シテはツレに向つて、最も失望落膽した心持でしめやかに「恨めしやせめては年の暮をこそ、偽ながら待ちつるに、さては早や誠に變りては給ふぞや」と譎ひ、地がそれを承けて、最も低い調子で最も靜かに「思はじと思ふ心も弱るかな」と、謠ひ出づると共に、正面直して安座してシホル。思ひに堪へかねて遂に病の床に伏す心持である。上歌になつて、「風狂じたる心地して」より、シテは靜に立ち上り、面くもらしたまゝ、ツレに送られて靜に幕に入る。この冷たく靜に沈んだ中に、無量の力のこもる處、眞に名手を

俟つて生きる處であつて、砧の能の重い所以もこのあたりを見れば實にもとうなづかれるのである。かくてシテツレ入り終ると間狂言が出で、芦屋某の奥方がなくなられて愁傷なる義を語り、幕に入ると、急の段がはじまる。

後ツキ「無慙やな三年過ぎぬる事を怨み、引き別れにし妻琴の、つひのわかれとなりけるぞや。上敷替「さきだぬ、悔の八千度百夜草、悔の八千度百夜草の、陰よりも二度、歸りくる道と聞くからに、梓の弓の占弾に、詞をかはすあはれさよ。言葉をかはすあはれさよ。」

【語釋】 ○無慙やな あはれなる事よ。いたまじきかな。 ○引き別れにし妻琴のつひの別れとなりけるぞや 別れ／＼に住居してゐた妻との別離が、死別といふ悲しい事になつてしまつたの意。引き別れと妻琴とは縁語を以て文をかざつたもの。妻琴は爪琴で爪でひく琴であるが、それを妻にかけていつたのである。龍太鼓にも一契りあだなる妻琴のひきはなれいづくにか」といふ句がある。「つひの別」は死別。 ○さきだぬ悔の八千度 古今集、哀傷の部、閑院の歌に「さきだぬ悔の八千度かなしきは流るゝ水のかへり來ぬなり」の上の句によつた文。歌の意味は、詞書に「藤原忠房が昔あひしりに侍りける人のみまかりける時にとぶらひにつかはすとてよめる」とあることから見ても、「先立たずして、あとに取り残されたる悔しさが、繰返し／＼と悲しいのは、何故かといふに、流れてゆく水のやうに、死んだ人が二度と此世にかへり來ぬがためであるよ」の意である。此の歌を舊註では、「後悔先に立たず流水源にかへらず」の意と解してゐるから、本曲にもその意でとられたものと思はれる。従つて、芦屋某が「後悔して八千度の悔しさを感ずるも、それはもはやとりかへしのつかぬ事となり、妻の空しく死んでしまつてから、もはや百夜もすぎた」となげく心を示してゐると思はれる。 ○百夜草のかげよりも再びかへりくる道と聞くからに 百夜草は

菊の異名である。悔の八千度百千度といふ意に百が掛詞に用ひられてゐる。又百夜草は草の蔭を呼び出すために掛詞として下に連なつてゐる。交意は、「妻のなき後はや百夜もすぎた。せめて草葉の蔭より再び死者の魂の歸り來る道と聞くから 梓の弓にかけて、亡き妻と語らばう」とつゞくのであつて、百夜草そのものには何の意味もない。「草の蔭」は「草場のかげ」の意で、墓所黄泉の意に用ひられる。平安朝時代からの語である。「かへり來る道と聞くからに」は「死者の魂の再び此の世にかへり來る術であるといふから」の意。 ○梓の弓の占弾に 梓巫女のことを言つたものである。これは梓の弓をはじき神降しをすると、死者の亡靈がその巫女にのりうつつて、生きたる者と語をかはすのである。支那の古俗が我國に傳來して來たものといふ。うら弾は弓の頂上の方の弦をかける處をいふ。(末弾)。そこに亡靈の來り立つ意であらう。

【評釋】 以上は急の段の第一節である。此の急の段も三つに別れ、それ／＼序破急を踏んで進んでゐる。こゝは序の部に當る所である。この急の段に於ては、前に病死した妻女の靈が出現して、夫に無情の怨をのべ、又邪淫の罪によつて地獄の苛責を受ける苦痛を訴へるが、結局法華經の功力に依つて成佛得脱する」といふ事を演ずるのであるが、その亡靈の對象として、夫を舞臺上に點出するのが此の序の節に於ける任務である。

此の任務から見ると、此の序は少々整ひすぎる程に巧に出來てゐる。ワキを芦屋某とし、それが亡妻を悼んで、せめて梓巫女によつてなりとも言葉を交さうといふ所に、シテ出現の準備が極めて自然に出來てゐる。しかも芦屋某が、妻を捨てゝ顧みなかつたのは、別に都に色ます花があつたわけではなく、たゞ訴訟に熱申したためであり、悪意に妻を捨てたのではないといふ心持が、この序の部に色く出て居るのは、又シテが邪淫の業深く罪に沈むと

いふ心持によく照合してゐるのである。文章も簡結な中に、様々の掛詞の使用によつて、餘情を深めた處も注目すべきである。文章からいふと、觀世流の本文「三年すぎぬる事をうらみ、引わかれにし妻琴の」よりも、寶生流が、「さそこ契りし妻琴の、引わかれにしまゝにて」としてゐる方が、尙一層に良い事を感じる。

後ジテ、女直 一原「三瀬川、沈み果てにしうたかたの、哀れはかなき身のゆくへかな。標梅花の光をならべては、婆の春をあらはし地「跡のしるべの燈火は」シテ「眞如の秋の月を見する。」さりながら、我は那姪の業深き、思ひの煙の立居だに、安からざりし報の罪の、亂るる心のいとせめて、獄卒阿防羅刹の、標の數の隙もなく、打てや／＼と報の砧、恨めしかりける因果の妄執地「因果の妄執の思ひの涙、砧にかゝれば、涙はかへつて火焔となつて、胸の煙の焔にむせば、さけべと聲が出でばこそ、砧も音なく松風も聞えず、呵責の聲のみ恐ろしや。」

上敷「羊のあゆみ隙の駒、羊のあゆみ隙と駒、うつり行くなる六つの道、因果の小車の火宅の門をいでされば、めぐりめぐれども、生死の海は離るまじや。あぢきな浮世や。」シテ「怨は葛の葉の、地「怨は葛の葉の、歸りかねて執心の面影の、恥かしや思ひ夫の、二世と契りてもなほ、末の松山千代までと、かけし頼はあだ波の、あらずしなや空言や、そもかゝる人の心か。」シテ「鳥てふおほおそ鳥も心して、地「うつし人とは誰か。いふ。草木も時を知り、鳥獸も心あるや。げにまこと嘘へつる、蘇武は旅雁に文をつけ、萬里の南國に到りしも、契の深き志淺からざりし故ぞかし。君いかなれば旅枕、夜寒の衣うつゝこも、夢ともせめてなど、思ひ知らずや怨めしや。」

【語釋】 ○三瀬川沈み果てにしうたかたのあはれはかなき身行方かな——「三途の川に沈みはて、浮む瀬もなく、泡沫にも等しい哀れはかない我身の行方かな」の意である。「三瀬川」は三途の川ともいふ。人が死して初七日、奈廣王の廳に至る途次にある川で、その川に緩急の三つの瀬があり、生前に於ける罪業の如何によつて、渡るに三途の別ある故にこの名がある。つまり死者が死後に渡る川である。十王經の説。「沈み果てにし」は此世での罪のために、三途の川を渡り得ずしてそれに沈んでしまつたの意。「うたかたの」は、川の縁語であつて、同時に次のあはれを呼び出す序詞をなしてゐる。うたかたは水の泡であるから、「あはれ」の序詞となる。「身の行方」は死後の我身の行末有様をいふ。○標梅花の光りをならべては婆の春をあらはし——此の句は詩經、召南の詩の中、標有梅の故事を引いてゐる。詩經の句は、

標有梅其實七分。求我庶士迨其吉兮。  
標有梅其實三分。求我庶士迨其今兮。  
標有梅頃筐之。求我庶士迨其謂之。

である。これは梅の落ちて木にあるものゝ少いのを見て、女子が婚期の過ぎゆくことを感じて、我を妻としようと思す人は、早速に申し込んでほしいといふ意を歌つたものである。標梅といふ故事を出したのは、「支那には梅の實の落るを見て、婚期の晚いのを歎じたといふ話があるが」との意で、「花の光をならべる」は、婚期のおそくならぬ前に、結婚して、夫婦となり、その美しい一對の夫婦が、花の輝きにも似た楽しい時を持ったといふ意で、自分は支那の女とはちがつて女盛りになつて、夫と一所になつて、楽しくくらしをしたことをいつたものである。その楽しい時の有様を「婆の春をあらはし」といつたのである。○跡のしるべの燈火は、眞如の秋の月を見する。——前句と對句をなした文である。意味は、「我が死後には、冥途の道の暗きを照すために夫が手向てくれる靈前の供燈が、眞如の月（迷ひを照破する悟りの光をいふ）となつて、秋月の如くさやかに、我が迷を照らし無明の



暗を除かうとしてゐる。」といふ意である。春と秋は對した語である。以上二句の對句によつて、この亡靈の懺悔に似た心持を出してゐるのである。即ち、「生きてゐる折には、婚期のおそきを嘆ずる女も世には多いのに、自分は丁度盛りの時に夫と契をむすんで、娑婆の春の光ともいふほどの楽しい夫婦仲であり、死後には、其の夫が追福に供へてくれる燈明が、冥途の暗い道を照して、自分の迷執をさます眞如の月と輝いてゐる」といふ意である。○さりながら我は邪淫の樂ふかき——「さりながら」は前の句をうけて、「自分としては満足してゐるべき身であつたのに、それにも拘らず」の意。邪淫は佛説の五惡の一つである。そしてそれは男女の戀情(邪しまな道をはづれた戀ばかりではない。夫婦戀ふるをも罪と見るのである)をさす。業も佛語でわつて身に行ひ、口にいひ、心に思ふこと一切をいふ。それが、來世に於ける果報の因となるものである。全體の文意は、「然るに自分は生前に於て、あまりに夫を戀ひ夫を怨んだその邪淫の業が深くして」の意。○思の煙の立居だに安からざりし報の罪の——  
 一文意は前からつゞいて「邪淫の業が深くして、戀慕の思ひ(思ひに火をかけてゐる)が胸に煙り、寸時も心をやすめなかつた其の罪が、今に報ひ來て」の意である。煙の縁語の立つを立居にかけてある。「立居だに安からず」は、立つても居ても、始終戀しさに心を慥まして居たことをいふ。亂るゝ心のいとせめて、——  
 文意、「その前世の報にて、死しての今まで心は糸の如く亂れの意。いとせめては、甚しくの意に糸を掛詞とし亂る心を糸の亂に托した表現である。○いと責めて獄卒阿防羅刹の標の數のひまもなく——「地獄の罪人をせめる惡鬼が、自分を甚しく責めて、笞を以て隙もなく無數に我身を打ち苦しめる」との意。獄卒は地獄にて罪人を呵責するを司る者をいふ。阿防羅刹あぼうらせつはその獄卒である。梵語(Avritaksas)の音譯。牛頭人首で兩脚は牛蹄、力壯にしてよく山を排し、剛鐵劍を持すといふ。標は人を鞭打つ道具である。○打てやくと報の妬、恨めしかりける因果の妄執——「前世に夫を怨んで妬に思を晴らした報に、今は獄卒に妬をつきつけられて打てやくと責められる、誠に前世に於ける妄執の因果が今に報うかと思へば、前世の妄執が恨めしい」の意。○因果の妄執の思ひの涙、妬にかゝれば涙はかへつ

て火焰となつて——「かゝる業果を受けるに到つた前世の妄執を悲しむ涙が、獄卒につきつけらるゝ妬の上にかゝると、その涙は直に火焰に變じ」の意。○胸の煙の焰にむせば叫べど聲の出でばこそ——「胸の煙の火焰にむせばために、呼べど叫べど全く聲は出ない」の意。「胸の焰」は、曾て夫を怨んだ思が、今は煙や火焰となり、それにむせばこの意である。○呵責の聲のみ恐ろしや——「聞ゆるものは獄卒の呵責の聲ばかり、怖ろしや」の意。呵責は獄卒が自分を呵責することをいふ。○羊の歩み隙の駒、うつりゆくなる六つの道——「羊の歩み」は、屠所に引かるゝ羊の歩みをいふ。涅槃經にある故事である。選きことの例として出した。「隙の駒」は莊子の知北遊篇に出た故事で、連やかなる譬へである。熊野の「春の隙ゆく駒の道」の條參照。「六の道」は六道をいふ。地獄道、餓鬼道、修羅道、畜生道、人間、天上、の六つをいふ。人々は前世の業報によつて、此の六道を輪廻するといふ佛説である。全文の意は、「人の死後に輪廻して移りゆくは、地獄、餓鬼、修羅、畜生、人、天の六道であるが、その輪廻すること、或は屠所の羊の歩みのやうに速きもあれば又、白駒の隙を過ぐる如く速なるもある。」の意。○因果の小事の火宅の門を出でざれば、めぐりめぐれども生死の海は離るまじや、あぢきなの浮世や——「因果の小事」は因果となり果が又次の果の因となる如く、因果がめぐりめぐりする事を車にたとへたのである。「因果の小事」は「めぐりめぐる」につゞいてゆく文である。「火宅の門を出づ」といふのは、煩惱や迷執を斷絶して悟りの境地に入ることをいふ。典籍は法華經譬喻品にある。熊野の「これも思ひの家の内」の條參照。○生死の海は離るまじや——生死の海は又生死の苦海ともいふ。生れては死しては生れ、六道に輪廻して解脱すること能はざる苦の境涯を海にたとへた佛語である。生死の海を離れるとは、煩惱を脱して、彼岸(正覺涅槃の境地)に到ることをいふ。離るまじやのやは詠歎の助詞。○恨は葛の葉のかへりかねて執心の面影のはづかしや——「葛の葉の」は「恨み」「かへる」等の枕詞としてよく用ひられる。此葉は風に翻つてよく葉裏を見せる處からうらみ(裏見—恨)やかへる(ひるがへる—かへる)の枕詞となつたのである。「かへりかねて」は一方では恨の晴れがたまきことをいひ、又

一面には亡靈。此世に於ける執心のために冥途へ歸り兼ねることをいつてゐる。「執心の面影のはづかしや」は、夫を戀ひ恨む執心のために、夫に面影を見せることの恥しさよの意である。全體の文意は、「恨は晴れやらず夫への執心に、冥途へ歸ることもせずして、渡ましき面影を夫に見せる恥しさよ」の意。○思ひ夫の二世と契りてまほ、末の松山千代までさかけし頼みはあだ波の、あらよしなや空言や——「二世さ契る」は夫婦の契りは二世といふから、彼の世までも變らず夫婦とならうと契ることをいふ。「末の松山千代までとかけし頼」は、古今集、卷二十の「君をおきてあだし心を我もたば末の松山波もこえなん」や、後拾遺、戀、清原元輔の「契りきなかつたみにそでをしぼりつゝ末の松山波こさじとは」を下にもつたものであらう。即ち「尙行末千代までも、あだし心を持つことなく契を結ばうと我を頼みに思はせ給うたあの契は」の意。「あだ波の」はその契が空なるものであつたといふ意。末の松山は、かける、あだ波等の縁語である。「あらよしなや空言や」あつたらぬ偽り言であつたよの意。全體の文意は、「我が夫が二世まで變らず夫婦と契り給ひても、尙あき足らぬ思ひに、末の松山にかけて、千代までも契り給ひ、我を頼め給ひしあの誓約は、全く徒なることとなりしよ、あよしなき言葉よ」の意である。○そもかゝる人の心か——我が夫の心は、そもくかくまで薄情なる心なりしかの意。○鳥てふ大をそ鳥も心してうつし人とは誰かいふ——萬葉集卷十四、「鳥てふ大をそ鳥のまさでも來まきぬ君をころくとぞ鳴く」鳥といふ大虚言つき鳥が、やつても來られない君を、「子等來」とほんとうらしくも、御いでのなるやうに、うそをついて鳴くよ」の歌を下に持つてゐる。「うつし人」は眞情のある人間の意。全體の意は、「古人が大虚言鳥といつた鳥でさへも、さすがに氣をつけて、君の知き人を眞情ある人であるなどとはいふまい。」の意。○草木も時を知り——心なき草木すらも、春秋の時節を知つて、約束をたがはず花咲き實のるものであるとの意。○鳥獸も心あるや——「鳥や獸にも心あるものよ」の意。前の鳥も空言する君をうつし人とはいはじに對していふ。餘意に、しかるに君は約をたがへ無情なりとの心持がある。○げにまこと嘘へつる、蘇武は旅雁に文をつけ、萬里の南國

に到りしも、契りの深き心ざし、淺からざりし故ぞかし——「げにまこと」は「鳥獸も心あるや」を受けて、「げにまことや」と發語的に言ひ出した語。前に譬言した蘇武は、旅雁に文を託して、其の雁が萬里をへだてた南國に到つたといふのも、蘇武の志の親切なためであるとの意。「契の深き志」としたのは、前に蘇武の妻の切なる志が通じて、胡國の蘇武の寢覺に砧の音が聞えたといふ故事的な引用をしたのに對して、今度は、蘇武が妻女との深き契を思ふ情が淺くないために、旅雁が文を故郷に持参したのであるといふ風に、詠曲作者は考へて作つてゐるのである。その意に用ひたから次に、「君いかなれば」と出るのである。○君如何なれば旅枕夜寒の衣うつ、とも夢ともせめてなど、思ひしらすや恨めしや——「戀しく恨めしい我夫よ、妾が寒夜に砧を打つて秋風に思を託したことを、君は都の旅枕に於て、現には知ることが出來ずとも、せめて夢にでも思ひ知つてくれるべきであるに、何故現はもとより夢にも思ひ知り給はなかつたのか、誠のない君の心が恨めしい」の意。「如何なれば」は「思ひしらすや」にかゝる語。旅枕は他郷に於ける旅寝をいふ。夜寒の衣うつ、つとと掛詞としてある。「夢ともせめて」は「せめて夢にやりとも」の意。「など」は「如何なれば」の意。「思ひしらすや」にかゝる。

【評釋】 以上が急の段に於ける破の部に當る所であつて、同時に急の段の眼目をなす要所である。こゝでは後ジテとして現はれるのは、妻女の亡靈である。其の後ジテの演ずる處は、邪淫の業によつて地獄道に沈淪して居る女性の陰慘な物凄しい呵責の苦痛であり、其の苦痛の中にありながら尙も夫を恨む女性の一念である。全體の空氣は中入前の柔かい優しい女性的な幽玄さに比して、凄味に満ちた陰慘な靈的超絶的な幽玄さである。その全然相反した氣分の對照によつて、二段組織の能の全體的な變化を心ゆくまでに發展させてゐる作者の創造力に先づ注意すべきであらう。

「三瀬川沈み果てにしろたかたのあはれ果敢なき身の行方かな」の後ジテの一聲は、一聲としての役目をよく果し

てゐる。元來一聲は、シテが舞臺にあらはれて、其の場の風景なり又シテの感懐なりを、引きしまつた短い句の中に、全體的に打出して諳ふのを特色としてゐる。こゝの一聲はまさにシテにして亡靈の感懐である。その冥途三途に沈淪する哀れはかなき我身の上をなげく心持は、やがて又此の段の一の主要な契機をなしてゐる。次に標梅と眞如秋月を持ち出したのは、シテの懺悔に似た心持を出したものである。前世に於て一時的に夫の無情を怨んで悶死したが、死後に其の罪業の報ひに逢うては、はじめて怨むべきでもない事をうらんだといふ事が明になり、自分の生前に夫と親しく契つて娑婆の春に酔ふた事、死後の手向を怠らすしてくれる夫、それを思へば、我が怨は淺はかなものであつたと、後悔の心持になるのである。「標梅花の光をならべては」の故事の用ひ方は、やゝ臆腫として意味の把握が困難であり、修辭として上々のものとは稱し難いのが缺點といふべきであらう。

「さりながら……」以下、前世の報に地獄の責苦をうけることを叙してゆくが、前段の中心であつた砧が、此の段に於ても主要な役目を演ずる所に注意すべきであらう。獄卒に責められて砧を打つ、妄執の思の涙が砧にかゝれば火焰と變ずる。煙や焔にむせんで叫ぼうとするも聲も出ない、砧の音もなく松風もなく、聞ゆるものは獄卒の呵責の聲のみ、かうした叙述は現代人の眼には一の想像として、別段の迫逼力を以て我々にせまる感じはないが、室町時代の人々には、有り得る事として、現實的な感じを以て恐ろしさが實感せられた事であらう。

「羊の歩み際の駒」以下、上歌になつてからは、陰惨な状景からやゝ離れて、六道輪廻の苦海をのべる。火宅の門を出でない者は、どうしても生死の海をのがれぬといふのが、浮世の様であるといふ。こゝに後段キリへの伏線がある。

「怨は葛の葉の……」以下は、亡靈なほ冥途へかへりかねて、夫に向つて怨言をのべる所となり、描寫は現實的に變じる。末の松山を出し、萬葉の束歌を出し、夫に怨をのべる所、草木鳥獸なほ心ありといひ、蘇武の故事を又引用し來つて夫の薄情を恨む所、すべてが強く露はに表現せられてゐることに注意すべきである。生前の婦人、殊に身分ある婦人としては、これだけの露はなる怨言は決して吐かない所である。女性としてのたしなみと内氣と、それはすべてを抑制して表面はつれなさを装はふのが常である。それが一度靈的な存在と變ずる時、そこに現はれるものは強烈な怨恨であり嫉妬であり呪咀である。その相違點をよく現はしてゐる所を注目すれば、作者が後段に於て表現せんとした所のものを確實に把握し得るのである。

「法華讀誦の力にて、法華讀誦の力にて、幽靈まさに成佛の、道明かになりけり。これも思へはかり  
 ともに、擣ちし砧の聲のうち、開くる法の華心、菩提の種となりけり、菩提の種となりけり。」

【語釋】 ○法華讀誦の力——法華經を讀誦することの功力によつての意。昔は死者の靈を弔ふとか、幽靈の禍を去るとか、或は惡鬼退散の爲とか、すべて人力によつて成し難い事件があると、經文を讀誦する功力によつて、これを成しとげようとした。その中法華經は最も靈驗あらたかなものとして尊信せられてゐたのである。殊に女人成佛といふ點になると、あたかも法華經の一手指賣といふ有様で、その點でも尊ばれたものである。本曲が女人成佛であるために法華讀誦を出したのであらう。 ○幽靈まさに成佛の道あきらかになりけり——幽靈が成佛して、極樂に往生すべき道が明になり、成佛したりさいふ意。 ○これも思へば云々——これもよく考へて見れば、假初に砧を打つて思をのべたその砧の音の中に、佛の御法の心きざし、それが華を開い

て、遂に成佛する種となつたものである。「法の華心」の中に法華といふ文字を伏せたのである。「菩提」は迷を去つて悟りに入ることといふ。「菩提の種」は成佛正覺の原因の意である。

【評釋】 此の一節は急の段の急の部に當る所で、俗にキリと稱せられる處である。普通の曲ではキリは可成り文にも型にも變化の所い所となつてゐるが、本曲では、急の段の結尾として、又全曲の結尾として、それまでの波瀾に充ちた曲の展開を、簡結に重々しく閉ぢめる役をつとめてゐるので、詞章にも型にも特別に取り立てゝ言ふ所はなし。

此處ではシテの性質が第三回目の變化をとつて居る。即ち破の段に於けるシテは、戀慕の惱みに悶える婦人であり、急の段のシテは邪淫の業報に惱み地獄の呵責に泣く亡靈である。處が此のキリに於ては、法華經讀誦の功力によつて、迷執怨恨を離れて菩提に入つた靈であり清淨無垢に化したる女菩薩である。平穩靜寂そのものである。破の段に於ては戀慕の思が昂じて死に到り、急の段に於ては幽霊となり無情を怨んで夫に迫る、この二度まで高められた情調の切迫に、最後の落つきをあたへて一曲を幽玄に閉ぢるものとしてながめて見ると、シテの性質にこの第三の變化を加へたことの意義がはつきりとうなづかれるのである。これは又やがて佛教思想が骨髓までしみ入つて居た室町時代の觀者に、涙にひたる安心と落つきをあたへたものであると思はれる。

### 能の型

中入となつて間狂言が<sup>本</sup>出で、北の方の空しくなつた心中をあはれむ意味の物語があつて退くと、後ワキの出現と

なる。芦屋某が、妻の病死を聞いて歸り來り、亡者痛はしさに梓巫子にかけて、妻の靈と語るのである。

ワキは前の時の素袍の上を取り掛絡（禪僧などの掛ける袈裟に似たもの。兩肩からかはて胸間にたれる）を掛け珠數を持つて出る。佛門に入つた心持を示すのでたちである。太刀持を従へて出で、舞臺の真中に靜に下に居、「むさんやな三年すぎぬる事を恨み、引き別れにしつま琴の、遂に別れとなりけるぞや」と述べ、「先き立たぬ悔の八千度百衣草の……」以下の待詔を詔ひ終つて、合掌する。妻女の佛事を修し、亡靈をなぐさめる心である。

ワキが合掌し終つて脇座につくと、囃子方は一聲の囃子を打ち出し、それにつれて後シテは幕からあらはれる。面は泥眼（泥眼）又は瘦女（瘦女）を掛け、無色鬘帶、若付は摺箔で縫箔の腰巻、白綾衣の坪折（坪折）といふ装束で扇をさし、杖を持つて居る。そして一の松まで來正面向いて、最も陰澁な調子で、「三瀬川沈みはてにしうたかたの、あはれはかなき身の行方かな」と靜に歌ひ出す。如何にも靈女の出現の感が流れ出づる如き感のする所である。地詔がしつとりと、「跡のしるべのもしびは」と詔ふ中に靜に舞臺に入り、「眞如の秋の月を見する、さりながら、我は邪淫の業深き……」と詔ひ進み、「恨めしかりける因果の妄執」とワキに向く。地になつて「因果の妄執の思ひの涙、砧にかゝれば」と砧を見る心持あり、「涙はかへつて火焰となつて」とシオリながら正面に出で、「胸の煙の焔にむせば」と杖ついたまゝ右手を胸にあてゝ下を見、「叫べど聲が出でばこそ」と面上げて叫ばんとするも聲の出ぬ苦しみの思入れをし、「砧も音なく」で耳をすまして砧を聞く心あり、「松風も聞えず」と、橋掛りの松を見やり、「呵責の聲のみ」と後へシザリながら杖すて、「恐ろしや」と下に居る形となり兩手耳にあてゝ、恐ろしき聲におびえる心持を示す。こゝらの型は一々に詔の文句を形に生かし出したもので、誠に見てゐて深遠き型所である。